陸前高田市文化財調査報告　第31集

中沢遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業泊地区関連遺跡発掘調査

2017年

岩手県陸前高田市教育委員会

中沢遺跡発掘調査報告書

防災集団移転促進事業泊地区関連遺跡発掘調査

1号住居跡出土華燭土器

序

岩手県陸前高田市は、四季折々の豊かな自然の恩恵を海、川、そして北上山系の山々から享受することにより発展してまいりました。それは縄文時代の昔から現在まで変わることなく続いております。このような営みのもと先人が積み重ねてきた歴史や文化は、国指定史跡の中沢浜貝塚を始めとする貝塚遺跡、墨書土器・刻書土器が出土する古代遺跡、そして中世に築造された城館跡などの市内に点在する約２７０か所の「周知の埋蔵文化財包蔵地」として大地に刻まれております。このような歴史文化遺産を保存し後世に伝え活用していくことは、現在を生きる私たちの責務です。

一方、豊かな地域づくりや市勢発展のために実施する公共事業や社会資本整備が必要であることも事実です。しかし一度破壊された遺跡は二度と元には戻りません。陸前高田市教育員会では、開発事業および東日本大震災後の様々な復興事業と貴重な遺跡の保護の両立を図るため関係機関と事前の協議を行い消滅する遺跡については発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、防災集団移転促進事業の広田町泊地区における宅地造成事業に伴い実施した中沢遺跡の発掘調査成果を収録したものです。今回の調査では、縄文時代の集落とそこを造成して作られた中世と思われる未報告の城館跡が確認されました。

本書が、地域の方々をはじめとした学術研究、教育活動に広く活用され、ひいては文化財保護思想の普及啓発、郷土愛の醸成に役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書刊行にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に深く御礼申し上げます。

平成29年3月

陸前高田市教育委員会

教育長　山　田　市　雄

例　　言

1　本報告書は、岩手県陸前高田市広田町字中沢７－７・８－１他に所在する中沢遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2　本遺跡の発掘調査は、防災集団移転促進事業（泊地区）に伴う事前の発掘調査である。調査は岩手県教育委員会の指導を受け、陸前高田市復興対策局と陸前高田市教育委員会との協議を経て、陸前高田市教育委員会が実施した。

3　岩手県遺跡登録台帳番号・市町村遺跡番号と調査時の遺跡略号は以下の通りである。

岩手県遺跡登録台帳番号 NF88－1278　市町村遺跡番号 237　遺跡略号 NZ13

4　調査期間・調査面積・調査担当者は以下の通りである。

調 査 期 間　平成 25 年 12 月 5 日～12 月 26 日　平成 26 年 1 月 7 日～3 月 31 日

調 査 面 積　1637.47 ㎡

調査担当者　葛西 智義（深川市教育委員会より派遣）安井 宣也（奈良市教育委員会より派遣）

阿部 泰之・今井 宏隆（福岡市より派遣）

遠藤 勝博・後藤　円（陸前高田市教育委員会生涯学習課発掘調査員）

5　室内整理期間と整理担当者は以下の通りである。

室内整理期間　平成 28 年 5 月 1 日～12 月 28 日　平成 29 年 1 月 4 日～3 月 31 日

整 理 担 当 者　佐藤 典邦（陸前高田市教育委員会生涯学習課学芸員）

6　本報告書の遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は動物遺存体を除いて佐藤が撮影した。発掘調査後の記録整理は各調査担当者が行い、遺構・遺物図の補足・修正、遺物実測図・拓本の追加、石器器種分類の訂正は佐藤が行った。

7　本書の執筆分担は以下の通りである。編集は IllustratorCs6 PhotoshopCs6 を使用して佐藤が行った。

Ⅰ ～ Ⅳ ・ Ⅵ　佐藤　典邦

Ⅴ　動物遺存体　山田凜太郎（京都大学大学院人間・環境学研究科）松崎　哲也（奈良文化財研究所）

山﨑　健（奈良文化財研究所）

8　分析鑑定及び委託業務は次の方々依頼した（敬称略）。

石質鑑定　白土　豊（大船渡市立博物館）

基準点・水準測量…（有）さくら設計　ラジコンヘリ航空写真撮影…（株）タックエンジニアリング

石器（一部を除く）・石製品・土器（SK9・SI 1 注口土器のトレース）の図化…（株）ラング

9　現地調査時の SX 1 は SI 1 に、SX 2 は SU 1 に変更している。なお、遺物注記は現地調査時の遺構記号により、現地調査時に水洗作業と並行して行っている。

10　現地調査・報告書作成にあたり、次の機関と方々から指導助言・協力をいただいた。

岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課　大船渡市立博物館　熊谷常正(陸前高田市文化財調査委員)

八木光則（陸前高田市文化財調査委員）

11 本遺跡の発掘調査記録及び出土遺物は陸前高田市教育委員会において保管している。

凡　　例

1　挿図に使用した方位北は座標北を基準としている。

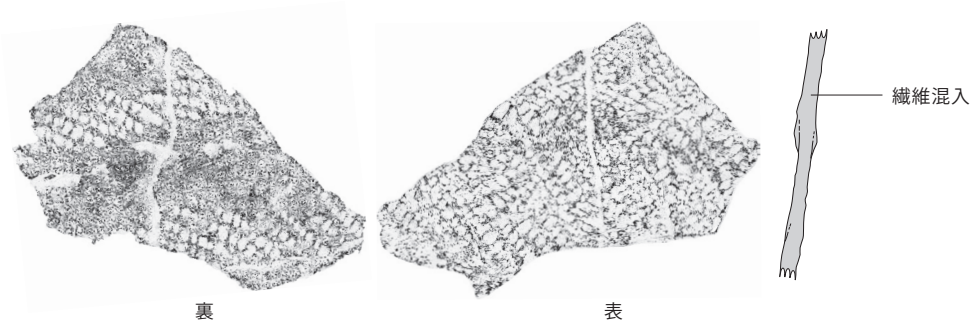
2　遺構断面図のレベルは海抜標高を示す。

3　検出遺構の表示については次の略号を使用し、種別ごとに番号を付した。

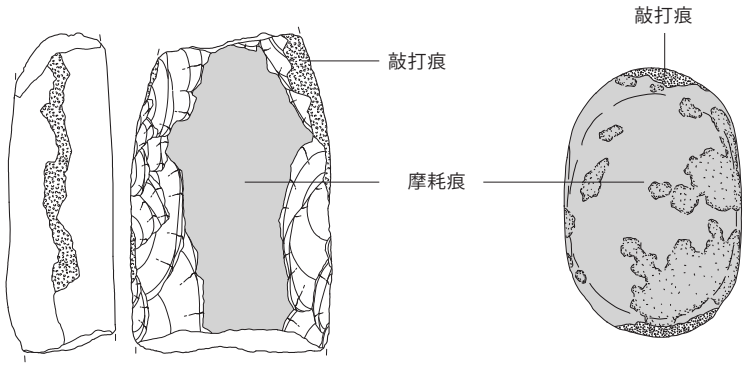
SA：柵列　SB：掘立柱建物跡　SD：溝跡　SI：竪穴住居跡　SK：土　坑　SP：柱穴・ピット　SU：遺物集積

4　土色については「新版標準土色帖」（小山・竹原 1997）を使用した。

5　縄文土器のうち、繊維混入と表・裏面に施文のある個体は下図のように表示している。



6　石器のうち、摩耗・敲打痕のある部分は下図のように表示している。その他の調整・使用痕については本文中において説明している。



7　遺構・遺物計測値は特別に記述のない限り、現存値を表記している。単位は表中に示した。

8　本文中の縄文土器分類・遺構時期の記載については、下記のように表記した。

1類　縄文早期沈線文土器　2類　縄文早期表裏縄文施文土器　3類　縄文中期大木9式土器
4類 縄文後期門前様式土器　5類　縄文後期貝鳥・宮戸1b式土器　6類　縄文後期宝ヶ峯式土器
土器器形は、a深鉢　b鉢　c浅鉢　d台付鉢　e華燭形　f注口　g壷　とした。

9　基本土層については調査時の記録はないが、SU1の北側土層を基準とする。上層から表土・旧耕作土、以下、褐色粘土・明黄褐色砂質粘土(地山)、風化花崗岩（地山)である。

中沢遺跡発掘調査報告書

序
例言
凡例

本　文　目　次

Ⅰ　調査に至る経過・・1

1　調 査 の 経 緯・・1
2　調　査　体　制・・3
3　現地調査の経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3

Ⅱ　遺跡の位置と環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

1　遺跡の位置と地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
2　歴史的環境と周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

Ⅲ　調査と整理の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

1　調査区の設定・・11
2　調　査　方　法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
3　資　料　整　理・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11

Ⅳ　調 査 の 成 果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

1　竪 穴 住 居 跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15
2　土　　坑・・・15
3　　溝　　・・19
4　掘立柱建物跡・柵列・ピット・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・29
5　遺 物 包 含 層・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・33

Ⅴ　動 物 遺 存 体・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60

Ⅵ　総　　括・・67

報告書抄録

挿 図 目 次

第 1 図　中沢遺跡の位置（1/25000）　2
第 2 図　地形分類図（1/50000）　6
第 3 図　旧地形図（1/2500）　7
第 4 図　周辺の遺跡（1/25000）　8
第 5 図　中沢遺跡調査範囲（1/1000）　１２
第 6 図　1 区遺構配置図（1/200）　１３
第 7 図　2 区遺構配置図（1/300）　１４
第 8 図　SI 1 平面・セクション図（1/60）　１６
第 9 図　SK1・2・3 平面・セクション図（1/40）２０
第 10 図　SK4・5・6・7・8 平面・セクション図（1/40）２１
第 11 図　SK9・10・11・12・13 平面・セクション図（1/40）２２
第 12 図　SK14・15・16・17・18・19・20 平面・セクション図（1/40）２３
第 13 図　SK21・22・23・24・25・26 平面・セクション図（1/40）２４
第 14 図　SD1 平面・セクション図 (1/80・1/200）２７
第 15 図　SB1・SA4 平面・エレベーション図（1/80）３０
第 16 図　SA1・2・3 平面エレベーション図（1/80）３１
第 17 図　SU1 平面・セクション図（1/80・1/200）３３
第 18 図　SI 1 出土縄文土器（1/3）　３４
第 19 図　SI 1 出土縄文土器（1/3）　３５
第 20 図　SI 1 出土縄文土器（1/3）　３６
第 21 図　SI 1 出土縄文土器（1/3）　３７
第 22 図　SI 1 出土石器・土製品（4/5・1/2・1/3）３８
第 23 図　SK1・3・5・9 出土縄文土器・土製品（1/2・1/3）　３９
第 24 図　SK9 出土縄文土器・石器・石製品・骨角器（1/1・1/2・1/3）　４０
第 25 図　SK10・11・12 出土縄文土器・石皿（1/2・1/3）４１
第 26 図　SK12 出土石皿（1/3）　４２
第 27 図　SK12 出土石皿・砥石（1/3）　４３
第 28 図　SK12 出土大形磨石（1/3）　４４
第 29 図　SK14・15・18・20 出土縄文土器・石器・土製品（1/2・1/3）４５
第 30 図　SK21・22・24 出土縄文土器・磨石土製品（1/2・1/3）　４６
第 31 図　SK24・26・SD1 出土縄文土器・土製品（1/2・1/3）　４７
第 32 図　SD1 出土縄文土器・土製品（1/2・1/3）４８
第 33 図　SD1 出土石器・土製品　（4/5・1/2）４９
第 34 図　SD1 出土縄文土器・石器（1/2・1/3）　５０
第 35 図　SU1 出土縄文土器（1/3）　５１
第 36 図　SU1 出土縄文土器（1/3）　５２
第 37 図　SU1 出土石器・土製品（4/5・1/2）　５３
第 38 図　SU1 出土石器（1/2・1/3）　５４
第 39 図　SP70・79 出土石器（4/5・1/2・1/3）　５５
第 40 図　表土出土縄文土器・石器・土製品片口鉢（4/5・1/2・1/3）５６
第 41 図　メッシュ別貝類組成（MNI)　６１
第 42 図　メッシュ別魚類組成（NISP)　６２

表　目　次

第１表　中沢遺跡周辺の遺跡・・・・・・・・・・・９
第２表　１号住居跡土層注記・・・・・・・・・・１６
第３表　土坑観察表・・・・・・・・・・・・・・１９
第４表　土坑土層注記・・・・・・・・・・・・・２５
第５表　１号溝土層注記・・・・・・・・・・・・２８
第６表　ピット観察表・・・・・・・・・・・・・３２
第７表　遺物包含層土層注記・・・・・・・・・・３３
第８表　土製品観察表・・・・・・・・・・・・・５７
第９表　石器観察表・・・・・・・・・・・・・・５８
第10表　縄文土器観察表・・・・・・・・・・・・５９
第11表　中沢遺跡動物遺存体一覧・・・・・・・６４
第12表　メッシュ別サンプル重量（質量）・・・６５
第13表　メッシュ別同定結果（魚類以外）・・・６５
第14表　魚類同定結果・・・・・・・・・・・・・６６
第15表　出土遺物集計表・・・・・・・・・・・・６９

図　版　目　次

原色図版　１号住居跡出土華燭土器
図版１　（１）　中沢遺跡と中沢浜貝塚（北より）
　　（２）　中沢遺跡全景（西より）
図版２　１ SI１遺物出土状況・２ SI１遺物出土状況・３ SI１土層・４ SI１全景・５ SK１土層・６ SK４土層・７ SK５全景・８ SK６土層
図版３　１ SK７土層・２ SK8 土層・３ SK９土層・４ SK９貝層・５ SK９全景・６ SK10 全景・７ SK12 土層・８ SK12 全景
図版４　１ SK13 全景・２ SK14 全景・３ SK15 全景・４ SK16.17 全景・５ SK20 全景・６ SK21 全景・７ SK22 全景・８ SK23 全景
図版５　１ SK24 遺物・２ SK26 全景・３ SD１西端土層・４ SD１東端土層・５ SD１全景（西より）
図版６　（１）　SB１北西部（西より）
　　（２）　SU１土層断面（南より）
図版７　SI１出土縄文土器
図版８　SI１出土縄文土器
図版９　（１）　SI１出土石器・土製品
　　（２）　SK９出土縄文土器
図版10　SK９出土縄文土器・石器・釣針
図版11　SK12 出土石皿・磨石・砥石
図版12　SK14・SK20・SK21 出土縄文土器・土製品・土偶
図版13　SK24 出土縄文土器
図版14　SD１出土縄文土器
図版15　（１）　SD１出土縄文土器（表）
　　（２）　SD１出土縄文土器（裏）
図版16　（１）　SD１出土縄文土器
　　（２）　SD１出土土製品
図版17　SD１出土石器・腕輪形土製品
図版18　（１）　SU１出土縄文土器（表）
　　（２）　SU１出土縄文土器（裏）
図版19　（１）　SU１出土縄文土器（表）
　　（２）　SU１出土縄文土器（裏）
図版20　（１）　SU１出土石器
　　（２）　SU１出土石器
図版21　表土出土の縄文土器・土製品・石器・中世片口鉢
図版22　SK９動物遺存体

Ⅰ　調査に至る経過

1　調 査 の 経 緯

中沢遺跡は震災復興関連開発事業計画の実施個所に位置している。平成 24 年 8 月 21 日付教生第 713 号「平成 24 年度以降の震災復興関連開発事業計画に係る埋蔵文化財の取扱い協議について（通知）」により、岩手県農林水産部魚港漁村課と上記の内容についての協議を行い、災害復旧事業の予定地内に中沢遺跡が所在する事を農林水産部漁業漁村課に回答した旨、岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課総括課長から陸前高田市教育委員会教育長あて通知があった。

その後、平成 24 年 11 月 12 日付陸高復興第 78 号により防災集団移転促進事業の予定地に広田町が含まれるため、埋蔵文化財の分布調査依頼が陸前高田市長から陸前高田市教育委員会教育長にあった。これを受けて平成 24 年 12 月 10 日～11 日の期間、分布調査が実施された。結果、中沢遺跡の事業予定地全体が遺跡の主体部と想定されるため文化財保護法第 94 条による手続きが必要との回答を平成 24 年 12 月 17 日付陸高教生第 350 号で陸前高田市教育委員会教育長から陸前高田市長に行った。

平成 25 年 7 月 8 日付陸高復興第 145 号により陸前高田市長から岩手県教育委員会教育長あて文化財保護法第 94 条第 1 項による埋蔵文化財発掘の届出があり、これを受けて平成 25 年 7 月 12 日付教生第 4 －86 号により岩手県教育委員会教育長から陸前高田市長あて試掘調査を実施するよう勧告があった。続いて平成 25 年 8 月 5 日付陸高復興第 192 号により中沢遺跡の事業予定地内の試掘調査依頼が陸前高田市長から陸前高田市教育委員会教育長にあった。調査対象面積は 4675 ㎡である。

また、試掘調査予定地は急傾斜地崩壊危険区域に該当するため、平成 25 年 8 月 20 日付で急傾斜地崩壊危険区域内行為許可申請書が陸前高田市教育委員会教育長から沿岸広域振興局長に提出された。

試掘調査は平成 25 年 11 月 21 日陸前高田市教育委員会生涯学習課の発掘調査員 2 名によって実施された。22 本のトレンチを掘削し、竪穴住居跡・土坑を検出した。

続いて平成 25 年 12 月 5 日から本発掘調査を開始した（陸高教生 710 号　岩手県教育委員会教育長あて発掘調査の着手報告）。

第１図　中沢遺跡の位置　　（1/25000）

2　調　査　体　制

調査主体	陸前高田市教育委員会	
教　育　長	山田市雄	
総　　括	大久保裕明	（教育次長兼生涯学習課長）
事務局	伊藤真基	（同課生涯学習課長補佐）
	吉田幸喜	（同課生涯学習係長）
	桐木　亮	（同課主任主事・京都市教育委員会より派遣）
	曳地隆元	（同課学芸員）
調　査　員	葛西智義	（同課主査・深川市教育委員会より派遣）
	安井宣也	（同課主任・奈良市教育委員会より派遣）
	阿部泰之	（同課主任主事・福岡市より派遣　平成 24 年 4 月～平成 24 年 9 月）
	今井博隆	（同課主事・福岡市より派遣　平成 24 年 10 月～平成 25 年 3 月）
	遠藤勝博	（同課発掘調査員）
	後藤　円	（同課発掘調査員）
作業員	荒木コギク、荒木美智代、梅木良子、及川亜紗美、及川恵美子、大和田武喜、菅野貴恵、菅野トシヱ、菅野弘利、菅野由美子、熊谷望、後藤美知香、金野由紀夫、佐々木栄子、佐々木聡、佐々木のり子、佐々木美佳、佐々木道子、佐藤キヨ子、佐藤美代子、菅原とみ子、鈴木貞子、高橋景奈、高橋由美、戸羽さおり、戸羽由美、三嶋登喜子、村上菜穂子、村上紀子、村上由美子、山谷富助、横澤桐子、渡部アヤ子	

3　現地調査の経緯

平成 25 年（2013 年）

12 月 5 日：調査開始。1 区フラスコ状土坑再検出。

12 月 5 日～ 19 日：重機による粗掘り作業。

12 月 9 日：1 区検出作業。2 基のフラスコ状土坑確認。

12 月 19 日：1 区 2 基のフラスコ状土坑の清掃と検出状況撮影。

12 月 24 日：１区土坑２基精査。２区検出作業。

12 月 25 日：１区土坑の注記・記録と全掘作業。

12 月 26 日：１区土坑の完掘と記録作業。西地区、溝の検出作業。北側の谷地形から遺物出土。

平成 26 年（2014 年）

1 月　7 日 ～　9 日：2 区溝（SD１）と北端落込みの掘り下げ。

1 月 10 日 ～ 22 日：2 区溝（SD１）掘下げ作業。

1 月 24 日：基準点測量実施。２区遺構検出作業と北側落込み状部分の平面図作成。

1 月 27 日 ～ 30 日：遺構検出作業と２区平面図作成。

2 月　3 日 ～　4 日：遺構掘下げと遺構土層断面記録。

2 月　5 日 ～ 26 日：天候不良により、現場休止。

2 月 27 日 ～　3 月 14 日：遺構掘下げと遺構土層断面記録。

3 月 17 日 ～ 20 日：遺構掘削と写真・図面記録。

3 月 24 日：調査区清掃

3 月 24 日：空撮実施。

3 月 26 日 ～　3 月 30 日：遺構掘削と図面作成。

3 月 31 日：調査終了。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境

中沢遺跡は、広田半島先端に位置する小起状山地の大森山(標高147.2m)の西１㎞の地点にある。遺跡は小起状山地の周囲に広がる丘陵部に立地している。半島全体は白亜紀花崗岩を基盤としているため、遺跡の地山は風化花崗岩・花崗岩である。

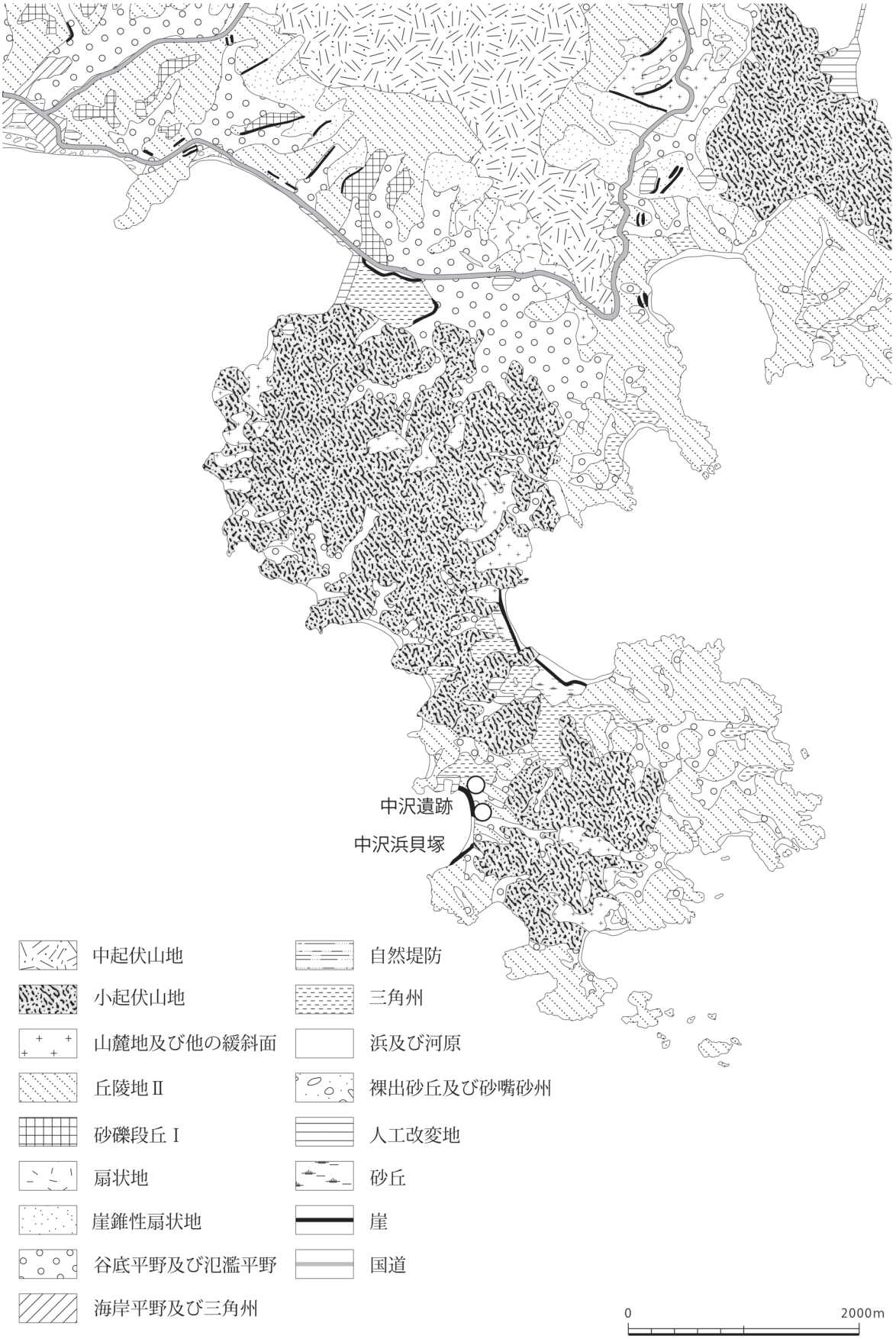
1950年代から70年に作成された旧地形図（第３図）は、広田漁港が整備される以前の遺跡周辺の地形を示している。250m南に所在する国史跡中沢浜貝塚とともに、西側の丘陵裾部は砂浜の海岸線である。この旧地形図には遺跡の立地する丘陵頂部の標高が 24m と表記されているが、防災集団移転促進事業のために作成された地形図では 22.44m であった（第５図)。70 年代以降、丘陵頂部の削平が進行したことがわかる。一方、標高 5・10m の等高線は、隣接する中沢浜貝塚の所在する丘陵裾部を巡っているが、標高 15m の等高線は分離している。中沢遺跡の立地する丘陵が周囲から独立した丘陵のような景観を見せている理由のひとつである。

丘陵の北側は急傾斜地崩壊危険区域にあたり、失われた斜面部のため丘陵全体が東西方向に細長い形状を呈している。北側斜面の崩落は早くから始まっていたと思われる。崩落によってできた窪地あるいは小規模な谷頭の部分が埋没してゆく過程で、縄文早期後葉を主体とする遺物包含層の形成がある（第７図SU１)。また、旧地形図にみられるように汀線に近接しているため、縄文海進の時期には波蝕による崩壊が進行したと考えられる。周囲の丘陵から分離したような現在の地形は海進時の浸食による要因が大きいように思われる。

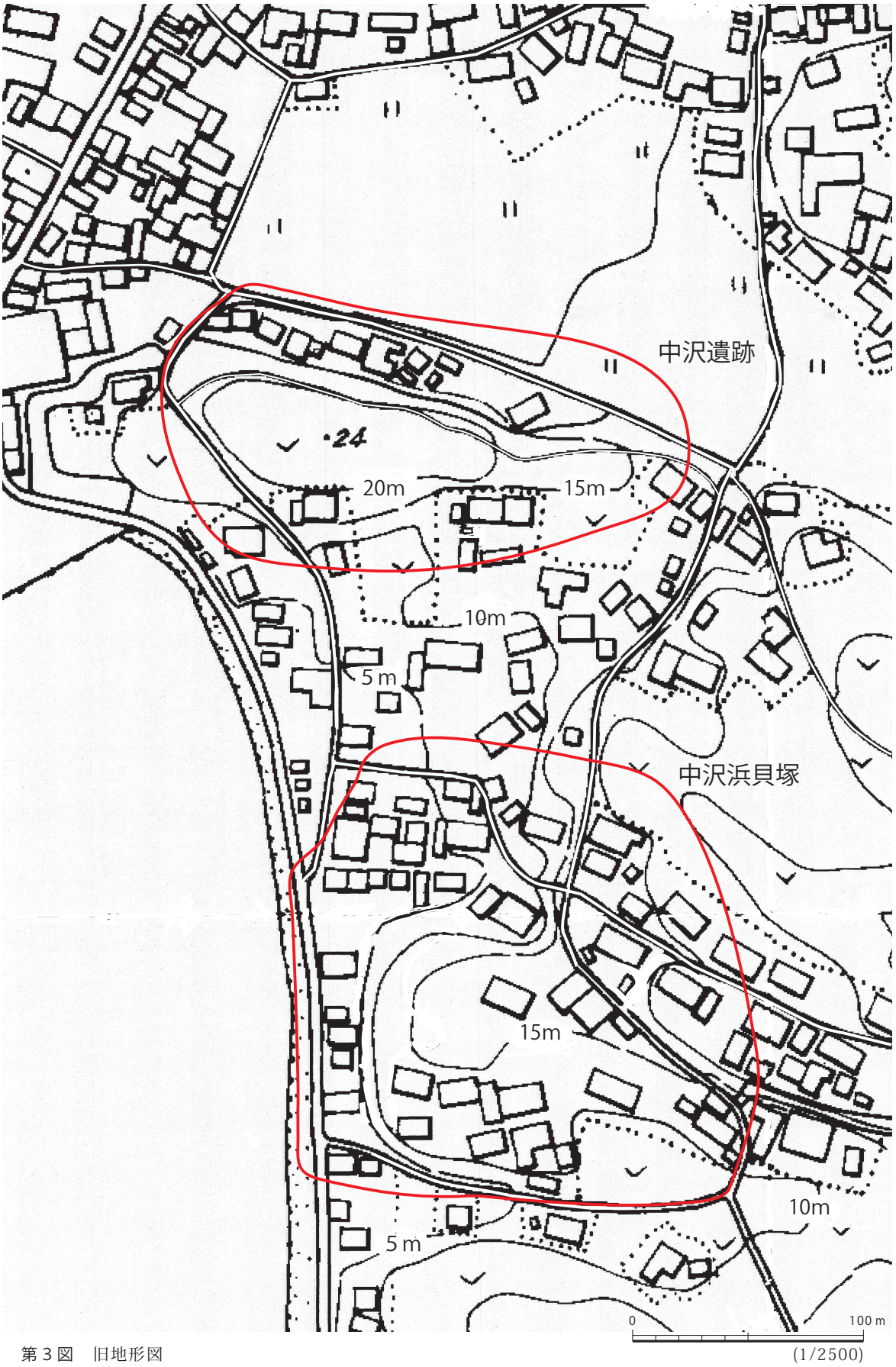
2　歴史的環境と周辺の遺跡

広田半島に所在する遺跡は丘陵地・山麓地および緩斜面に多く分布している。縄文時代の遺跡が多いが、数少ない弥生・奈良・平安時代の遺跡が位置する場合は、狭隘な三角州や谷底平野に隣接している（第４図・第１表)。

貝塚は、中沢遺跡周辺に国史跡中沢浜・久保・金室・岩倉・袖野Ⅰの存在が知られている。また、広田半島北西部には獺沢・大陽台貝塚が所在している。詳細は不明だが、中沢浜貝塚の南西 200m の丘陵部にも貝塚の存在が知られている（岩手県遺跡台帳検索システム　平成27年版)。中沢浜貝塚は


中沢遺跡
中沢浜貝塚
中起伏山地
小起伏山地
山麓地及び他の緩斜面
丘陵地Ⅱ
砂礫段丘Ⅰ
扇状地
崖錐性扇状地
谷底平野及び氾濫平野
海岸平野及び三角州
自然堤防
三角州
浜及び河原
裸出砂丘及び砂嘴砂州
人工改変地
砂丘
崖
国道
0
2000m
(1/50000)

第２図　地形分類図



第３図　旧地形図　(1/2500)

只出漁港
六ヶ浦漁港(袖野)
大野湾
恵比須崎
六ヶ浦漁港
広田町
大祝漁港
三鍋漁港
根岸漁港(岩倉)
根岸漁港
広田地区漁業集落排水施設
(広田浄化センター)
大森山
△147.2
黒崎温泉保養センター
黒崎神社
国民健康保険広田診療所
広田公民館
(広田地区コミュニティセンター)
広田小
高田高
広田中
広田保育園
羽根尻
明神崎
後浜
中沢浜貝塚
赤坂角地
刈田崎鼻
金宝崎
広田崎
青松島
椿島
ウミネコ繁殖地
0
1000m
(1/25000)

第４図　周辺の遺跡

縄文時代早期から弥生時代の遺跡として登録されているが、発掘調査で確認されている貝層の時期は前期から晩期である（佐藤正彦　1994）。

中沢遺跡は「岩手の貝塚」（岩手県教育委員会　1998）には中沢貝塚として登録されている。自然遺物としてアワビの記載がある。今回の調査ではフラスコ状土坑から貝層が検出されているが、他に廃棄された貝層の痕跡はなかった。北側斜面の崩落が著しいから、かつての貝層自体が消滅した可能性がある。

弥生時代の資料は主に土器である。中沢浜貝塚では、弥生時代前期・中期の良好な土器が出土している。小田野哲憲氏編年案のⅠa・Ⅰb期の土器群が主体をしめるが、後期Ⅳ期の出土例も数例知られている（小田野哲憲　1987）。中沢浜貝塚・中沢遺跡の北に隣接して広がっている泊の集落一帯は、小規模な三角州である。稲作が可能な環境があったように考えられる。また、半島北東部の長洞遺跡では、石切場出土と言われている壷形土器が知られている（細谷英男　1994　小田野分類のⅡ期）。弥生時代前期・中期の土器が多数出土した米崎町川内遺跡（佐藤正彦他　2003）と同様に広田半島にも弥生時代の比較的大きな遺跡が存在している。

また、今回の調査では中世の遺構・遺物も検出されている。広田半島には小館・高館・八幡館などの城館が多いが、調査区南斜面から検出された幅３ｍの溝を堀跡と判断すれば、中沢遺跡が城館として使われていた時期があったと考えられる。

第１表　中沢遺跡周辺の遺跡

番号	遺　跡　名　称	所　　在　　地	遺　跡　の　概　要
1	中沢	広田町字中沢	散布地　縄文土器（中期）
2	中沢浜貝塚	広田町字中沢	貝塚　縄文土器（早期～晩期）、弥生土器、石鏃、石斧、骨角器，骨類（魚、獣類）　昭和９年１月22日国史跡
3	詳細不明	広田町字中沢	貝塚　貝層
4	小館	広田町字泊	城館跡　郭
5	泊	広田町字泊	散布地　縄文土器（後期）　半壊
6	高館	広田町字大久保	城館跡　空堀、主郭、腰郭
7	赤沼	広田町字越田･後花貝	散布地　縄文土器（後期）　壊滅
8	内田	広田町字中沢	散布地　縄文土器
9	八幡館	広田町字泊	城館跡　郭、平場
10	久保Ⅰ	広田町字久保	散布地　縄文土器
11	久保貝塚	広田町字久保	貝塚　縄文土器（後・晩期）　壊滅
12	金室	広田町字集	貝塚　縄文土器（前期・晩期）
13	集	広田町字集	散布地　縄文土器（前期）

14	東館	広田町字集	城館跡　空堀
15	根崎	広田町字根岬	散布地　縄文土器
16	赤坂角地	広田町字赤坂角地	散布地　縄文　土器片
17	岩倉	広田町字岩倉	貝塚　縄文土器（後期）、貝層
18	黒崎	広田町字黒崎	集落跡　縄文・奈良・平安　縄文土器（後期）、土師器
19	大祝Ⅱ	広田町字大祝	散布地　縄文　土器片
20	大祝Ⅰ	広田町字大祝	散布地　縄文土器（後期）
21	蒲田Ⅱ	広田町字蒲田	散布地　縄文　土器片
22	蒲田Ⅰ	広田町字平畑	散布地　縄文土器
23	胡畑	広田町字山田	散布地　縄文土器（中期）
24	平館	広田町字平畑	城館跡　空堀、腰郭、主郭
25	花館	広田町字大久保	城館跡　郭
26	平畑	広田町字平畑	散布地　縄文土器
27	小屋敷	広田町字小屋敷	散布地　縄文・奈良・平安　縄文土器、土師器、土師質土器、陶器
28	袖野Ⅰ	広田町字袖野	散布地　縄文（前期～晩期）・奈良・平安　土師器、フレーク、石鏃、石匙
29	袖野Ⅱ	広田町字袖野	散布地　チップ
30	長根洞Ⅰ	広田町字長根洞	散布地　縄文
31	小ヶ口	小友町字小ケ口	散布地　奈良・平安　須恵器
32	長根洞Ⅱ	広田町字長根洞	散布地　チップ、縄文土器
33	小長洞	広田町字小長洞	散布地　縄文・弥生・奈良・平安　縄文土器（晩期）、弥生土器 土師器
34	長洞	広田町字長洞	散布地　縄文・弥生　縄文・弥生土器
35	矢館	広田町字長洞	城館跡　腰郭
36	蛇ヶ崎城(谷地館)	小友町谷地館	城館跡　空堀、腰郭、平場、主郭、二の郭
37	腰廻Ⅲ	小友町字腰廻	散布地　奈良・平安　土師器
38	腰廻Ⅳ	小友町字腰廻	散布地　縄文
39	腰廻Ⅴ	小友町字腰廻	散布地　縄文土器

Ⅲ　調査と整理の方法

1　調査区の設定

調査区は試掘調査結果に基づき、丘陵東側約 190 ㎡を１区、丘陵西側約 1450 ㎡を２区とした（第５図)。グリットは平面直角座標第Ｘ系（世界測地系）に合わせて設定した。４級基準点測量・３級水準測量を行い、２区は５×５ｍのメッシュで調査区全体を区割りした。この区割りにはＸ＝－115470、Ｙ＝74465 を起点として北から南へＡからＨのアルファベット、西から東へ１から12までの数字を付している。各グリットは北西交点を基準としてＡ１・Ｂ１と呼称した。１区については区割りを行わず、調査区中央にＸ＝－115500、Ｙ＝74580 の基準杭を設置した。

2　調　査　方　法

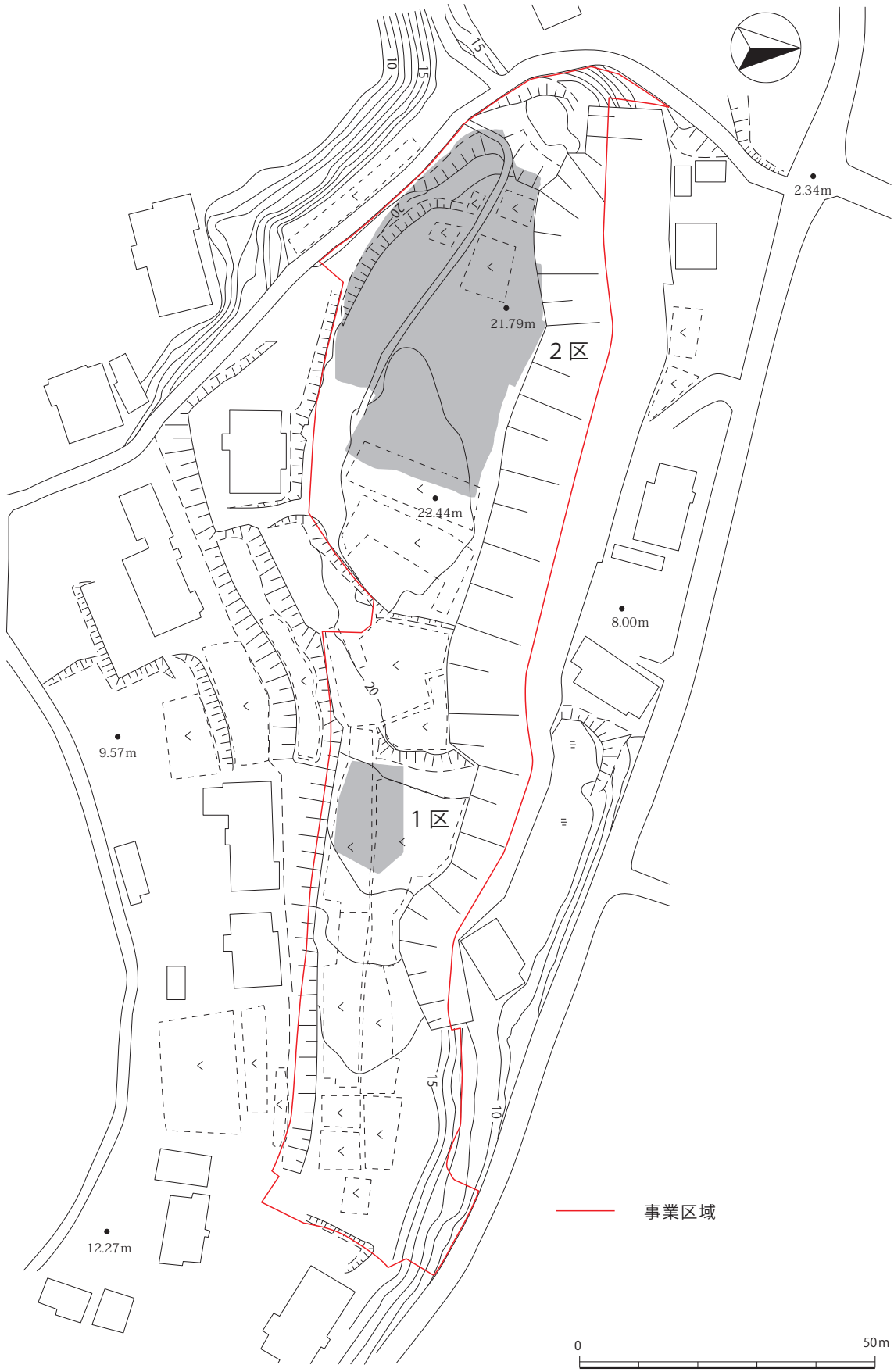
試掘調査において遺構検出面までの深さと層序は確認できていたので、表土は重機を使用して掘削した。検出した遺構は２分法・４分法を原則として掘り下げ・精査を行ったが、ピットについては埋土の色調などの特徴を分類注記して完掘したものがある。

遺構は SI・SK といった記号で表記し、出土遺物は層別に取り上げをおこなっている。平面図は簡易的な遣り方測量､セクション図は絶対標高を基準とし、1/20 縮尺で作成している。遺物出土状況図の作成は行っていないが、出土状況写真をもってこれに代えている。

写真撮影は 35mm デジタル一眼レフカメラと 35mm フィルム一眼レフカメラ（モノクロ・カラーリバーサル)、コンパクトデジタルカメラによる撮影を行った。調査区全景撮影は株式会社タックエンジニアリングに委託してラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

3　資　料　整　理

野外調査で作成した遺構図の修正作業を行い、トレース及び版組は Illustrator CS6 を使用した。調査時撮影写真は Photoshop CS6 を使用して版組作成を行った。土層注記は調査時の記載を一部変更した部分がある。



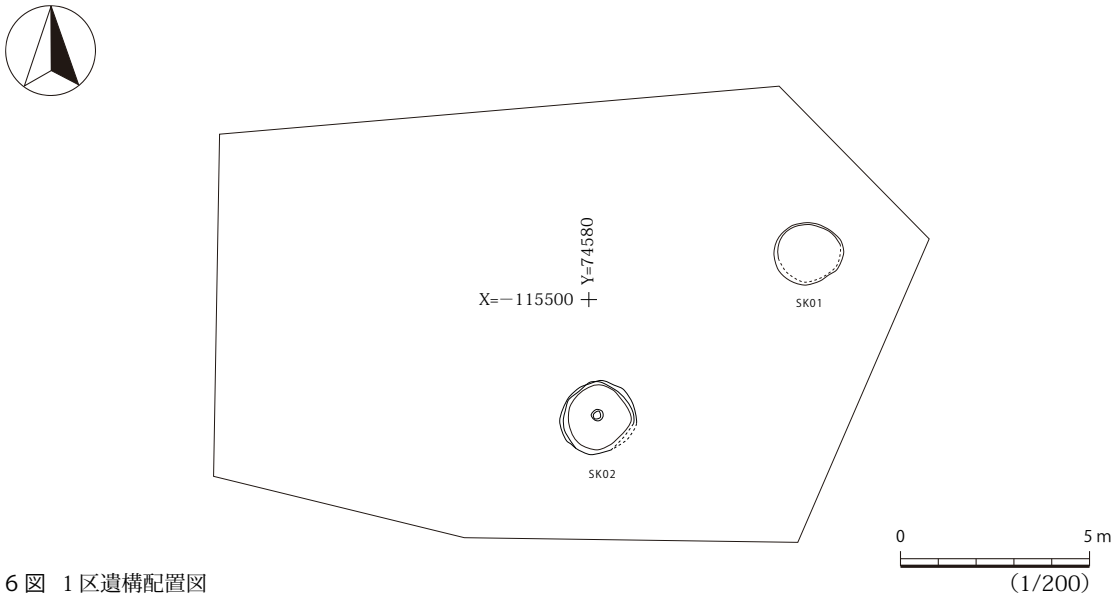
第５図　中沢遺跡調査範囲　(1/1000)

出土遺物の水洗・注記・遺物台帳登録は野外調査と並行して実施している。石器分類の誤りは整理作業中に訂正したものがある。

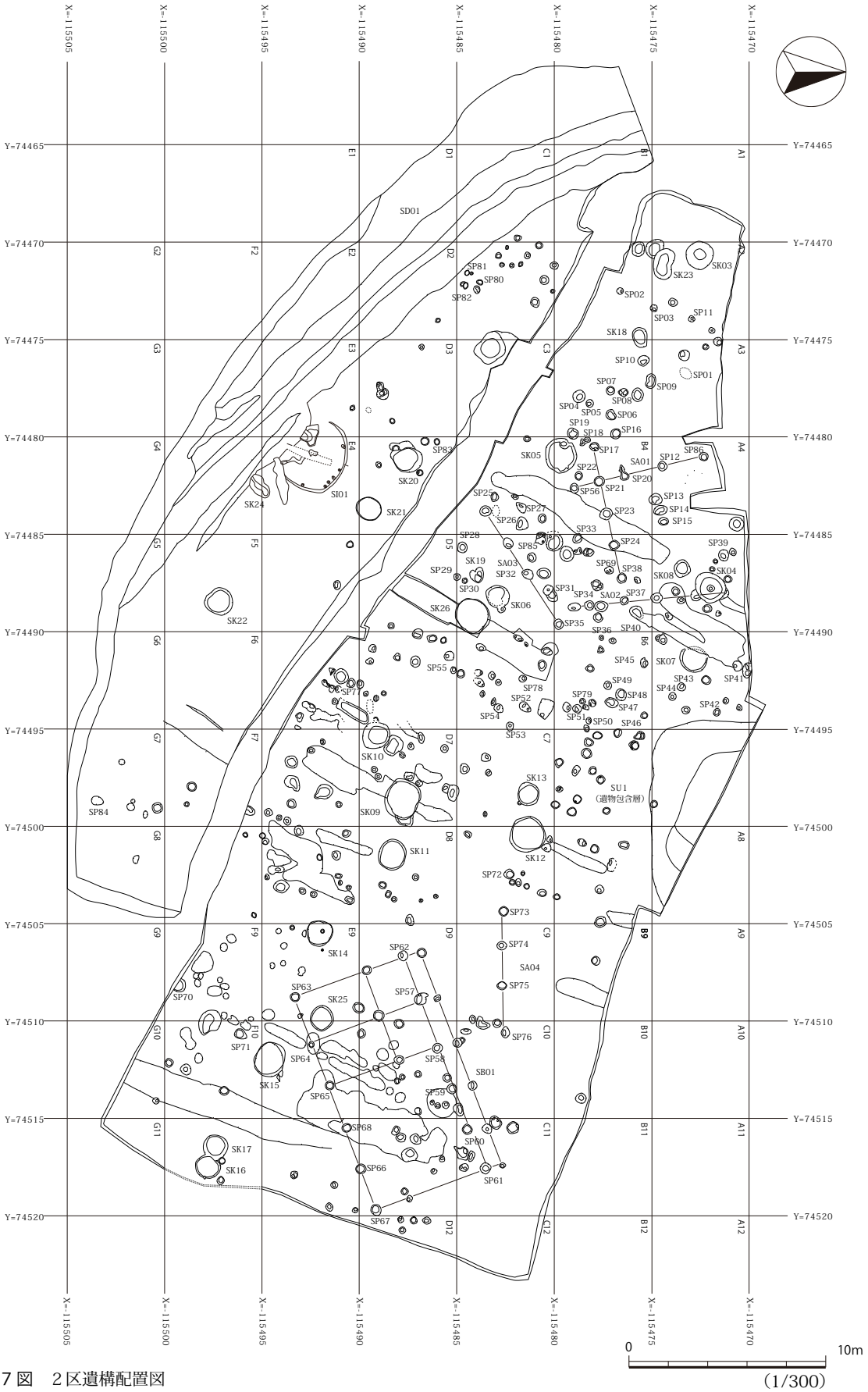
報告書掲載遺物の選択後、土器接合・復元・拓本・実測を行い、トレースは Illustrator CS6 を使用した。石斧の一部・大形の石皿・磨石の一部・土偶・腕輪状土製品以外の、石器・石製品・土製品の実測・トレースは株式会社ラングに委託した。版組は Illustrator CS6 を使用している。各遺物の縮尺はスケールに表記した。

遺物写真は 35mm デジタル一眼レフカメラを使用した。版組は Photoshop CS6 と Illustrator CS6 を併用している。

本文・遺構遺物観察表の作成後、報告書全体の編集作業は上記した各ソフトで行い、印刷所へ全てデジタルデーターで入稿した。



第６図　１区遺構配置図


X=-115505
X=-115500
X=-115495
X=-115490
X=-115485
X=-115480
X=-115475
X=-115470
Y=74465
Y=74470
Y=74475
Y=74480
Y=74485
Y=74490
Y=74495
Y=74500
Y=74505
Y=74510
Y=74515
Y=74520
SD01
SI01
SU1
（遺物包含層）
SB01
SA01
SA02
SA03
SA04
SK03
SK05
SK06
SK08
SK09
SK10
SK11
SK12
SK13
SK14
SK15
SK16
SK17
SK18
SK20
SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SP01
SP02
SP03
SP04
SP05
SP06
SP07
SP08
SP09
SP10
SP11
SP12
SP13
SP14
SP15
SP16
SP17
SP18
SP19
SP20
SP21
SP22
SP23
SP24
SP25
SP26
SP27
SP28
SP29
SP30
SP31
SP32
SP33
SP34
SP35
SP36
SP37
SP38
SP39
SP40
SP41
SP42
SP43
SP44
SP45
SP46
SP47
SP48
SP49
SP50
SP51
SP52
SP53
SP54
SP55
SP56
SP57
SP58
SP59
SP60
SP61
SP62
SP63
SP64
SP65
SP66
SP67
SP68
SP69
SP70
SP71
SP72
SP73
SP74
SP75
SP76
SP77
SP78
SP79
SP80
SP81
SP82
SP83
SP84
SP85
SP86
0
10m
(1/300)

第７図　２区遺構配置図

Ⅳ　調 査 の 成 果

1　竪 穴 住 居 跡

1 号 住 居 跡（SI１）（第８図・第 18 図～22 図）

平　面　形　E3・E4 区検出。直径推定 3.4m の平面円形の住居跡である。南側３分の１は崩落によって消失していた。丘陵北側のような急傾斜ではないが、南側調査区境界と丘陵頂部の高低差は約 1.5m である。SD１の掘削による影響はない。

壁　　住居壁は北西側の最も深い部分で、50cm であった。炉跡中心から北壁・東壁・西壁までの距離は約 1.7m で共通している。

柱　　穴　P1 から P6 の小形の柱穴が壁際に検出された。P1 は大きさ 25×13cm・深さ 18cm、P2 は大きさ 13×12cm・深さ９cm、P3 は大きさ 20×12cm・深さ 12cm、P4 は大きさ 16×16cm・深さ 10cm、P5 は大きさ 15×15cm・深さ９cm。P6 は大きさ 17×14cm・深さ７cm であった。P1 の深度が最も大きいが、他は 10cm 前後である。

炉　　焼土の分布範囲 48×35cm の地床炉である。住居床面の中央に位置している。

埋　　土　住居跡の埋土は１・１´・２層である。いずれも自然堆積層であった。４層は炉の掘方の可能性もあるが、層理面の形状から判断すると木根と考えられる。４層以下は斜面の崩落に伴う堆積土であって、住居の大部分はこの堆積層を掘削して作られている。

遺物出土状況　住居の残存状態は良好ではなかったが、１・１´層から多数の遺物が出土した。１層下部の床面直上には大形の土器個体が多い。調査時に分層はしていないが、埋土の１次堆積土中に廃棄された状況を示している。６類土器の一括資料である。華燭形土器、注口土器など造形の優れた個体を含んでいる。石器・土製品の出土数は少なかったが、有縁の石皿（第 22 図 18）・土偶の脚部（同図 11）の出土があった。

2　土　　坑

1　号　土　坑（SK１）（第９図・第 23 図）

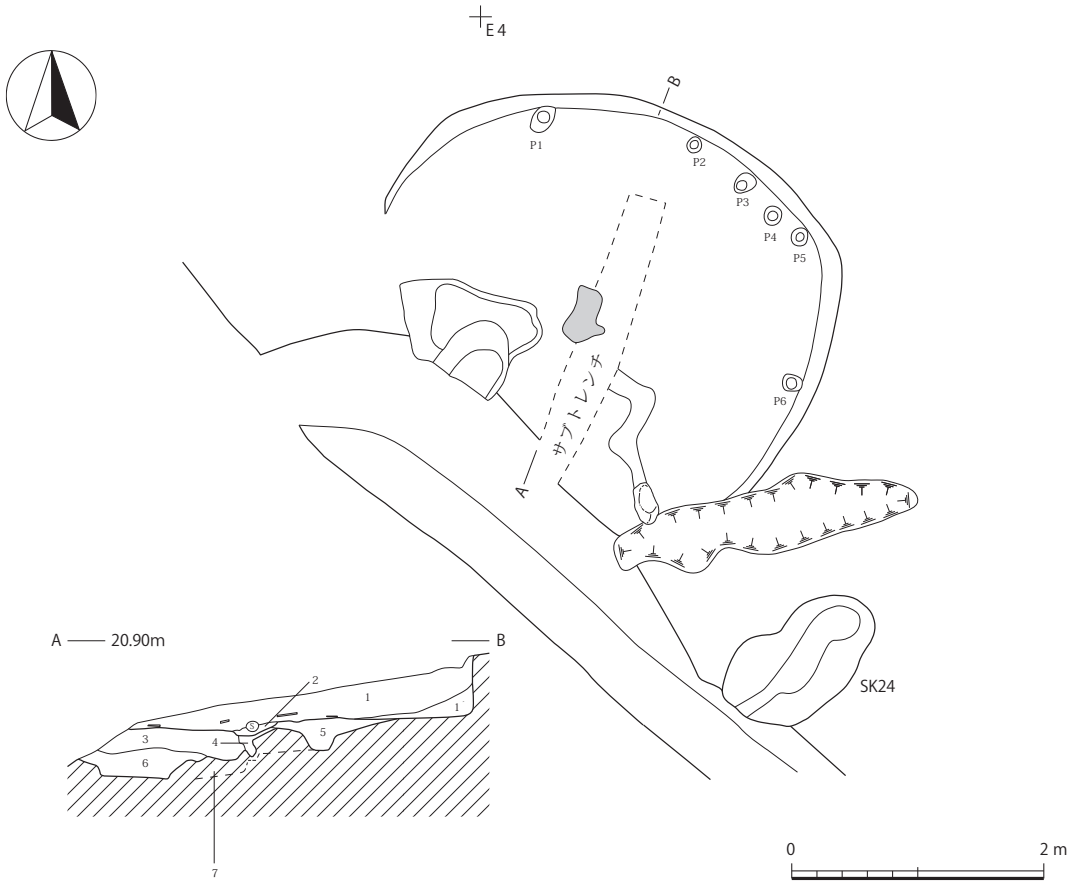
１区北東部検出。平面形は円形、断面形は円筒形である。６類土器の破片が埋土から出土した。その他、円盤状土製品が１点出土している。

２　号　土　坑（SK２）（第９図）

１区南側検出。１号土坑の南西５ｍに位置している。平面形は円形、断面形はフラスコ状である。土坑底にピットを持っている。現地調査時の記録にも整理作業段階の確認作業でも遺物の存在は皆無である。時期の詳細は不明。

３　号　土　坑（SK３）（第９図・第 23 図）

３号土坑からはすべて２区検出である。平面形は小形の円形、断面形は船底形である。６類土器が出土している。



第８図　SI1 平面・セクション図　(1/60)

第２表　１号住居跡土層注記

層位	土　色	土　性	備　考	
1	10YR2/1　黒色	土	数mm石2～3%、炭化物粒1%、土器片あり	しまりやや強
1´		土		1層に比較してしまり強
2	10YR3/2　黒褐色	土		しまりやや強
	5YR5/8　明赤褐色	焼土	10%	
3	10YR2/1　黒色	土		しまりやや強
	10YR6/8　明黄褐色	粘土	2～3%、数mm石2～3%	
4	10YR5/4　にぶい黄褐色	土		しまりやや強
	10YR6/8　明黄褐色	粘土	3%	
	10YR3/1　黒褐色	土	2%	
5	10YR5/4　にぶい黄褐色	土		しまりやや強
	10YR6/8　明黄褐色	粘土	5%	
	10YR3/1　黒褐色	土	3～5%	
6	10YR4/3　にぶい黄褐色	土		しまりやや強
	10YR6/8　明黄褐色	粘土	5%	
7	10YR3/1　黒褐色	土	3%	

４　号　土　坑（SK４）（第 10 図）

Ａ５区検出。平面形は円形、断面形は円筒形である。深度は 80cm で調査区内出土の土坑では SK15 に次ぐ深さである。土坑底にピットを持っている。遺物は縄文土器の小片が 10 点である。時期は縄文中期後葉から後期中葉のいずれかと思われるが詳細は不明。

５　号　土　坑（SK５）（第１０図・第 23 図）

Ｂ４・Ｃ４区検出。平面形は円形、断面形は船底形である。６類土器が出土している。

６　号　土　坑（SK６）（第 10 図）

Ｃ５区検出。SK26 に隣接する。平面形は円形、断面形は不整形である。現地調査時の記録にも整理作業段階の確認作業でも遺物の存在は皆無である。時期の詳細は不明。

７　号　土　坑（SK７）（第 10 図）

Ａ６区検出。平面形は円形、断面形は円筒形である。西側３分の１は近現代と思われる撹乱溝によって上端・下端とも破壊されている。遺物の出土記録はない。

８　号　土　坑（SK８）（第 10 図）

Ａ５区検出。平面形は楕円形、断面形は不整形である。遺物の出土記録はない。

９　号　土　坑（SK９）（第 11 図・第 23 図～24 図）

D7 区検出。平面形は円形、断面形はフラスコ状である。埋土６・７・８・９層は水平堆積の状態を示している。１～５層はレンズ状堆積である。南東部の土坑底壁際に厚さ約 20cm の貝層がある。９層堆積後に廃棄された貝・魚骨である（Ⅴ　動物遺存体　参照）。土坑に廃棄された３類土器深鉢・壷・小形壷は、それぞれ北壁際・東壁際・埋土中層の現地調査時の注記があり、６～９層から出土したと考えられる。釣針軸頂部の破片は貝層中、有孔軽石製品・礫器・有縁の石皿・磨石はすべて埋土中位出土の注記がある。貝層と同時期と考えられる。

１０　号　土　坑（SK10）（第 11 図・第 25 図）

Ｄ６・Ｄ７区検出。平面形は円形、断面形は鍋底形である。３類土器の小破片が出土している。

１１　号　土　坑（SK11）（第 11 図・第 25 図）

Ｄ８区検出。平面形は円形、断面形は円筒形である。SK９に隣接している。赤彩の痕跡が底部付近に見られるミニチュア土器が下層から出土している。層位の注記がないが、３類・４類土器の破片が数点出土している。

１２　号　土　坑（SK12）（第 11 図・第 25 図～28 図）

Ｃ７・Ｃ８区検出。平面形は円形、断面形は円筒形である。埋土中位・下位から石皿４点，大形磨石１点が出土している。土坑底から砥石１点の出土がある。他に、磨石と注記された直径４cm の礫が現地調査時に取り上げられているが、自然の円礫であった。また、現地調査時の記録にも整理作業段階の確認作業でも土器は皆無である。無縁石皿の形態から判断すると、縄文中期後葉の時期と考えられる。４点それぞれ大きさに差があるが、半月形の形状は一致している。最大の石皿と大形磨石は、石皿の幅と磨石の長さがほぼ同じである。

１３　号　土　坑（SK13）（第 11 図）

Ｃ７区検出。SK12 に隣接する。平面形は円形、断面形は不整形である。縄文土器の小片 13 点の出土があるが詳細は不明である。

１４　号　土　坑（SK14）（第 12 図・第 29 図）

Ｅ９区検出。平面形は円形、断面形は円筒形である。土坑底にピットがある。ピットを土坑底に持つ土坑は本例を含めて３基である。縄文土器４類の比較的大形の破片と円盤状土製品、磨石が出土している。出土層位の記録はない。

１５　号　土　坑（SK15）（第 12 図・第 29 図）

E10･F10区検出。平面形は円形、断面形はフラスコ状である。深度は調査した土坑中最も深く 85cm である。層位の注記はないが、５類土器の小片が出土している。

16 号・17 号土坑（SK16・17）（第 12 図）

F11 区検出。２区東端部に位置する。平面形は円形、断面形は円筒形である。16 号土坑より 17 号土坑が新しい。丘陵頂部にあたり標高 22.44m 付近である。旧地形図（第３図）では 24m の記載があるので、削平を受けて土坑壁は20cm 前後である。２区西端 SK３から南東方向へ列状に並ぶ土坑群の東端にあたる。出土遺物は 16 号土坑から縄文土器小片が４点、時期の詳細は不明である。

１８　号　土　坑（SK18）（第 12 図・第 29 図）

Ｂ２・Ｂ３区検出。平面形は楕円形、断面形は船底形である。深度 10cm である。５類と思われる土器の小片がある。時期の詳細は不明である。

１９　号　土　坑（SK19）（第 12 図）

C5 区検出。平面形・断面形ともに不整形である。土坑としては、地山との境界が不明瞭である。

２０　号　土　坑（SK20）（第 12 図・第 29 図）

Ｄ４区検出。平面形は円形、断面形は船底形である。１号住居跡の北側に隣接している。縄文土器６類・ミニチュア土器・土偶肩部が出土している。土偶は腕部分の欠損面に接合痕が観察できる。

２１　号　土　坑（SK21）（第 13 図・第 30 図）

Ｄ４・Ｅ４区出土。１号住居跡の北東側に隣接している。縄文土器６類・ミニチュア土器・円盤状土製品・磨石が出土している。

２２　号　土　坑（SK22）（第 13 図・第 30 図）

Ｆ５検出。２区調査区の南端に位置している。平面形は円形、断面形は船底形である。縄文土器４類・６類の小破片が出土している。

２３　号　土　坑（SK23）（第 13 図）

Ａ２区検出。SK３に隣接する。平面形は楕円形、断面形は船底形である。出土遺物は無い。

２４　号　土　坑（SK24）（第 13 図・第 30 ・31図）

Ｅ４・Ｆ４区検出。１号住居跡の東に隣接している。平面形は不整な楕円形、断面形は鍋底形である。土坑南側は斜面の崩落によって消失している。１類土器の小破片・５類土器の大形破片・円盤

状土製品が出土している。大形破片は埋土中位から出土している。

２５　号　土　坑（SK25）（第 13 図）

Ｅ９・E10 区検出。平面形は円形、断面形は船底形である。出土遺物は無い。

２６　号　土　坑（SK26）（第 13 図・第31図）

Ｃ５区検出。平面形は円形、断面形はフラスコ状である。縄文土器２類と３類の小破片が出土している。

第３表　土坑観察表　深さ cm

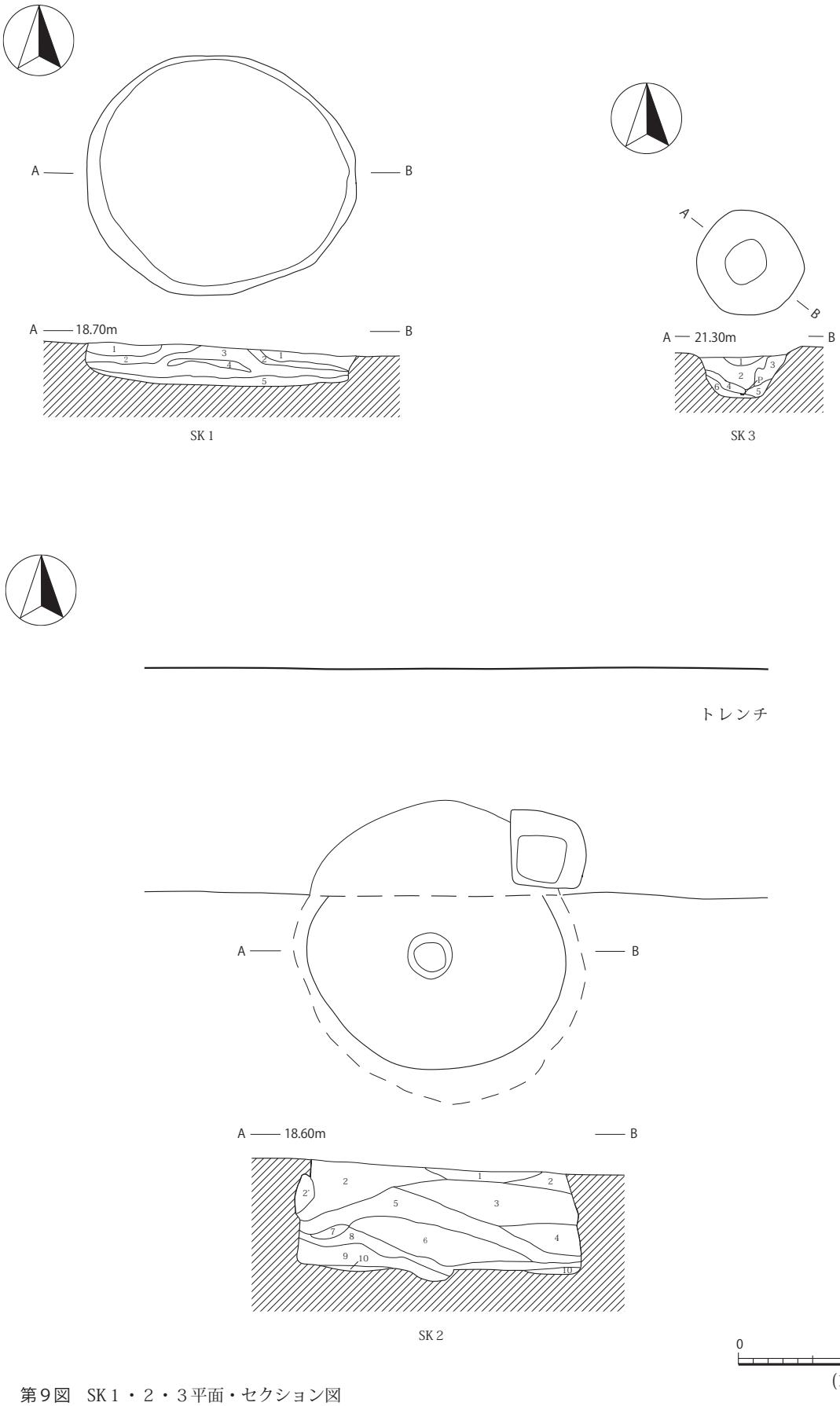
No	位置（グリッド）	上面規模（m）			底面規模（m）		平面形	断面形	覆土の状況	付属施設	所属時期	重複関係
		長径	短径	深さ	長径	短径						
1	東区	1.80	1.60	29	1.66	1.52	円形	円筒形	5層構成		宝ケ峯式	
2	東区	1.74	1.18	77	2.02	1.96	円形(一部欠)	フラスコ状	11層構成	ピット１基	不明	
3	A2	1.45	1.40	75	0.62	0.55	円形	舟底形	6層構成		不明	
4	A5	1.57	1.54	80	1.13	1.11	円形	円筒形	11層構成	ピット１基	不明	
5	B4、C4	1.77	1.58	30	1.48	1.27	円形	舟底形	3層構成		宝ケ峯式	
6	C5	1.19	1.14	22	0.82	0.67	円形	不整形	4層構成		不明	
7	A6	1.39	1.00	43	1.24	0.86	円形(一部欠)	円筒形	4層構成		不明	
8	A5	1.35	0.96	32	0.99	0.83	楕円形	不整形	3層構成		不明	
9	D7	1.88	1.64	76	2.09	1.84	楕円計	フラスコ状	10層構成		大木９式	
10	D6、D7	1.39	1.33	49	0.98	0.90	円形	鍋底形	10層構成		大木９式	
11	D8	1.58	1.42	44	1.39	1.26	円形	円筒形	9層構成		観音堂式	
12	C7、C8	1.86	1.82	66	1.62	1.58	円形	円筒形	8層構成		大木９式	
13	C7	1.18	1.06	29	0.98	0.95	円形	不整形	2層構成		不明	
14	E9	1.30	1.21	75	1.32	1.09	円形	円筒形	11層構成	ピット１基	観音堂式	
15	E10	1.75	1.46	85	1.72	1.42	楕円形	フラスコ状	6層構成		不明	
16	F11	1.23	1.23	18	1.08	1.03	円形	円筒形	2層構成		不明	古
17	F11	1.24	1.24	22	0.96	0.91	円形	円筒形			不明	新
18	B2、B3	1.02	0.74	10	0.72	0.56	楕円形	舟底形	―		不明	
19	C5	0.80	0.68	38	0.34	0.28	不整円形	不整形	―		不明	
20	D4	1.92	1.40	69	1.20	1.08	楕円形	船底形	11層構成		宝ケ峯式	
21	D4、E4	1.29	1.17	35	1.22	1.14	円形	円筒形	3層構成		宝ケ峯式	
22	F5	1.44	1.39	18	1.10	1.10	円形	舟底形	―		宝ケ峯式	
23	A2	1.58	1.13	40	1.12	0.56	楕円形	舟底形	―		不明	
24	E4、F4	1.30	0.83	20	1.20	0.34	不整楕円形	鍋底型	3層構成		貝鳥式	
25	E9、E10	1.31	1.18	13	1.16	1.04	円形	舟底形	―		不明	
26	C5、C6	1.78	1.68	69	1.76	1.73	円形	フラスコ状	―		不明	

３　　溝

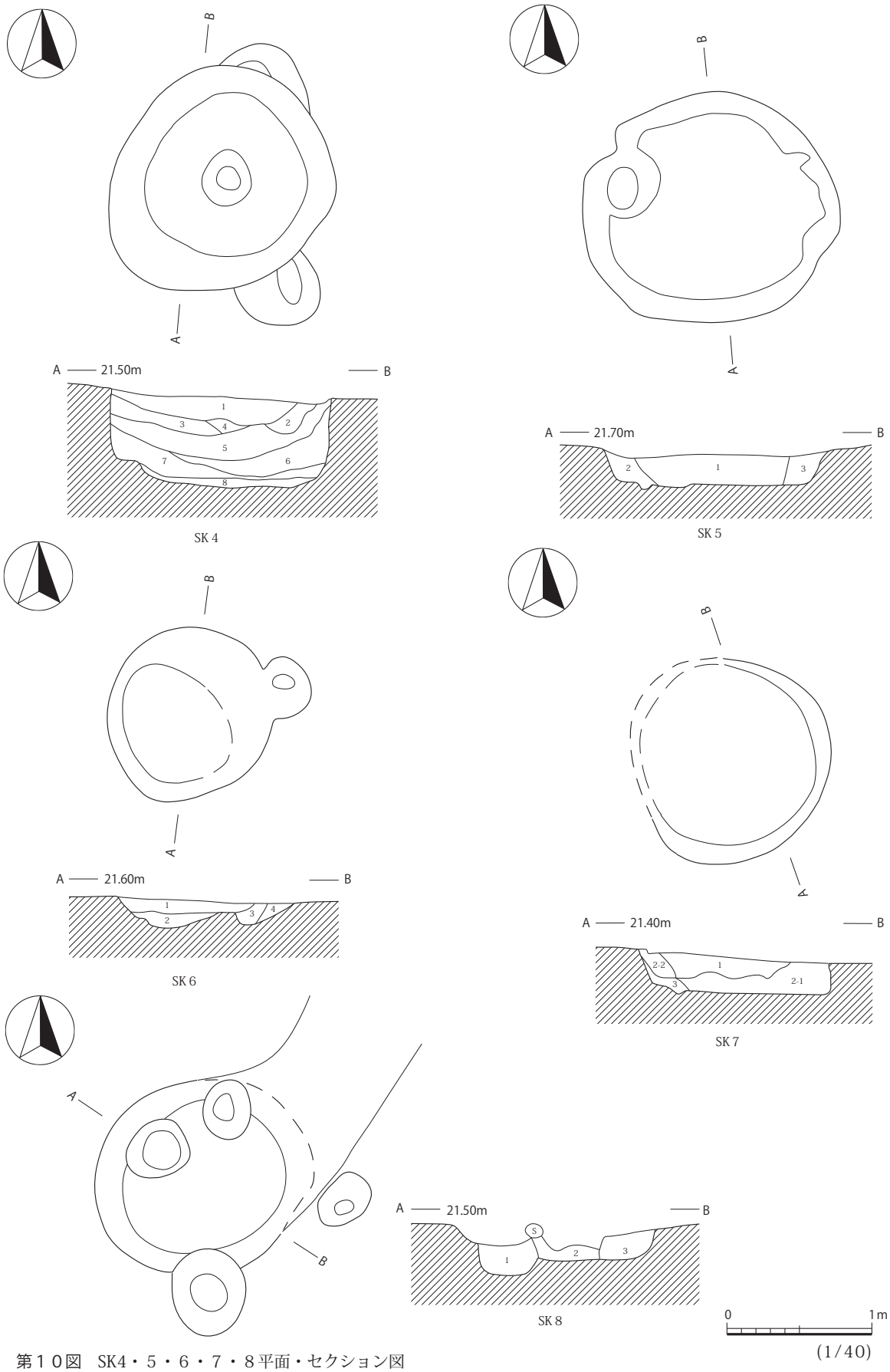
１　号　溝　跡（SD１）（第 14 図・第 31～34 図）

規　　模　調査区南斜面に検出。調査区内の全長は 30.7m である。西端部が幅 2.9m、深度 1.5m。中央のセクションＣ－Ｄ部が幅 2.86m、深度 1.53m。東端部が幅 2.4m、深度 1.35m である。深さの基準は溝の北辺からの計測値であるが、溝のどの部分も同じ深さで掘削されている。

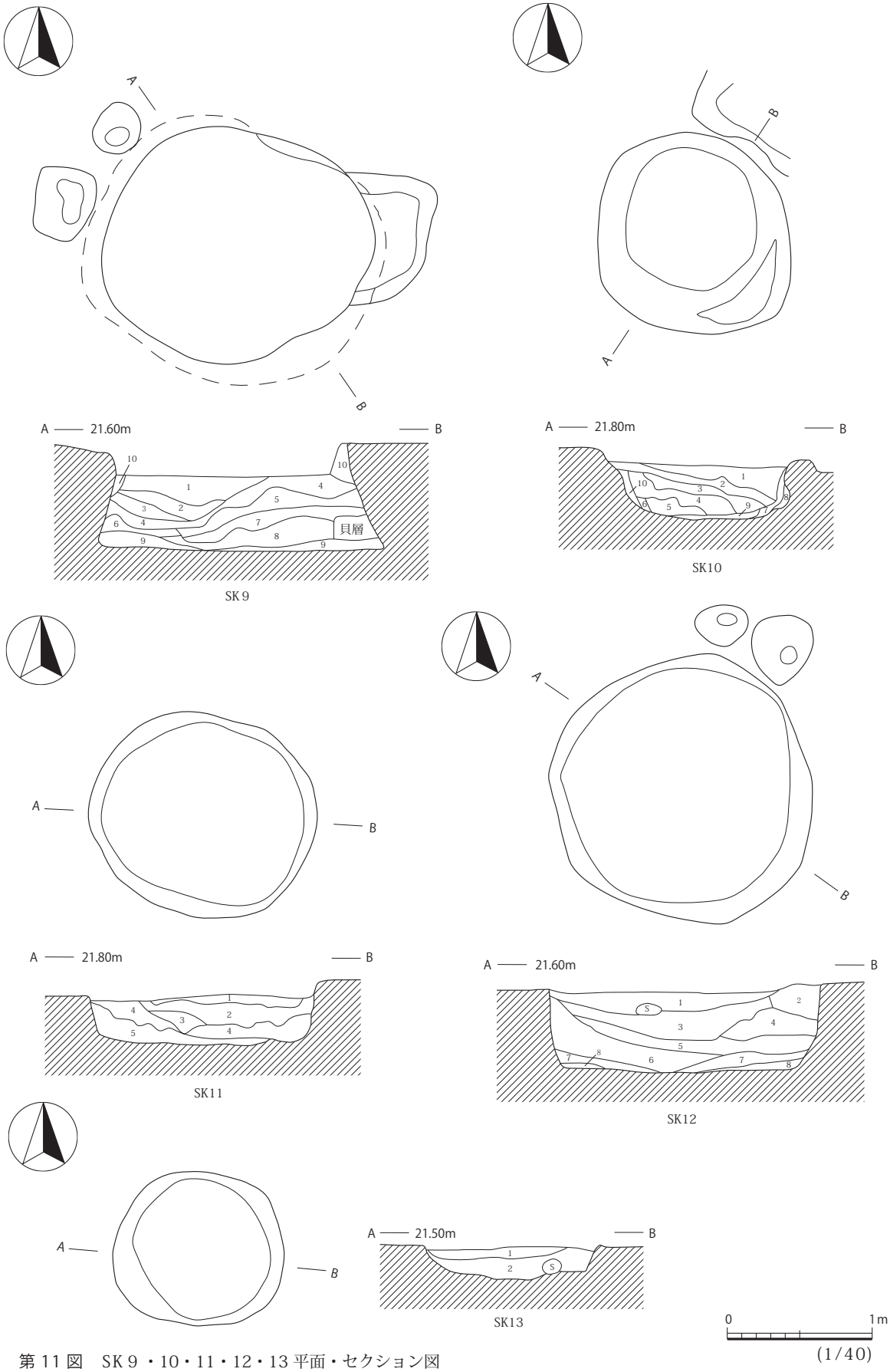
溝底の標高は西端部が 19.46m、中央のセクションＣ－Ｄ部が 18.56m、東端部が 18.3mであった。東に向かって約１mの傾斜を作り出している。実際の掘削深度は各部分ともほぼ同じであるから、旧地形の傾斜を利用して掘削したことがわかる。



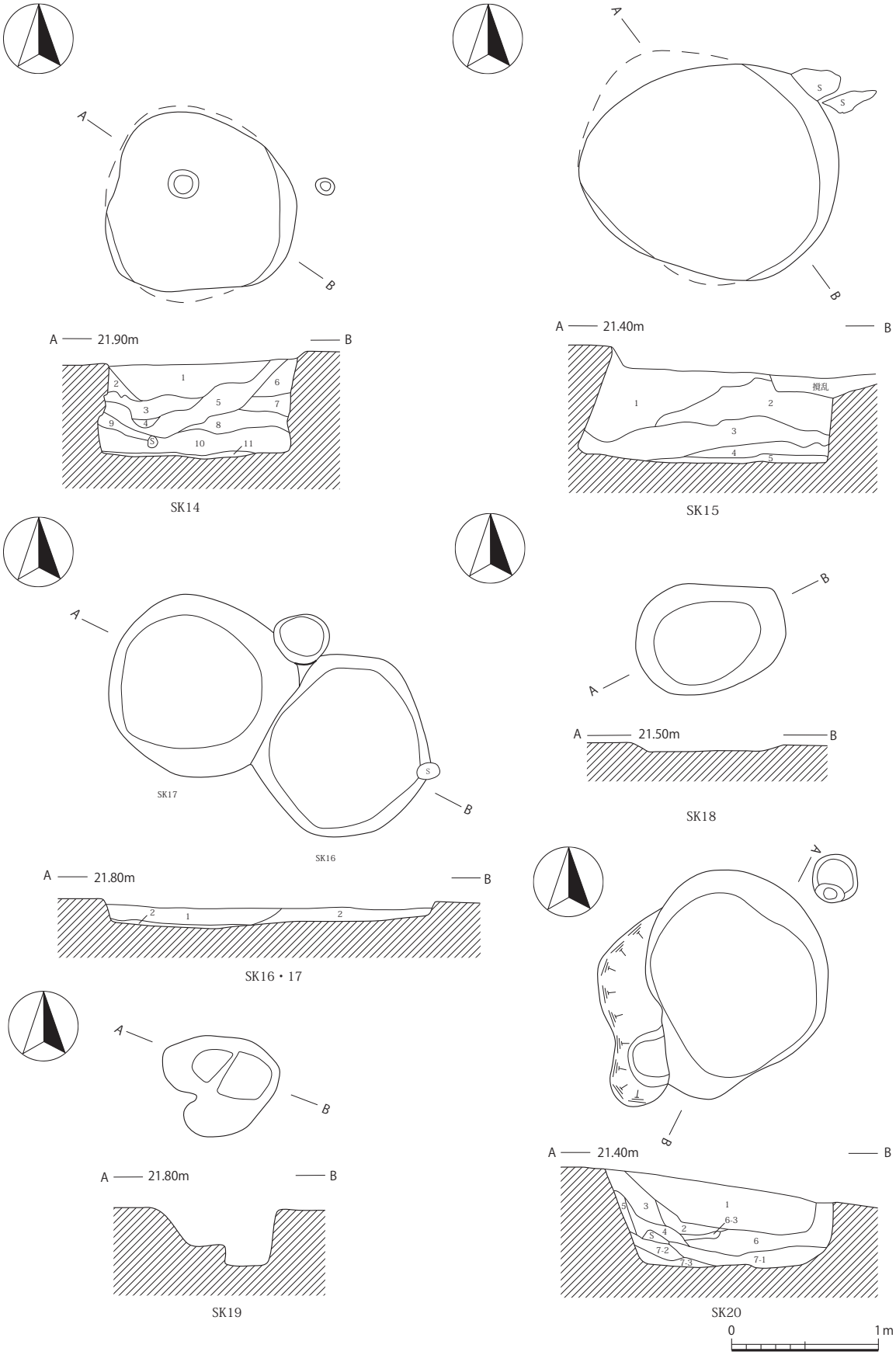
第９図　SK１・２・３平面・セクション図



第１０図　SK4・５・６・７・８平面・セクション図

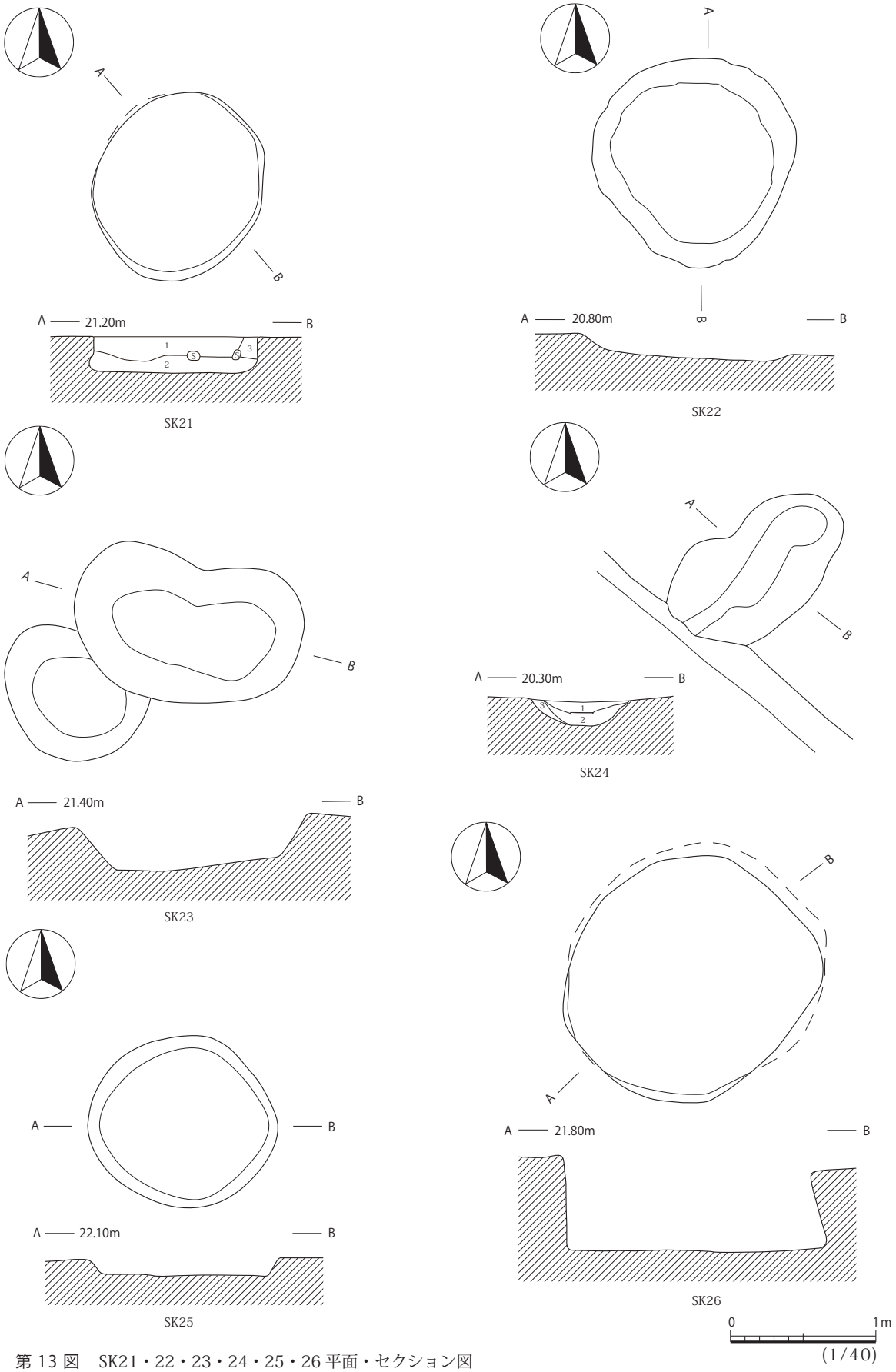


第 11 図　SK 9 ・10・11・12・13 平面・セクション図



第 12 図　SK14・15・16・17・18・19・20 平面・セクション図

(1/40)

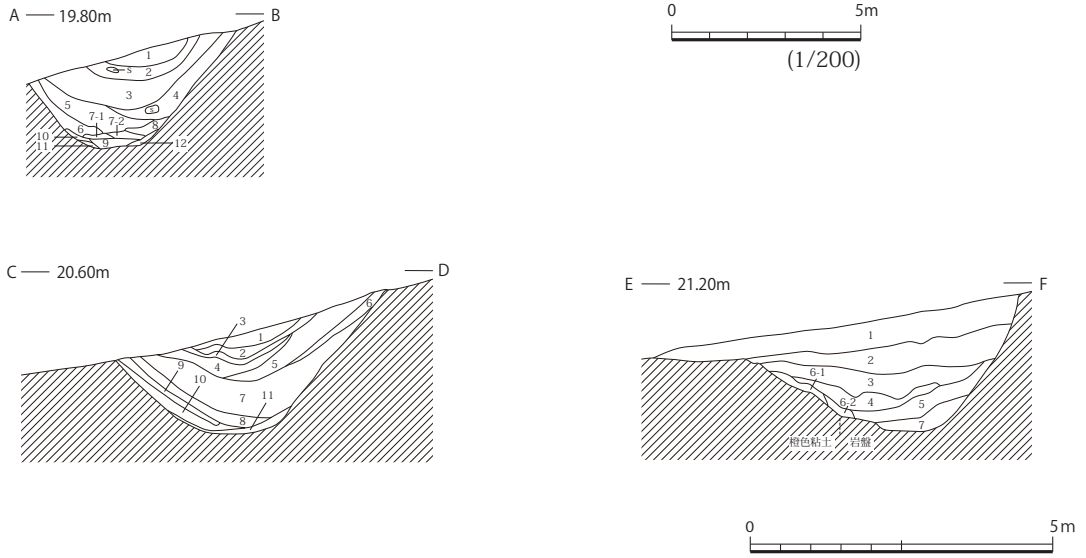


第 13 図　SK21・22・23・24・25・26 平面・セクション図

第４表　土坑土層注記

No	層位	土　色	土　性	備　考	
1	1	7.5YR4/2　灰褐色	砂質土	花崗岩風化土	
	2	7.5YR3/3　暗褐色	砂質土	花崗岩風化土、灰白色粒子散在	
	3	7.5YR5/3　にぶい褐色	砂質土	花崗岩風化土に小黒土粒少々散在	
	4	7.5YR4/3　褐色	砂質土	花崗岩風化土、φ５mm前後の黒土粒散在	
	5	7.5YR3/4　暗褐色	粘土質砂	花崗岩風化土、黒色土微粒散在	
2	1	7.5YR2/2　黒褐色	砂質土		
	2	7.5YR5/6　明褐色	粘土	25％混入（壁際寄りほど多）	
	2´	7.5YR5/6　明褐色	砂質土	風化花崗岩岩盤ブロック	
	3	7.5YR3/4　暗褐色	砂質土		
	4	7.5YR5/6　明褐色	粘土	一部に3層土混入（10％）	
	5	7.5YR3/4　暗褐色	砂質土	（3層に近似）木炭粒、明褐土粒僅少混入	
	6	7.5YR4/3　褐色	砂質土	木炭粒、明褐色粘土粒混入割合5層より多	
	7	7.5YR4/6～5/6　褐～明褐色	砂質土	地山塊	
	8	7.5YR3/4～4/4　暗褐色～暗褐色	砂質シルト		
	9	7.5YR5/6　明褐色	砂質シルト	壁際に壁の崩落ブロック	
	10			掘りすぎ？　風化花崗岩岩盤	
3	1	10YR3/3　暗褐色	砂質土	混土（1：1）	しまりやや弱（～中）
		10YR4/4　褐色	砂質土		
		10YR6/6　明黄褐色	砂質土	粒1％	
	2	10YR6/6　明黄褐色	砂質土		しまりやや弱（～中）
		10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質土	10％（まだら状）	
	3	10YR5/6　黄褐色	砂質土	（やや明）	しまりやや弱（～中）
	4	10YR4/6　褐色	砂質土	炭化物1％	しまり中
	5	10YR5/6　黄褐色	砂質土	（やや暗）	しまり中
	6	10YR4/4　褐色	砂質土		しまりやや強（～中）
4	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
	2	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
	4	10YR4/2　灰黄褐色	砂質土		しまりやや強
	5-1	10YR4/2　灰黄褐色	砂質土		しまりやや強
		10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質土	小ブロック2％	
	5-2	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
	5-3	10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質土		しまりやや強
	6-1	10YR4/2　灰黄褐色	砂質土		しまりやや強
	6-2	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土		しまりやや強
		10YR8/2　灰白色		風化花崗岩粒5％	
	7	10YR3/4　暗褐色	砂質土		
		10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質土	（ブロック）10～15％	
	8	10YR2/2　黒褐色		炭化物粒1％	しまりやや強
5	1	10YR3/3　暗褐色	（砂質土）	炭化物粒1～2％	しまりやや強
	2	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強（～中）
	3	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強（～中）
6	1	10YR3/3　暗褐色			しまりやや強
		10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質土	5％まだら状	
	2	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
		10YR3/3　暗褐色		10％	
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
		10YR3/3　暗褐色		2～3％	
	4	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土		しまりやや強
		10YR7/8　黄橙色	粘土	粒1％	
7	1	10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質土		しまりやや強（～中）
		10YR3/1　黒褐色		5～7％、しみ状	
	2-1	10YR3/1　黒褐色			しまりやや強
	2-2	10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質粘土	5～7％、まだら状	
	3	10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質粘土		
		10YR3/1　黒褐色		3%	しまりやや強
8	1	7.5YR3/1　黒褐色			しまりやや強（～強）
		7.5YR7/8　黄橙色	粘土	小ブロック・粒7％	
	2	7.5YR7/8　黄橙色	粘土		しまりやや強（～強）
		10YR3/1　黒褐色		粒1％	
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質土		しまり中
		10YR7/3　にぶい黄橙色		風化花崗岩砂5％	
9	1	7.5YR5/1　褐灰色	砂質土		
		10YR7/6　明黄褐色	粘土	ブロック1か所あり、炭化物1％	しまりやや強（～中）
	2	7.5YR5/1　褐灰色	砂質土		しまりやや強（～中）
	3	10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質土		しまりやや強（～中）
	4	7.5YR3/2　黒褐色			
		10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土	2～3％まだら状、炭化物2％	しまりやや強（～中）
	5	7.5YR3/2　黒褐色			
		10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土	5～7％まだら状、炭化物1％	しまりやや強（～中）
		7.5YR5/8			
	6	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土		しまりやや強（～中）
	7	7.5YR3/2　黒褐色		炭化物1％	しまりやや強（～中）
	8	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土		
		7.5YR3/2　黒褐色		7％しみ状、炭化物5％	しまりやや強（～中）
	9	7.5YR5/1　褐灰色		炭化物1％	しまりやや強
	10	10YR7/3　にぶい黄橙色	砂	（風化花崗岩）	
		7.5YR3/2　黒褐色		2～3％	しまりやや強

10	1	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土		しまりやや強
	2	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土		しまりやや強
	3	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土		しまりやや強
		10YR7/4　にぶい黄橙色	砂質土	砂質土粒2％	
	4	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
	5	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
	6	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
		10YR8/2　灰白色		灰白色岩粒（風化花崗岩）10～15％	
	7	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
		10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土	15％	
	8	10YR7/6　明黄褐色	砂質土		しまりやや強
11	1-1	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
	1-2	7.5YR3/2　黒褐色			しまりやや強
		10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土	2～3％	
	2-1	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
	2-2	7.5YR3/2　黒褐色			しまりやや強
	3	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりやや強
	4-1	10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土	炭化物1％	しまりやや強
		7.5YR3/2　黒褐色		2～3％	
	4-2	7.5YR3/2　黒褐色			しまりやや強
		10YR5/3　にぶい黄橙色	砂質土	3％	
	5-1	7.5YR2/1　黒色			しまりやや強
		10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土	3～５％	
	5-2	7.5YR3/2　黒褐色			しまりやや強
		10YR5/3　にぶい黄褐色	砂質土	1～2％	
12	1	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりあり
	2	10YR5/4～6/4　にぶい黄褐色	砂質土		しまりあり
	3	10YR4/4　褐色	砂質土		しまりあり
	4	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂質土		しまりあり
	5	10YR4/4～5/4　褐色	砂質土		しまりあり
	6	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりあり
	7	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質土	暗色土小粒散在	しまりあり
	8	10YR3/4～4/4　暗褐色～褐色	砂質土		しまりあり
13	1	10YR3/2　黒褐色	砂質	φ1mm位の焼土、木炭微量、貝の微小片微量	
		10YR4/4　褐色			
	2	10YR3/4～4/4　暗褐色～褐色		やや斑状混在、貝微細片、木炭粒、極微量あり	しまりあり
14	1	10YR2/3　黒褐色	砂	φ1～2mmの木炭粒極僅か散在、小角礫数個	しまりあり
	2	10YR4/4　褐色	砂質土		しまりあり
	3	10YR4/3～3/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりあり
	4	10YR3/3　暗褐色	砂質土	下記の炭化粒子あり	しまりあり
	5	10YR2/2　黒褐色	砂質土	φ1mm位の木炭粒微量含む	しまりあり
	6	10YR4/4　褐色	砂質土	φ1mm位の木炭粒数個、7より僅か暗い	しまりあり
	7	10YR4/4　褐色	砂質土	φ1mm位の木炭粒数個	しまりあり
	8	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質土	φ1mm位の木炭粒数個	しまりあり
	9	10YR3/3～3/4　暗褐色	砂質土	φ1mm位の木炭粒数個	しまりあり
	10	10YR3/3～4/3　暗褐色	砂質土	明暗あいまい斑状、φ1mm位の木炭粒数個	しまりあり
	11	10YR3/3　暗褐色	砂質土	φ1mm未満木炭粒数個	しまりあり
15	0			耕作による攪乱	しまりあり
	1	10YR2/2　黒褐色	砂質土	小角礫若干混入	しまりあり
	2	10YR3/2　黒褐色	砂質土		しまりあり
		10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質土	ブロック50％混在	しまりあり
	3	10YR4/4　褐色	砂質土		しまりあり
	4	10YR4/3　にぶい黄褐色	砂質土		しまりあり
	5	10YR2/1　黒色	砂質シルト	少しの粘りあり	しまりあり
16・17	1	7.5YR2/2　極暗褐色	砂質土	φ１mm位の木炭粒1％未満散在	しまりあり
	2	7.5YR4/3　褐色	砂質土		しまりあり
		7.5YR3/2　黒褐色	砂質土	粒（φ５mm前後）５％以下散在	
20	1	10YR2/1　黒色			
		10YR6/8　明黄褐色	粘土	粒1％、数mm～1cm小礫1％	しまりやや強
	2	10YR3/2　黒褐色		数mm小礫2％	しまりやや強
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色		数mm小礫10～15％	しまりやや強
	4	10YR4/2　灰黄褐色			しまりやや強
	5	10YR4/4　褐色		10mm小礫3％	しまりやや強
	6-1	10YR3/1　黒褐色		炭化物粒1％	しまりやや強
	6-2	10YR6/8　明黄褐色	粘土		しまりやや強
		10YR3/1　黒褐色			
	6-3	10YR3/1　黒褐色			しまりやや強
		10YR6/8　明黄褐色	粘土		
	7-1	2.5YR3/1　暗赤灰色			しまりやや強
		2.5YR3/6　暗赤褐色	焼土		
		2.5YR5/8　明赤褐色	焼土	粒5～7％、炭化物粒1％	
	7-2	2.5YR4/6　赤褐色	焼土	炭化物粒2％	しまりやや強
		7.5YR4/4　褐色			
	7-3	2.5YR3/1　黒褐色			しまりやや強
		2.5YR3/6　暗赤褐色	焼土		
		2.5YR5/8	焼土	粒2％、炭化物粒かたまりあり	
21	1	10YR2/1　黒色		炭化物粒2％、しまり強	
	2	10YR2/3　黒褐色			しまり強
		2.5YR5/8　明赤褐色	焼土	粒3～5％	
		7.5YR7/8　橙色	粘土	粒3～5％	
	3	10YR5/4　にぶい黄褐色			しまり強
24	1	10YR4/1　褐灰色			
	2	10YR4/1　褐灰色			
		10YR7/6　明黄褐色	砂質土		
	3			地山土に似る	



第 14 図　SD 1 平面・セクション図

第５表　１号溝跡土層注記

セクションNO	層位	土　色	土　性	備　考	
A−B	1	10YR2/2　黒褐色			しまり強
		10YR7/6　明黄褐色	粘土	小ブロック・粒15～20%	
	2	10YR7/6　明黄褐色	粘土	（1：1）	しまり強
		10YR5/3　にぶい黄褐色			
	3	10YR4/3　にぶい黄褐色			しまりやや強
		10YR7/6　明黄褐色	粘土	小ブロック・粒5%	
	4	10YR4/3　にぶい黄褐色			しまりやや強
		10YR7/6　明黄褐色	粘土	ブロック・粒15%	
	5	10YR2/2　黒褐色			しまりやや強
		10YR6/3　にぶい黄橙色	砂質粘土	小ブロック・粒7%	
		10YR7/6　明黄褐色	粘土	小ブロック・粒7%	
	6	10YR5/3　にぶい黄褐色			しまりやや強
		10YR7/6　明黄褐色	粘土	ブロック・粒（1：1）	
	7-1・2	10YR5/3　にぶい黄褐色			しまりやや強
		10YR7/6　明黄褐色	粘土	ブロック（7：3）	
	8	10YR6/4　にぶい黄橙色	砂質粘土		しまりやや強
		10YR5/3　にぶい黄褐色		10～15%	
	9	10YR2/2　黒褐色			しまり中
		10YR7/6　明黄褐色	粘土	小ブロック・粒20%	
	10	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土		しまりやや強
		10YR5/3　にぶい黄褐色		3～5%	
	11	10YR7/6　明黄褐色	砂質粘土	（砂っぽい）	しまりやや強
	12	10YR6/4　にぶい黄橙色	粘土		しまり中
		10YR5/3　にぶい黄褐色		10%	
C−D	1	10YR2/1　黒色			しまりやや強
		2.5YR5/8　明赤褐色	焼土	粒1%	
	2	10YR2/1　黒色			しまりやや強
		10YR7/8　黄橙色	粘土	ブロックと粒（6：4）、粘土部分に1～2cm石7%	
	3	10YR2/1　黒色		炭化物粒1%	しまりやや強（～中）
	4	10YR3/2　黒褐色		炭化物粒1%	しまりやや強
		7.5YR6/8　橙色	粘土	粒	
		10YR7/8　黄橙色	粘土	粒3%	
	5	10YR3/2　黒褐色			しまりやや強
		10YR7/8　黄橙色	粘土	粒・小ブロック5%、炭化物粒1%、1～2cm石1%	
	6	10YR7/8　黄橙色	粘土		しまりやや強
		10YR2/1　黒色			
		10YR3/2　黒褐色		10%	
	7	10YR4/3　にぶい黄褐色			しまりやや強（～中）
		10YR7/8　黄橙色	粘土	ブロック・粒10～15%	
		10YR2/1　黒色		粒１～2%	
	8	10YR3/2　黒褐色			しまりやや強（～中）
		10YR7/8　黄橙色	粘土	ブロック・粒5%	
	9	10YR4/3　にぶい黄褐色			しまりやや強
		10YR7/8　黄橙色	粘土	粒5%	
	10	10YR3/1　黒褐色			しまりやや強（～中）
		10YR7/8　黄橙色	粘土	粒3%	
	11	10YR5/4　にぶい黄褐色	砂（～砂質粘土）		しまりやや強
E−F	1	10YR5/4　にぶい黄橙色			しまりやや強
	2	10YR4/2　灰黄褐色		1～2cm石1～2%	しまりやや強
	3	10YR4/2　灰黄褐色		数mm～1cm石1～2%、しまり２＜3	しまりやや強
	4	10YR4/1　褐灰色	砂質土		しまり中
		10YR6/6　明黄褐色	砂質土	2～3%、数mm～1cm石2%、3～4cm石あり	
	5	10YR4/1　褐灰色		1～3cm石25～30%	しまり中
	6-1	10YR4/4　褐色		（1：1）	しまり中（～やや強）
		7.5YR5/8　明褐色	粘土		
	6-2	10YR4/4　褐色			しまり中（～やや強）
	7	10YR4/4　褐色		（1：1）、1cm前後石25%	しまりやや強
		10YR5/6　黄褐色	砂質土		

溝の方向は、西に向かうにしたがって北へ振れて行くが、おそらく旧地形の傾斜変換線に沿う形で掘削が進行した結果と思われる。溝中央部の真北を基準にした方向はN40°Wである。

土層と遺物出土状況　溝の堆積土は 12 層に分層されている。各層とも北辺と南辺から流れ込んだ状況を示しているが、南から堆積が進行していった土層ほど下位に存在している。溝の深度・幅を考慮すると中世城館の空堀と考えることができるが、土層の注記には土塁の崩落を原因とする特徴を

記載した層はなかった。仮にこの溝を空堀としてとらえた場合、土塁状の構築物はなかったと考えられる。

堆積土から縄文早期～後期中葉の土器片が出土している。挿図には比較的大きな破片を掲載している。土器以外の石器・石製品・土製品の出土数も多い。土製品のなかには、腕輪形土製品が含まれていた。丘陵頂部の削平によって失われた遺構の多さを思わせる。

遺物は周囲から流れ込んだ状況を示している。たとえば遺物取上げの注記を見ると、縄文早期２類土器の出土位置は下層から上層まで様々である。縄文後期６類も同様であって下層から上層の出土位置が記録されている。

4　掘立柱建物跡・柵列・ピット

１号掘立柱建物跡（SB１）（第 15 図）

２区東側において検出。一面下屋、梁行１間、桁行５間の東西棟である。桁行の方向は N70°E である。主屋と思われる。西側は束柱があり、総柱構造になっている。梁行１間タイプと総柱タイプの複合型の建物である。

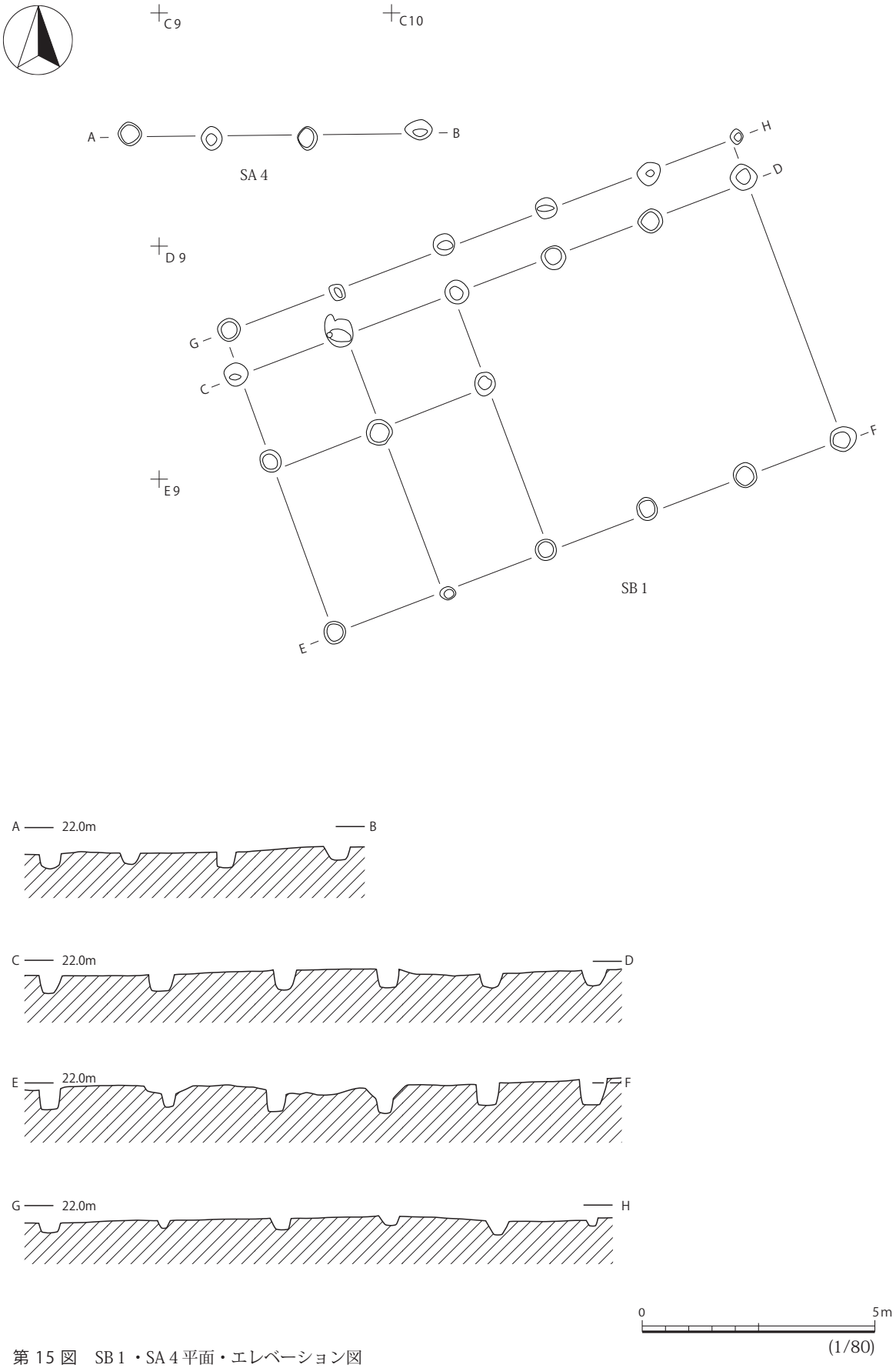
主屋の規模は梁行６m90cm、桁行 11m70cm。北面の下屋柱を除くと梁行６m（約 20 尺）である。梁行約 23 尺、桁行約 39 尺、上屋側柱と下屋柱との間尺は約３尺である。床を張っていた部分と土間の部分の区別がある。柱穴内および建物周辺から遺物の出土はなかったが、桁行の間尺は 240cm（約８尺）であるから中世建物の柱間と考えられる。また、上屋の梁行が１間であることも中世建物であることの根拠である。

柵　　列（SA１～SA４）（第 15・16 図）

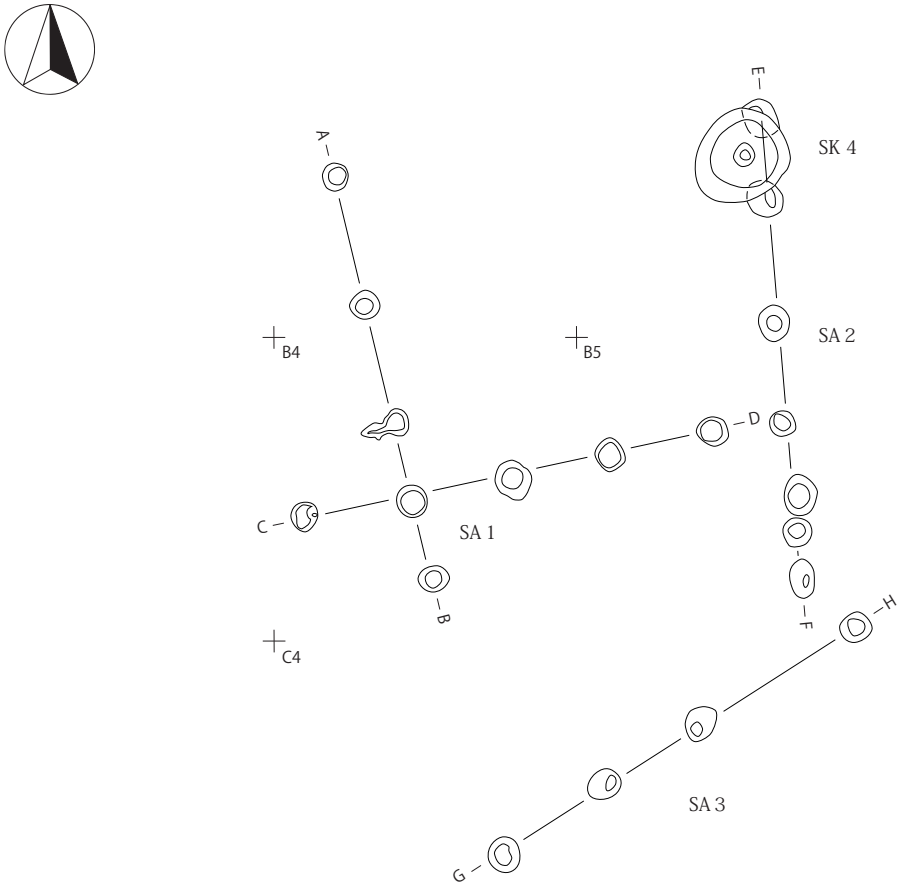
SB１の北側とＢ４・Ｂ５・Ｃ５区に柵列と思われる遺構がある。Pit 間の距離は 180cm から 300cm で一定していない。また、SB１の建物方向と同じものはない。柱穴内から遺物の出土はなかったため時期の特定はできないが、中近世の遺構と考えられる。

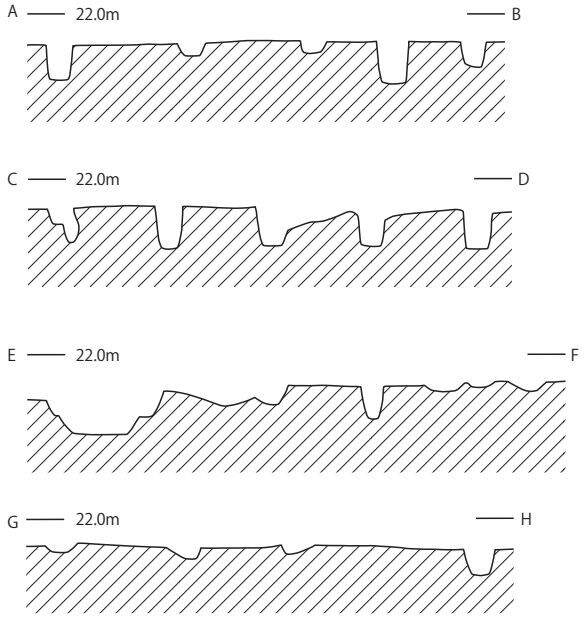
ピ　ッ　ト（SP１～SP86）（第 39 図・第６表）

２区調査区検出のピットは、埋土の特徴から現地調査の段階で３種類に分類している。大きさと深度を計測後、完掘している。埋土の特徴は、黒色・黒褐色土、黒色土と黄色土の斑状、灰褐色土である。遺物の出土があったのは、SP70・79 の２基であって、凹石・磨石・礫器・石槍が出土している。



第 15 図　SB 1 ・SA 4 平面・エレベーション図





第 16 図　SA 1 ・ 2 ・ 3 平面・エレベーション図

第６表 ピット観察表

No	位置（グリット）	検出層位	規模（ｃｍ）			平面形	所属時期	備考
			長径	短径	深さ			
1	A3	地山面	70	50	—	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
2	B2	地山面	35	34	28	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
3	A2	地山面	37	35	26	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
4	B3	地山面	65	61	65	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
5	B3	地山面	40	37	52	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
6	B3	地山面	56	49	38	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
7	B3	地山面	45	42	73	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
8	B3	地山面	52	39	34	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
9	A3、B3	地山面	74	52	37	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
10	B3	地山面	58	53	41	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
11	A2	地山面	33	32	20	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
12	A4	地山面	49	48	21	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
13	A4	地山面	70	58	27	楕円	時期不明	灰褐色土
14	A4	地山面	72	48	11	楕円	時期不明	灰褐色土
15	A4	地山面	52	38	14	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
16	B3	地山面	52	50	70	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
17	B4	地山面	48	44	57	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
18	B4	地山面	60	38	22	不整楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
19	B3、B4	地山面	56	54	18	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
20	B4	地山面	44	43	20	やや円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
21	B4	地山面	54	51	71	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
22	B4	地山面	44	38	38	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
23	B4	地山面	64	60	64	やや不整楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
24	B5	地山面	48	36	50	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
25	C4	地山面	48	38	29	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
26	C4	地山面	60	40	—	楕円	時期不明	灰褐色土
27	C4	地山面	66	42	35	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
28	C5	地山面	55	48	18	円	時期不明	黒色・黒褐色土
29	C5、D5	地山面	35	33	28	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
30	C5	地山面	28	27	19	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
31	B5	地山面	54	44	32	楕円	時期不明	灰褐色土
32	C5	地山面	60	48	36	楕円	時期不明	灰褐色土
33	B5	地山面	50	46	20	楕円	時期不明	黒色・黒褐色土
34	B5	地山面	64	54	46	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
35	B5	地山面	53	50	46	やや円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
36	B5	地山面	50	48	40	やや円	時期不明	黒色・黒褐色土
37	B5	地山面	43	42	54	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
38	B5	地山面	53	48	68	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
39	A4	地山面	57	52	50	やや円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
40	B5	地山面	80	60	40	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
41	A6	地山面	53	47	31	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
42	A6	地山面	40	32	40	楕円	時期不明	黒色・黒褐色土
43	A6	地山面	44	41	25	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
44	A6	地山面	40	38	24	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
45	B6	地山面	52	37	54	不整楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
46	B6	地山面	36	34	30	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
47	B6	地山面	70	52	40	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
48	B6	地山面	58	54	41	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
49	B6	地山面	45	40	19	ほぼ円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
50	B6	地山面	34	28	21	楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
51	B6	地山面	45	42	40	ほぼ円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
52	C6	地山面	70	44	29	楕円	時期不明	灰褐色土
53	C6	地山面	44	35	25	楕円	時期不明	灰褐色土
54	C6	地山面	50	40	33	楕円	時期不明	灰褐色土
55	D6	地山面	49	46	48	ほぼ円	時期不明	黒色・黒褐色土
56	B4	地山面	50	42	45	ほぼ円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
57	D9	地山面	60	60	37	やや円	時期不明	黒色・黒褐色土
58	D10	地山面	52	50	43	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
59	D10	地山面	53	50	39	円	時期不明	黒色・黒褐色土
60	C11	地山面	52	50	35	円	時期不明	黒色・黒褐色土
61	C11	地山面	57	55	36	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
62	D9	地山面	51	50	39	円	時期不明	灰褐色土
63	E9	地山面	47	46	46	円	時期不明	黒色・黒褐色土
64	E10	地山面	34	28	28	楕円	時期不明	黒色・黒褐色土
65	E10	地山面	46	44	52	円	時期不明	灰褐色土
66	D11、E11	地山面	54	50	49	円	時期不明	灰褐色土
67	D11	地山面	56	52	57	ほぼ円	時期不明	黒色・黒褐色土
68	E11	地山面	49	42	44	ほぼ円	時期不明	灰褐色土
69	B5	地山面	44	38	22	楕円	時期不明	黒色・黒褐色土
70	E9	地山面	72	46	21	楕円	時期不明	黒色・黒褐色土
71	F10	地山面	66	50	48	楕円	時期不明	黒色・黒褐色土
72	C8	地山面	53	51	32	ほぼ円	時期不明	灰褐色土
73	C8	地山面	50	50	33	円	時期不明	灰褐色土
74	C9	地山面	50	44	27	ほぼ円	時期不明	灰褐色土
75	C9	地山面	50	41	38	ほぼ円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
76	C10	地山面	60	40	30	楕円	時期不明	灰褐色土
77	E6	地山面	47	42	27	やや円	時期不明	灰褐色土
78	C6	地山面	39	35	28	やや円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
79	B6	地山面	30	30	39	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
80	C2	地山面	34	26	23	楕円	時期不明	黒色・黒褐色土
81	C2	地山面	29	25	5	ほぼ円	時期不明	黒色・黒褐色土
82	C2	地山面	35	24	44	楕円	時期不明	黒色・黒褐色土
83	D4	地山面	33	28	19	楕円	時期不明	黒色・黒褐色土
84	G7	地山面	62	44	12	楕円	時期不明	灰褐色土
85	C5	地山面	62	46	47	不整楕円	時期不明	黒色土と黄色の斑状
86	A4	地山面	45	42	57	円	時期不明	黒色土と黄色の斑状

5　遺物包含層

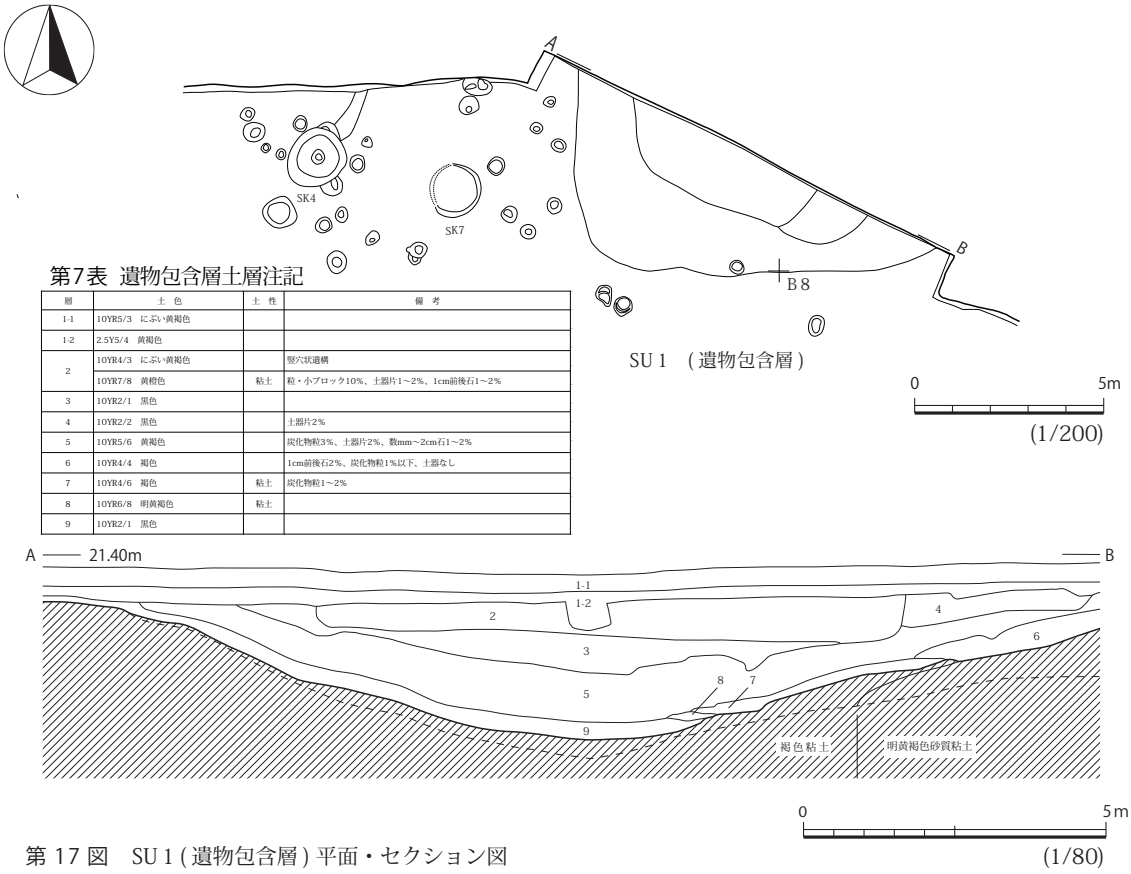
形状と堆積土（SU１）（第 17 図）

２区Ａ７・Ａ８区は調査区北側急傾斜地の境界に接している。斜面の崩落によって形成された谷の頂部が調査区内に検出されたが、その規模は東西方向 10.3m、南北方向 4.1m である。谷の方向はＮ 30°Ｅである。深度は谷底部で最大 2.05m、谷部傾斜の中央部で 1.2m である。

谷底面の下層には厚さ 20cm の黒色土（９層）が堆積している。崩落の後、草木の生育する状態が続いたようである。直上の５層は、厚さ 50cm 前後のしまりの強い黄褐色土である。小礫を含んでいて地山の風化花崗岩が流れ込んで堆積した層である。谷地形の埋没が進行してゆく過程で遺物包含層の形成があり、縄文早期２類土器が５層から出土している。さらに上層は再び黒色土の堆積がみられるので、縄文早期以降は浅い窪地状の形状を見せていたと考えられる。

遺物出土状況（SU１）（第 17 図・第 35 図～38 図）

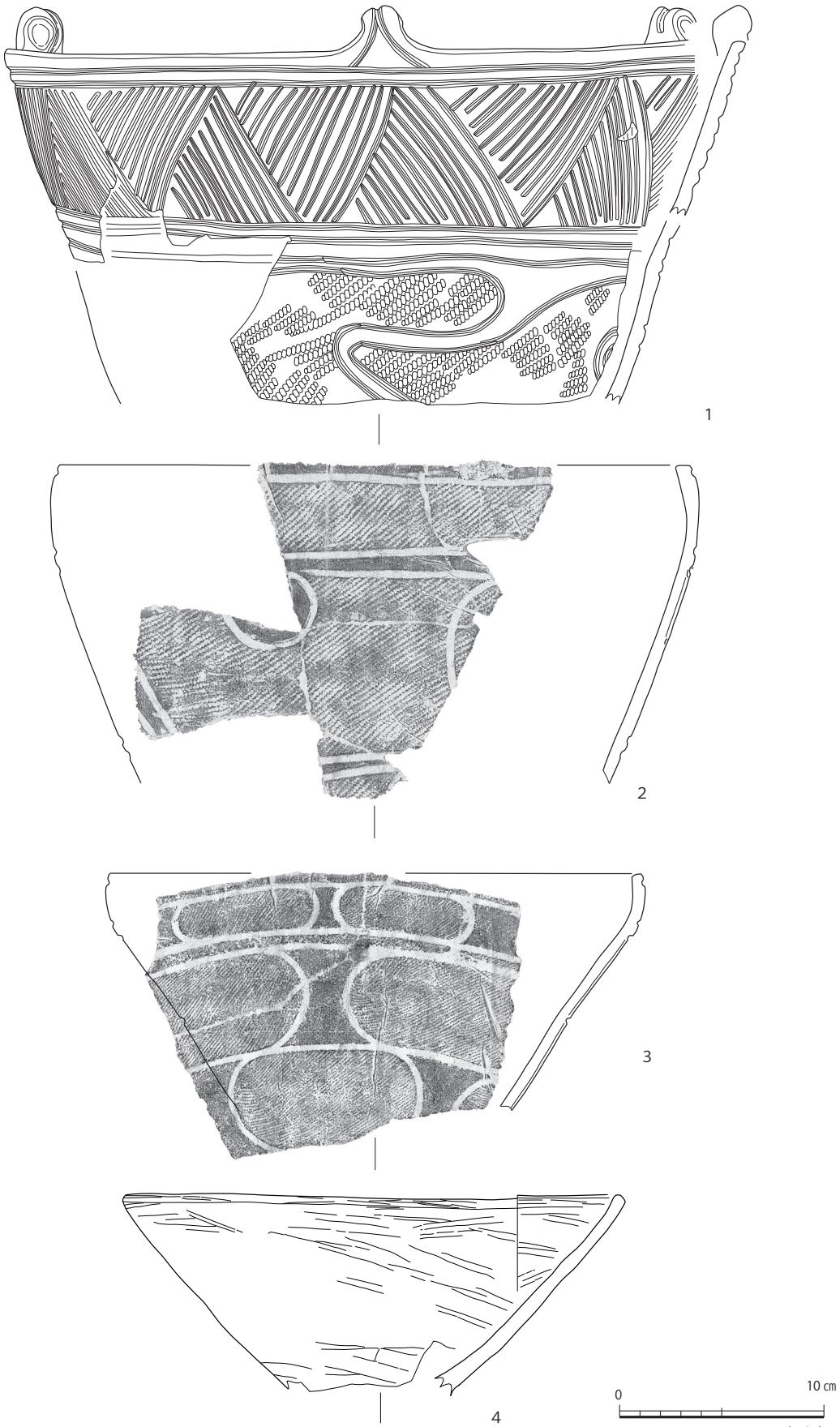
包含層出土遺物の選択作業を行ったところ、縄文早期２類土器がまとまって出土していることが判明した。出土層の記録は４・５層、５層上部、６層である。完形復元できた個体はないが、口縁部・胴部の大形破片と尖底部の破片が数個体分出土している。磨滅の痕跡はなく、埋没しつつある谷底部に廃棄した遺物である。石器・土製品の出土層位も同様であった。



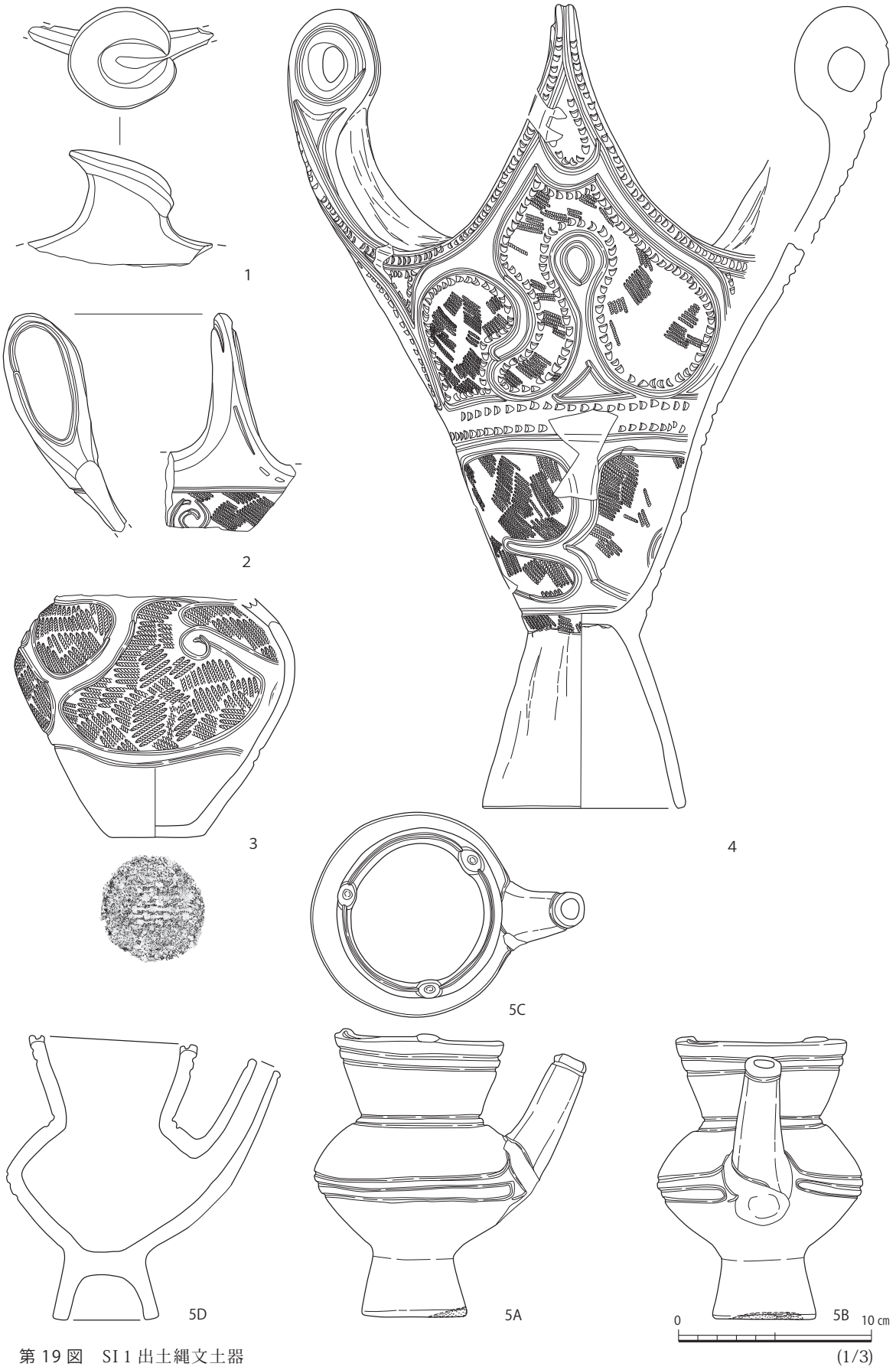
第7表 遺物包含層土層注記

層	土 色	土 性	備 考
1-1	10YR5/3 にぶい黄褐色		
1-2	2.5Y5/4 黄褐色		
2	10YR4/3 にぶい黄褐色		竪穴状遺構
	10YR7/8 黄橙色	粘土	粒・小ブロック10%、土器片1～2%、1cm前後石1～2%
3	10YR2/1 黒色		
4	10YR2/2 黒色		土器片2%
5	10YR5/6 黄褐色		炭化物粒3%、土器片2%、数mm～2cm石1～2%
6	10YR4/4 褐色		1cm前後石2%、炭化物粒1%以下、土器なし
7	10YR4/6 褐色	粘土	炭化物粒1～2%
8	10YR6/8 明黄褐色	粘土	
9	10YR2/1 黒色		

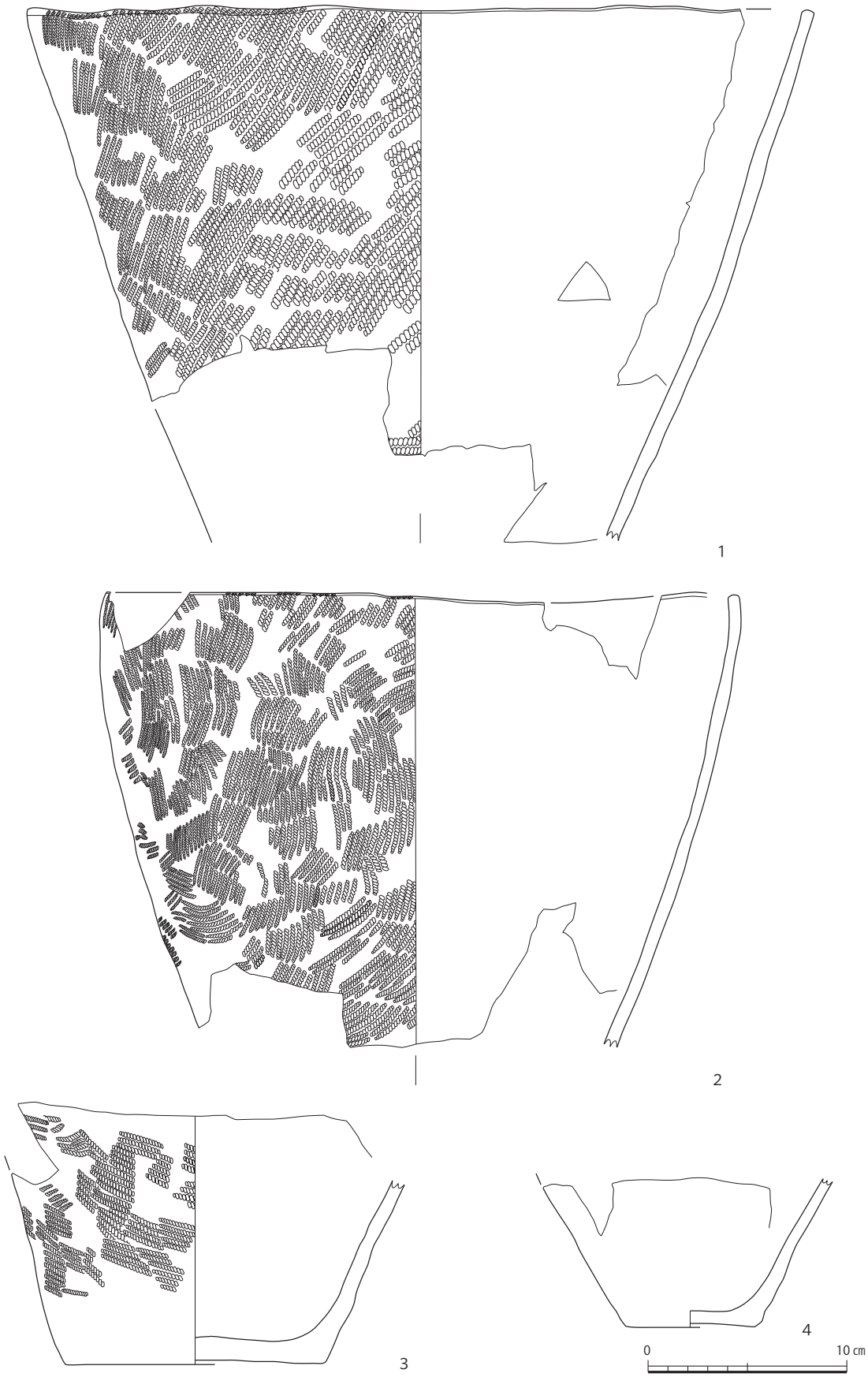
第 17 図　SU１(遺物包含層)平面・セクション図



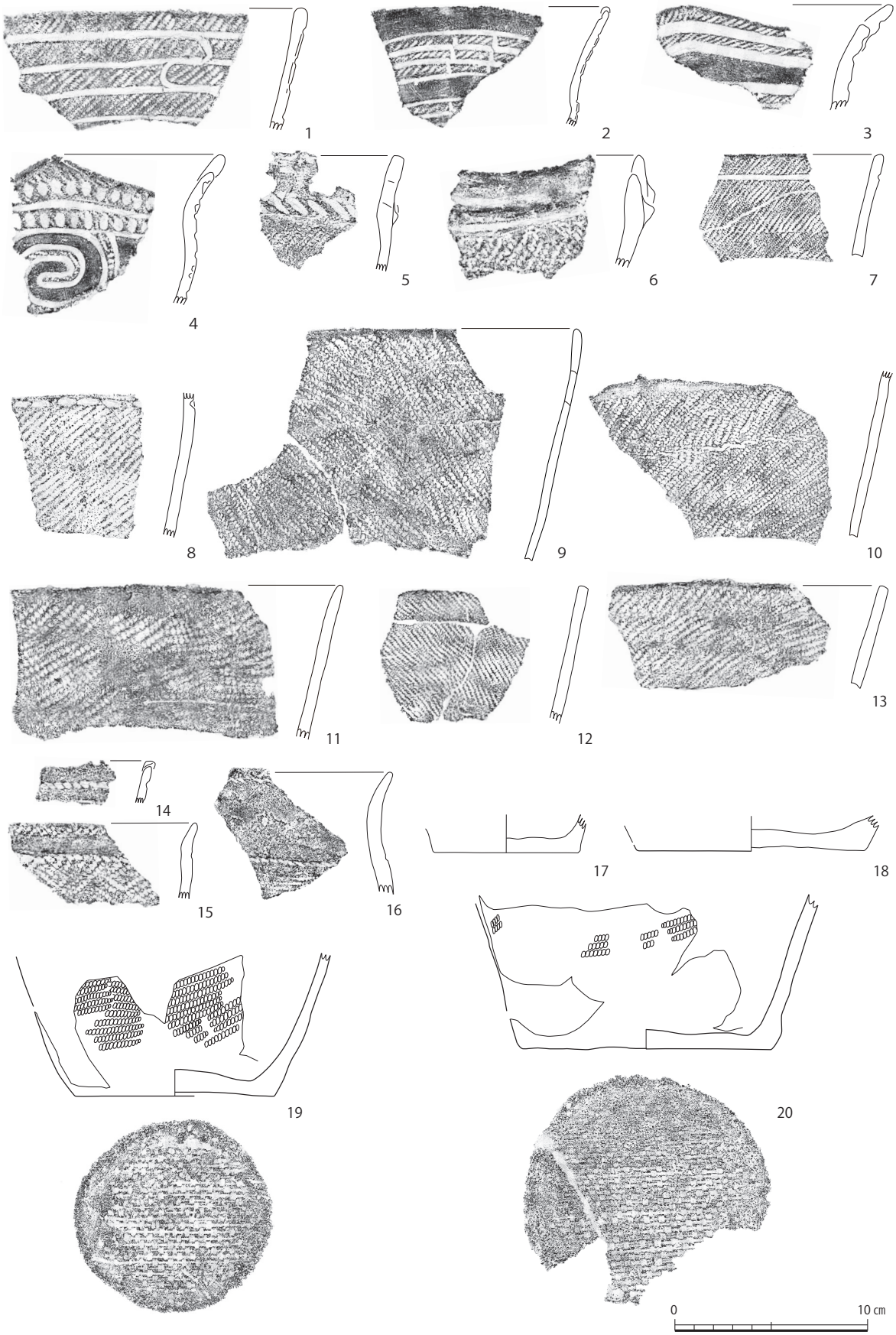
第 18 図　SI 1 出土縄文土器



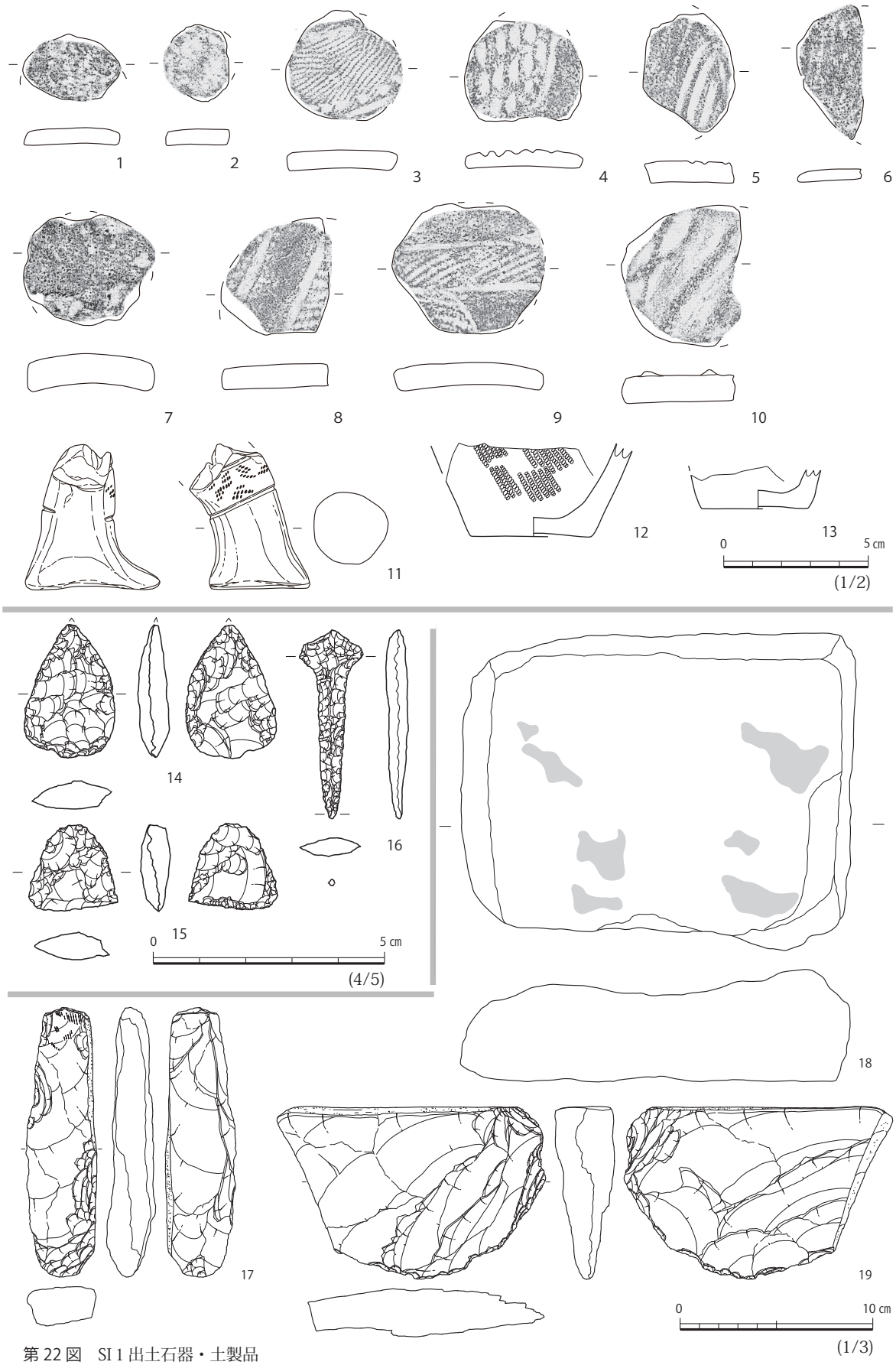
第 19 図　SI 1 出土縄文土器　(1/3)



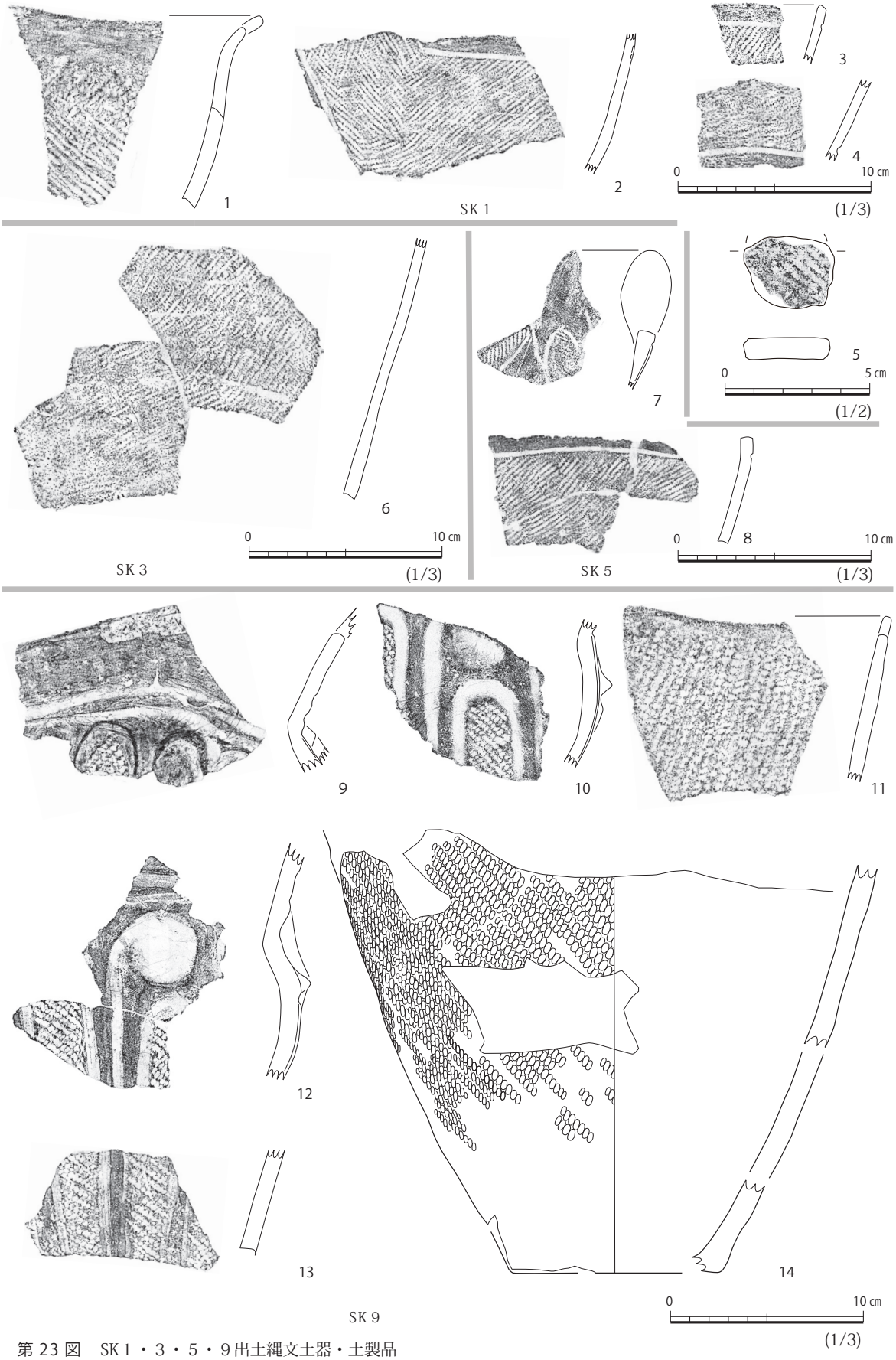
第 20 図　SI 1 出土縄文土器



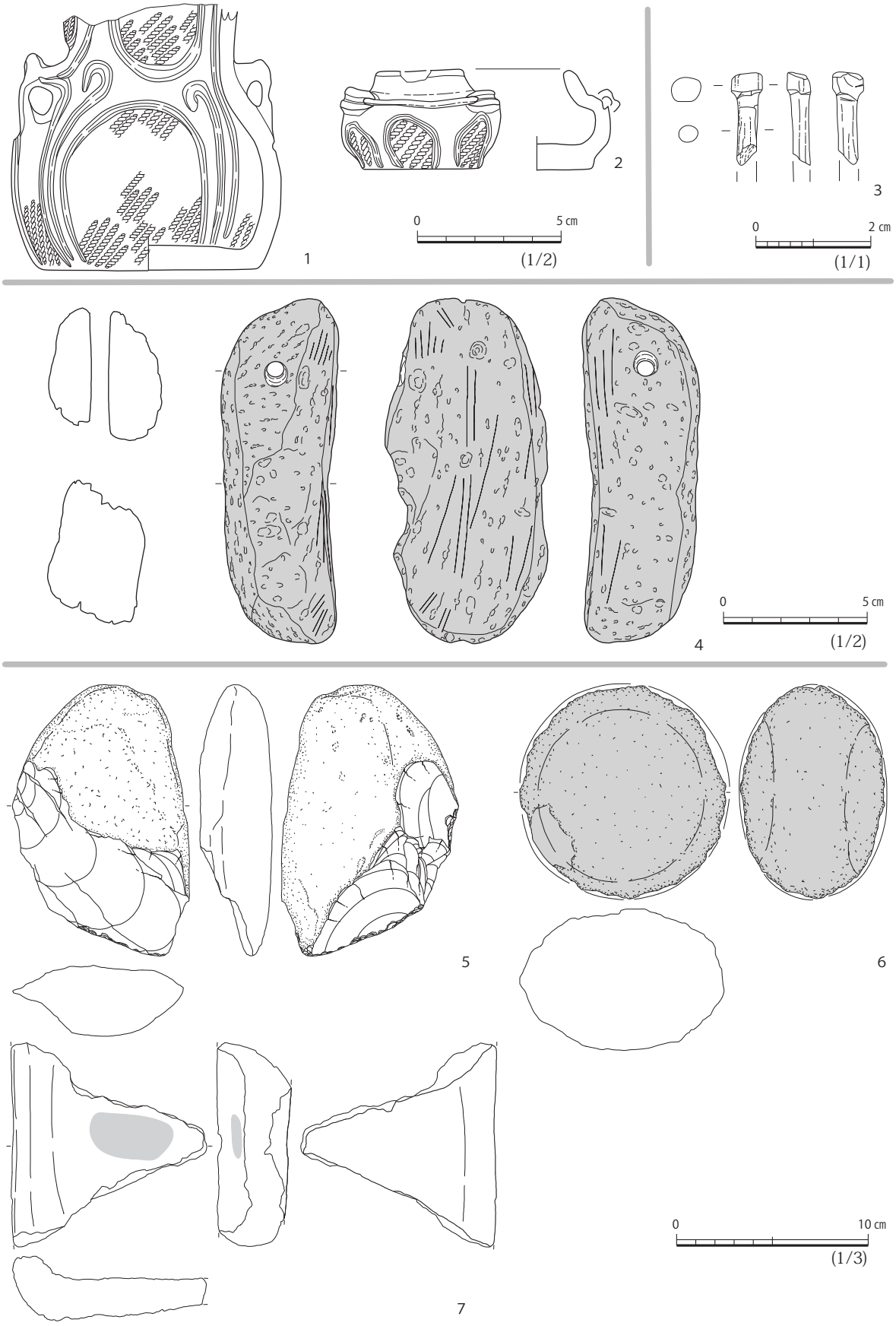
第 21 図　SI 1 出土縄文土器　(1/3)



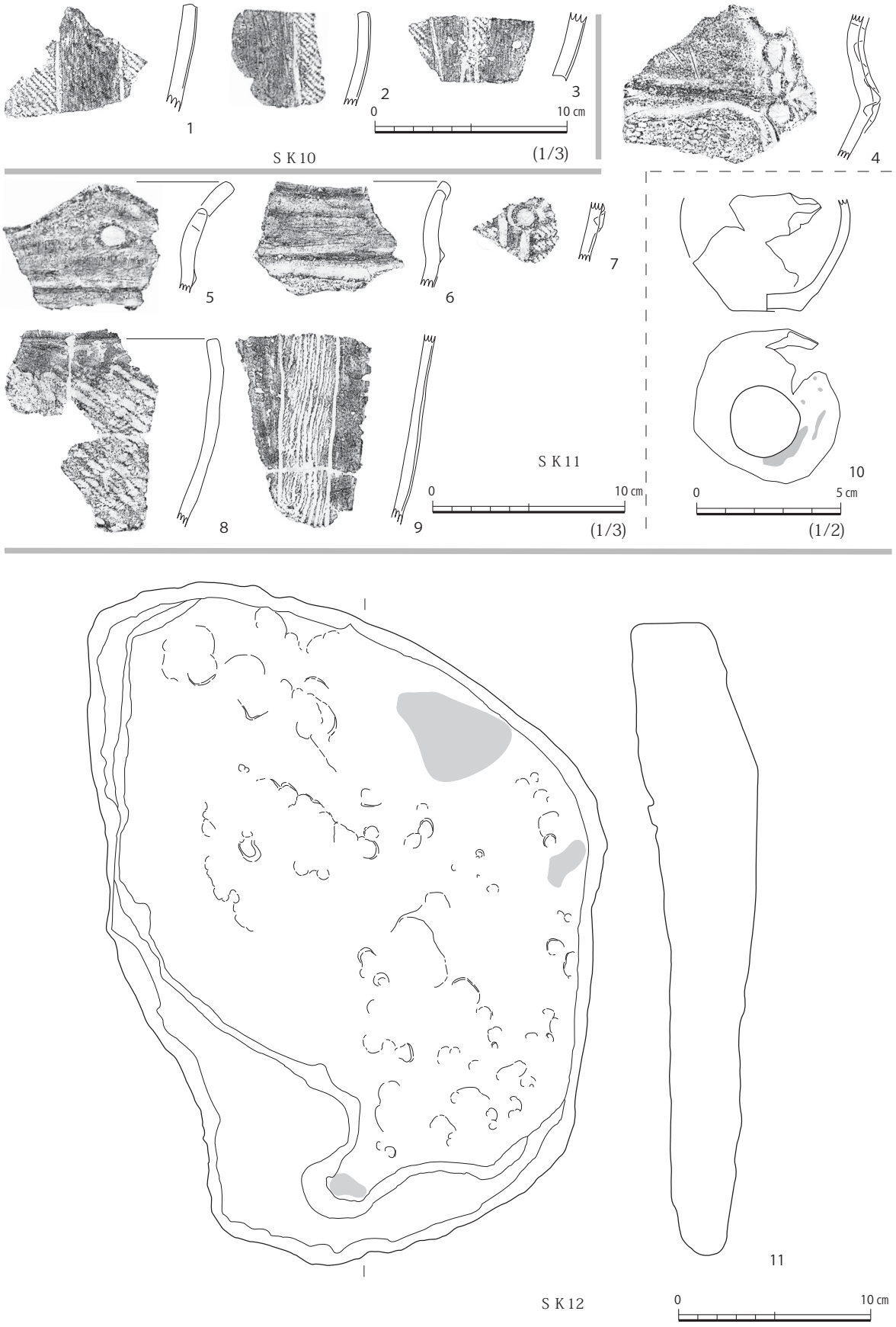
第 22 図　SI 1 出土石器・土製品



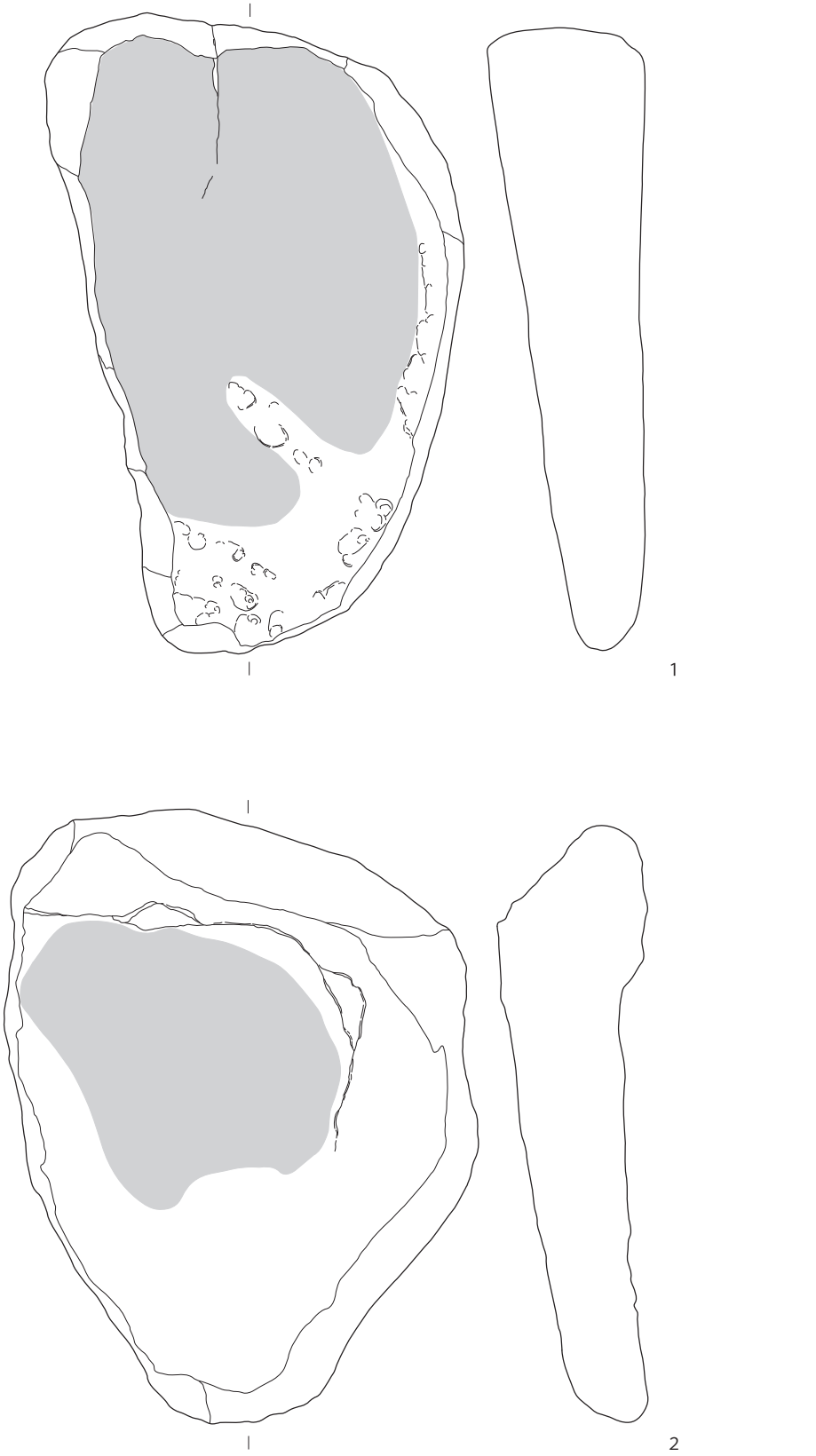
第 23 図　SK 1・3・5・9出土縄文土器・土製品



第 24 図　SK 9 出土縄文土器・石器・石製品・骨角器



第 25 図　SK10・11・12 出土縄文土器・石皿

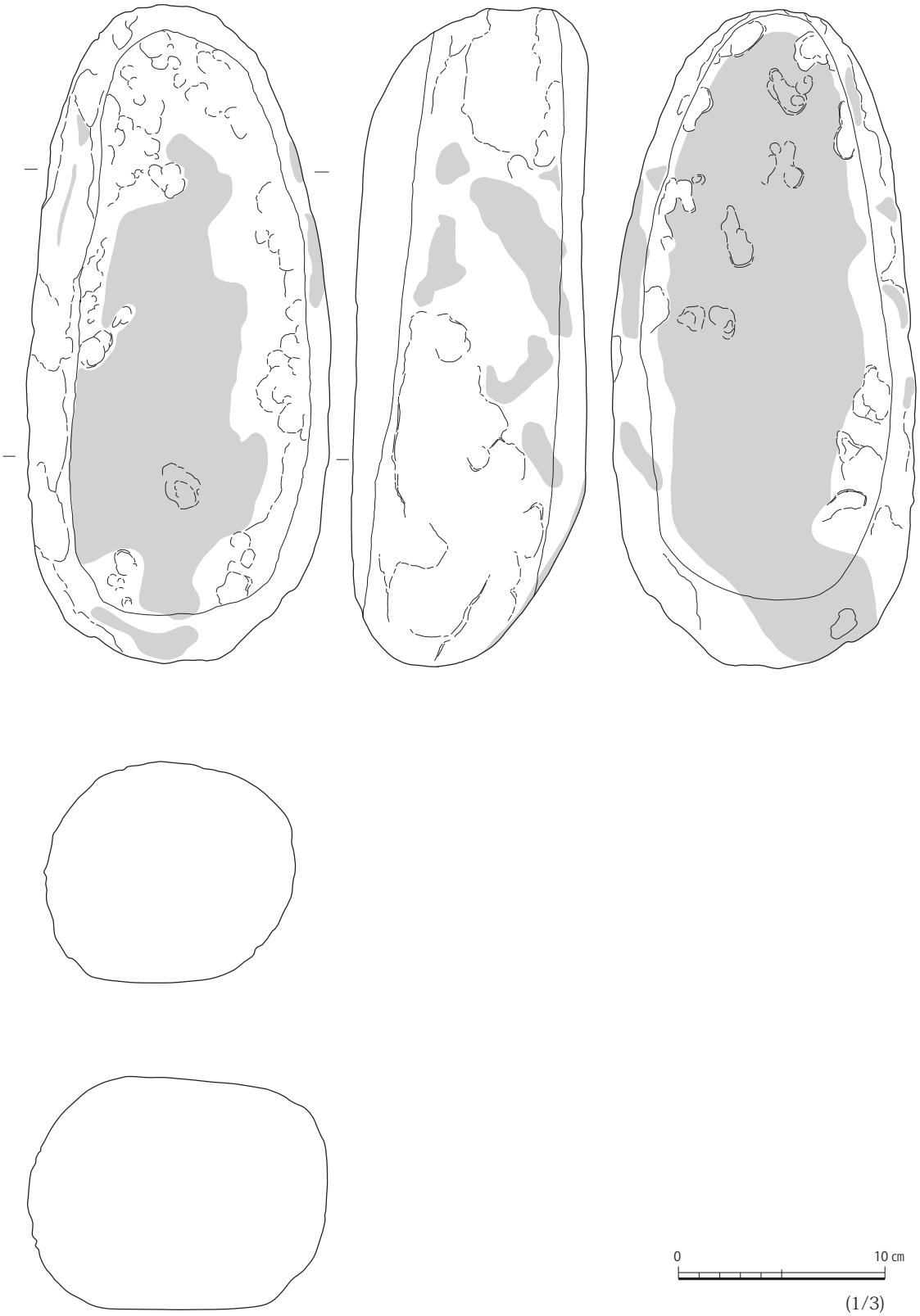


第26図　SK12 出土石皿

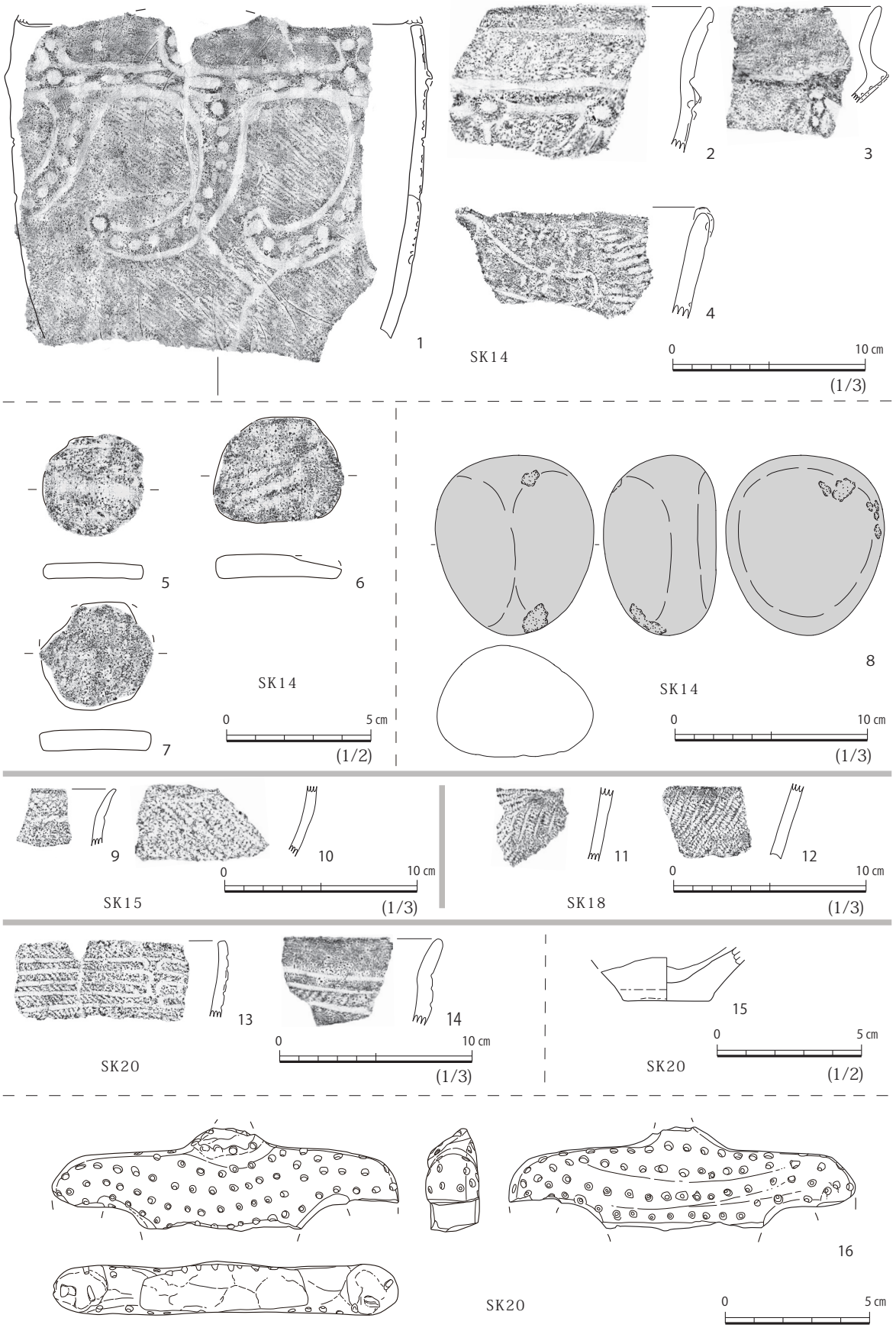
(1/3)

第 27 図　SK12 出土石皿・砥石

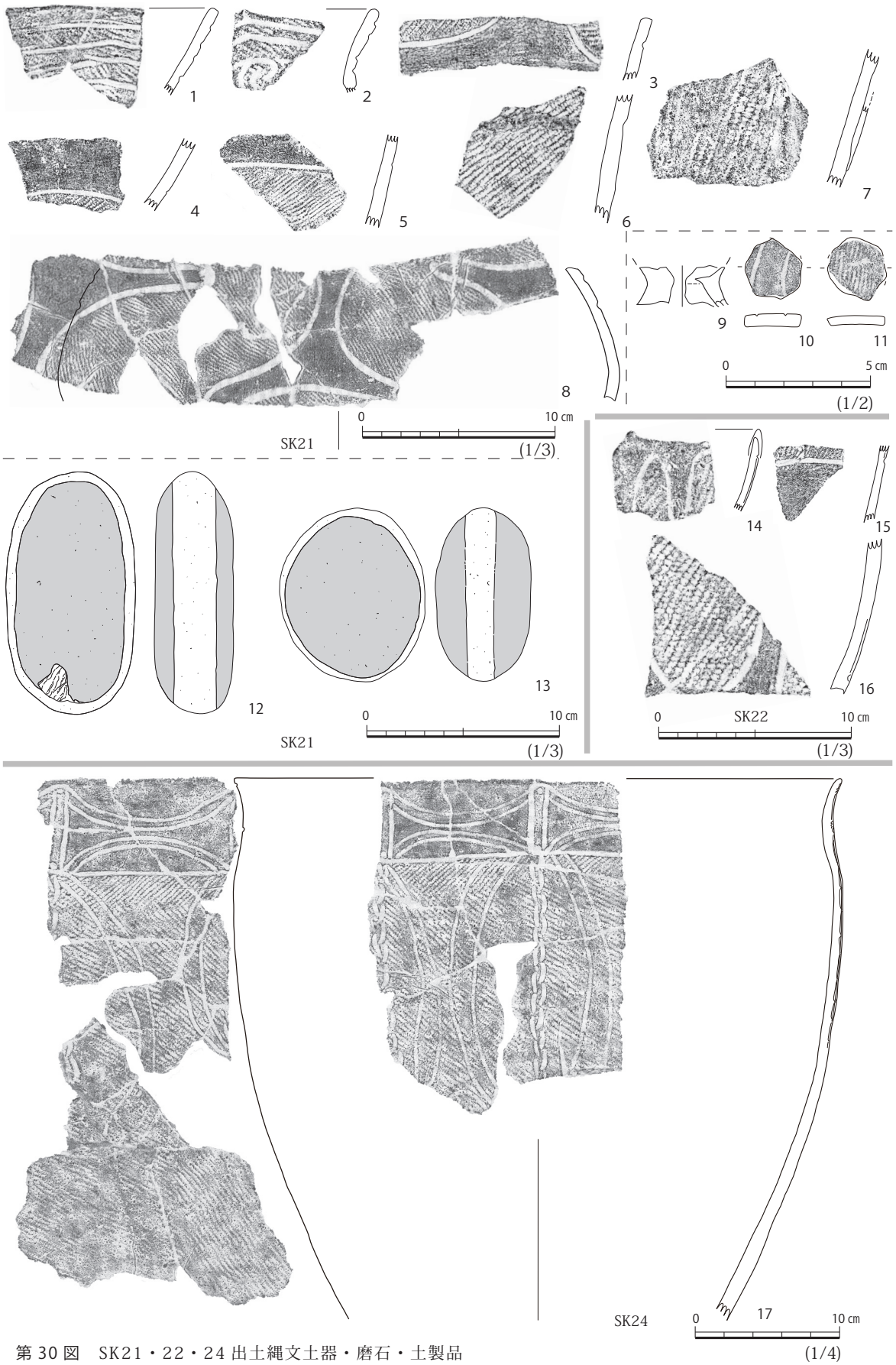
(1/3)



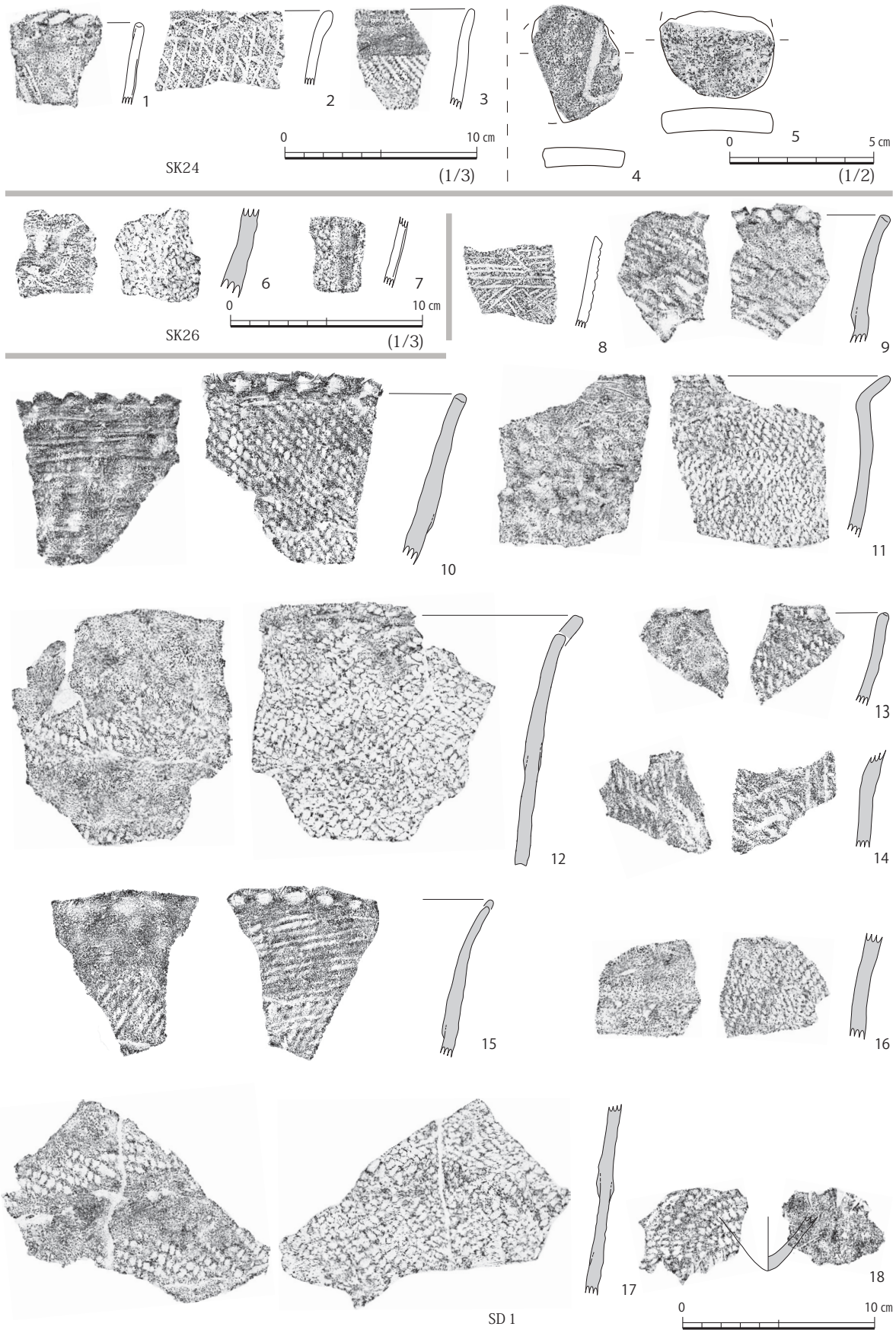
第 28 図　SK12 出土大形磨石



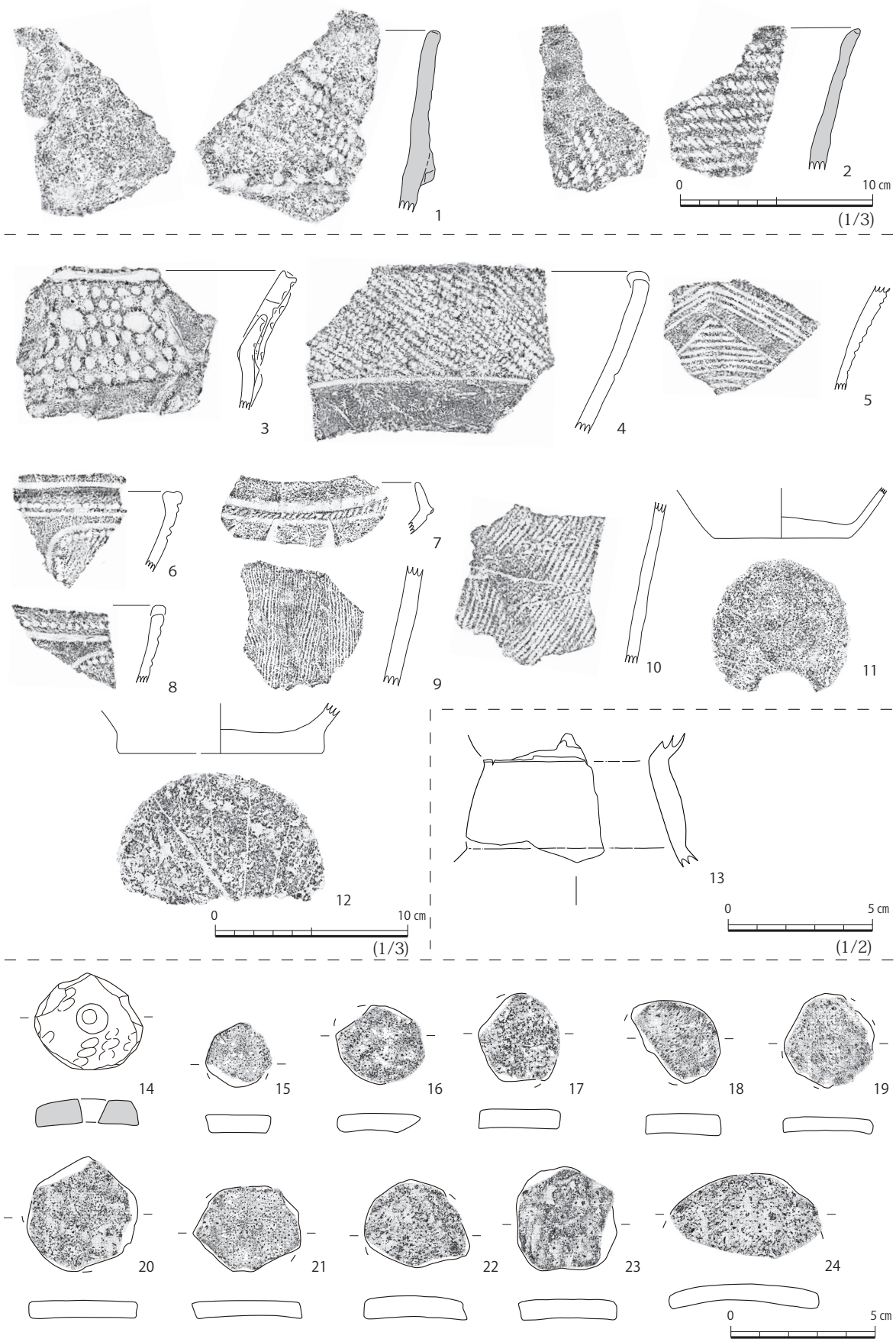
第 29 図　SK14・15・18・20 出土縄文土器・石器・土製品



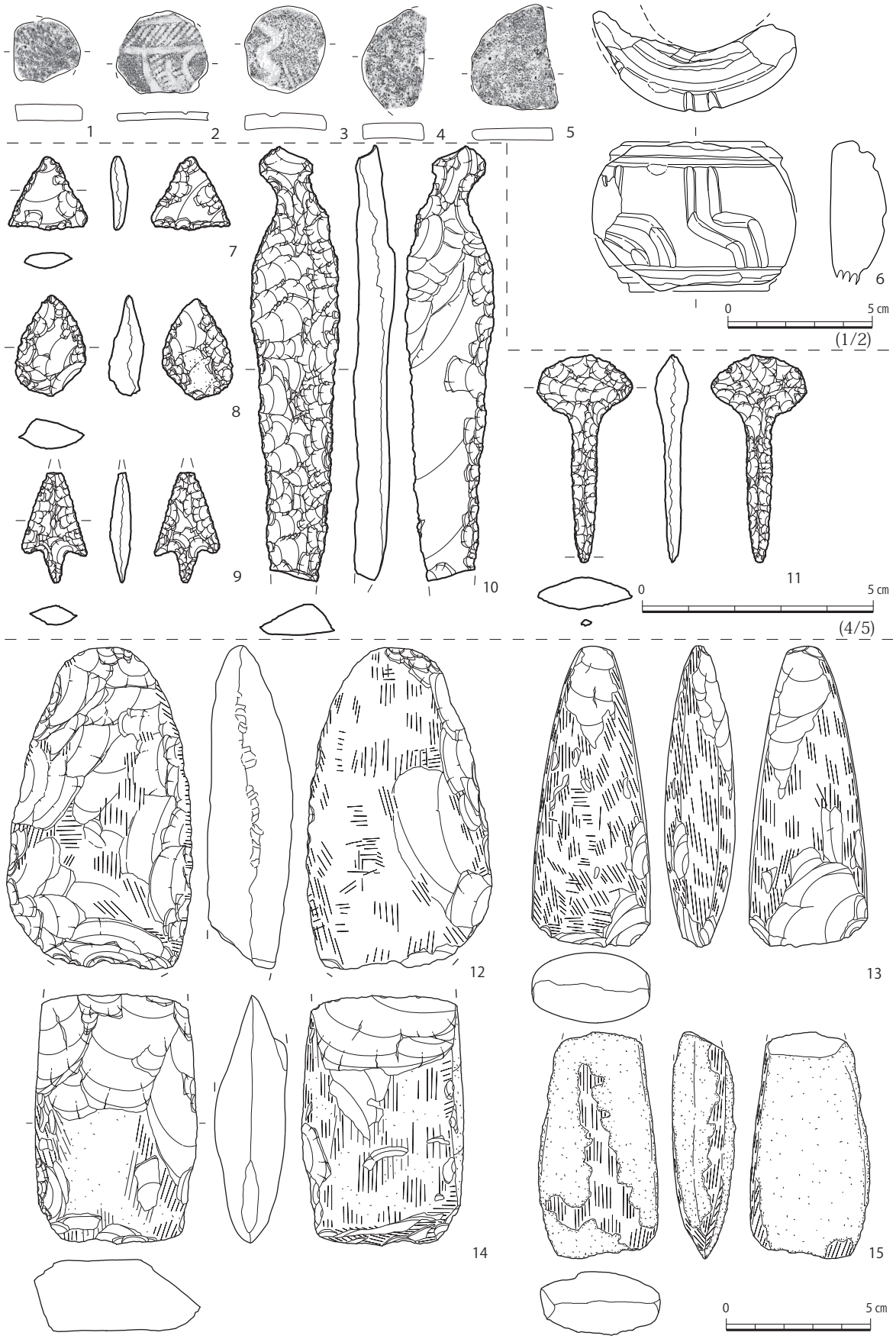
第 30 図　SK21・22・24 出土縄文土器・磨石・土製品



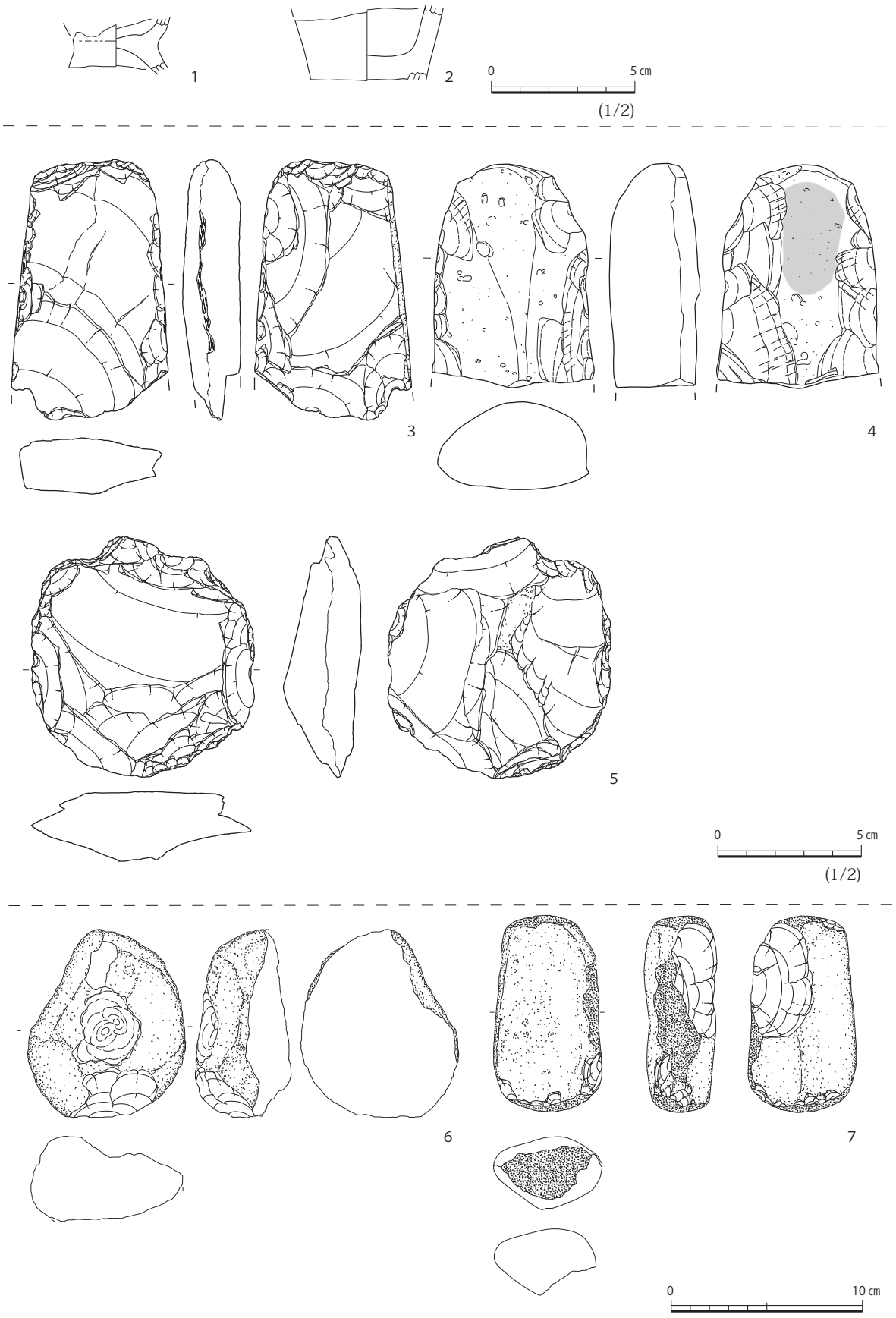
第 31 図　SK24・26・SD1 出土縄文土器・土製品



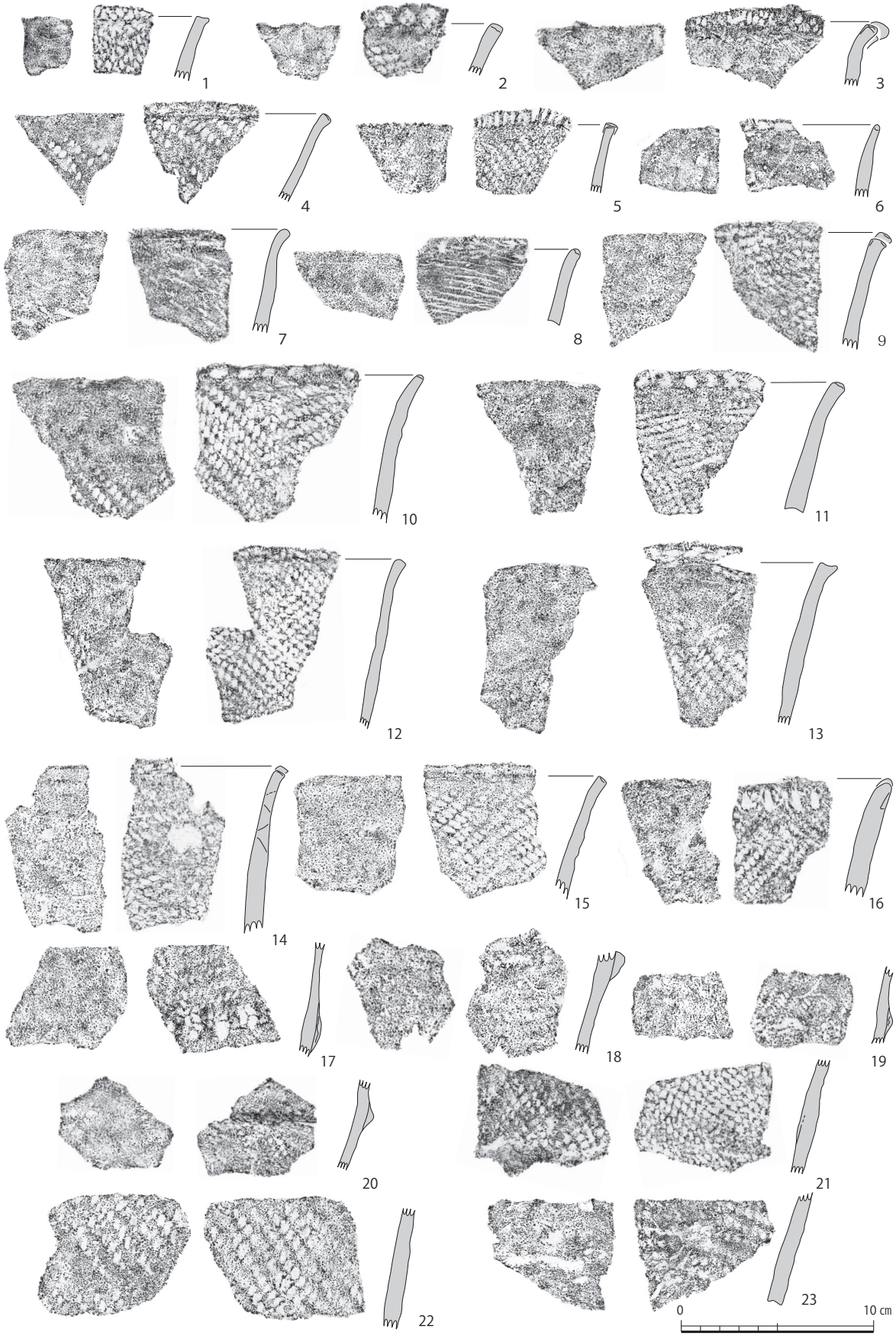
第 32 図　SD1 出土縄文土器・土製品



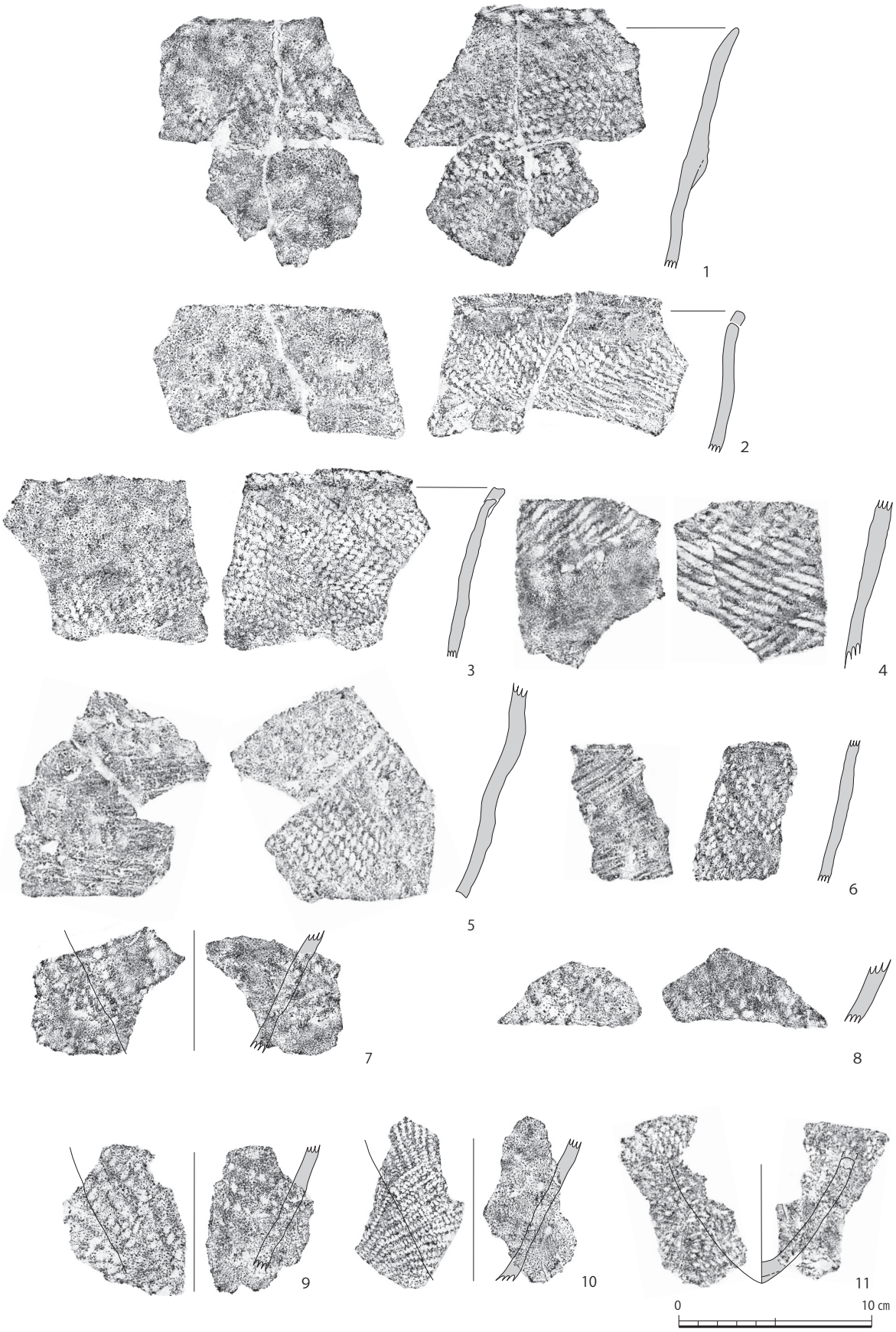
第 33 図　SD1 出土石器・土製品



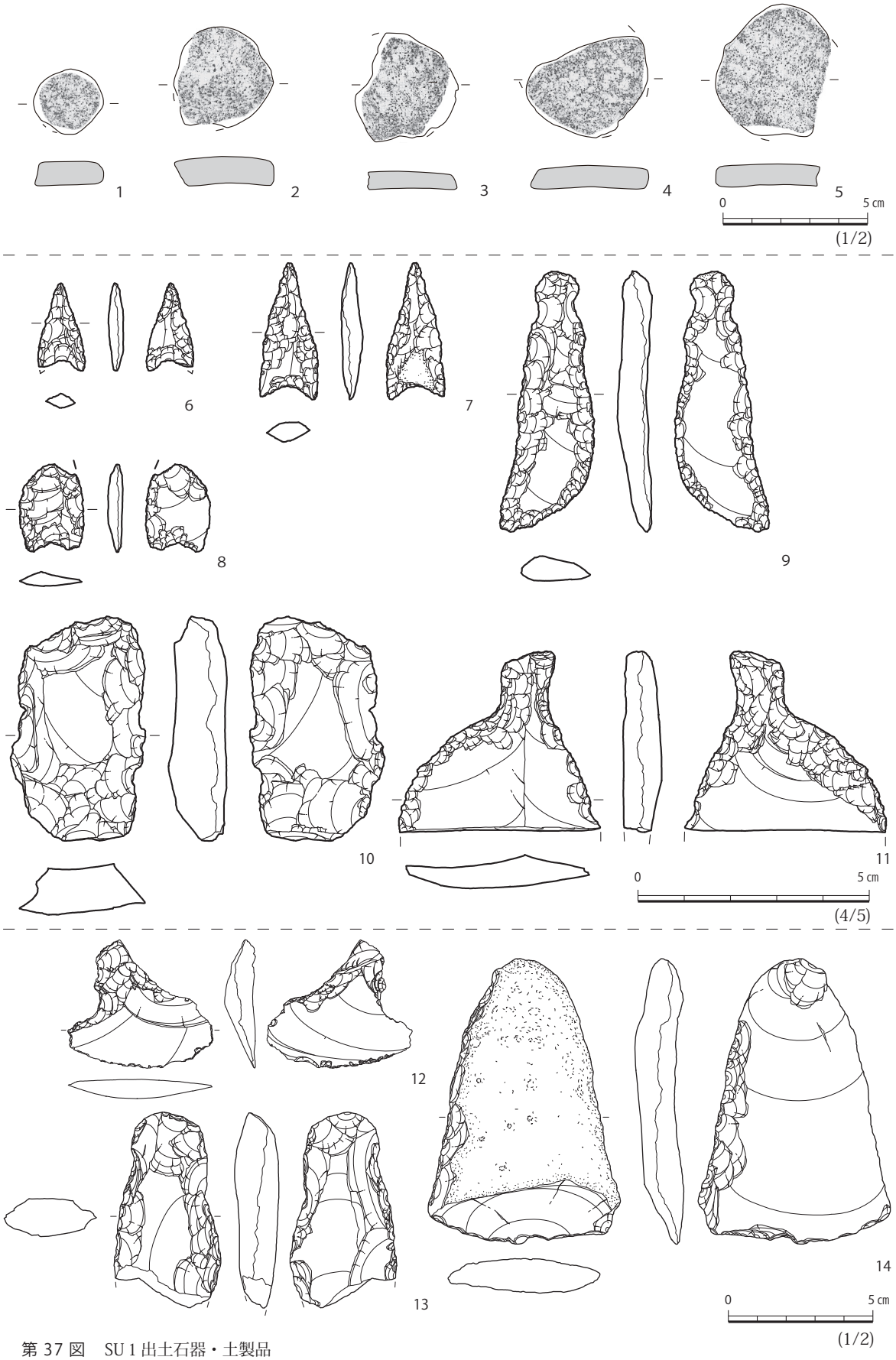
第 34 図　SD 1 出土縄文土器・石器



第 35 図　SU 1 出土縄文土器　(1/3)

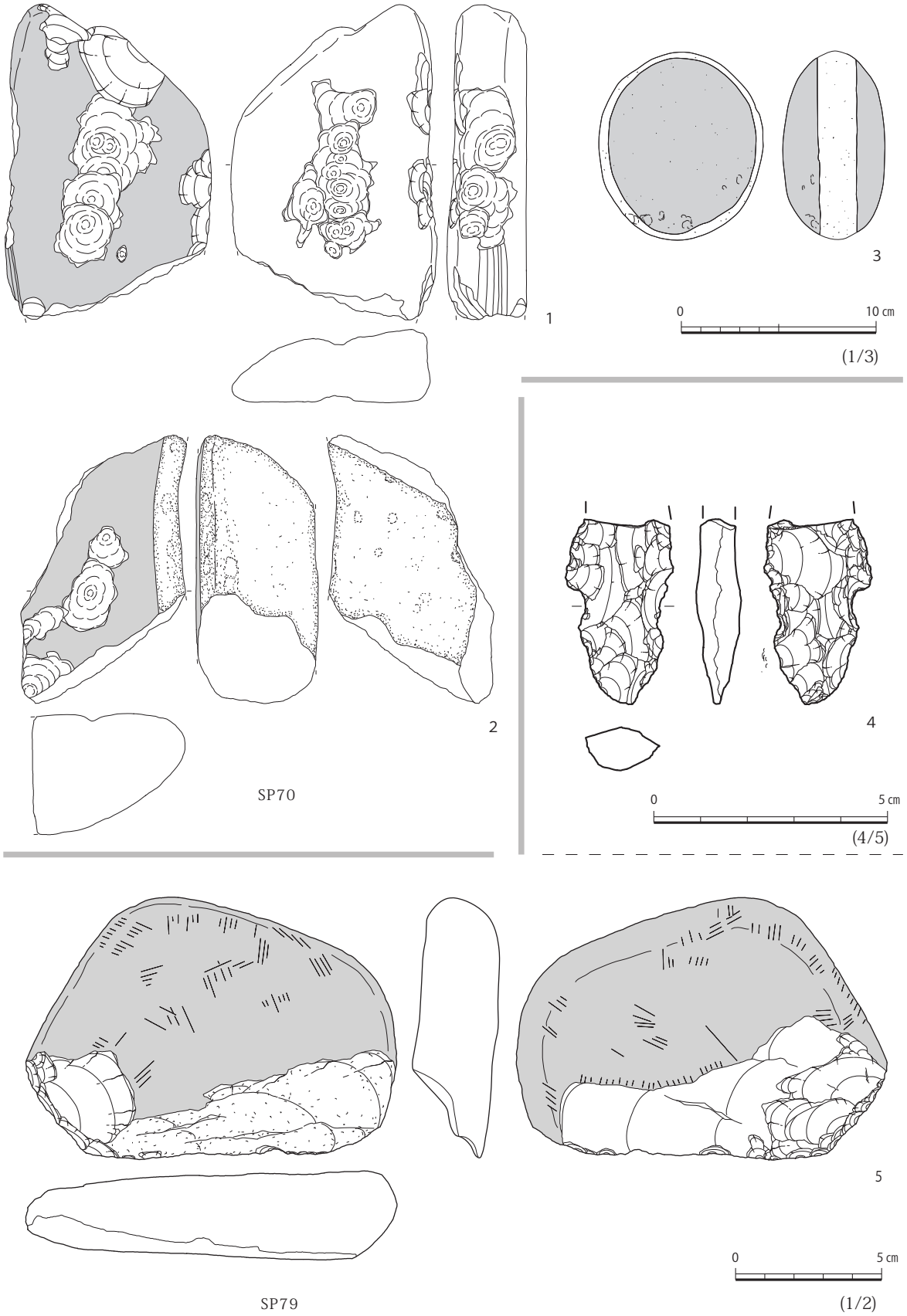


第 36 図　SU1 出土縄文土器　(1/3)

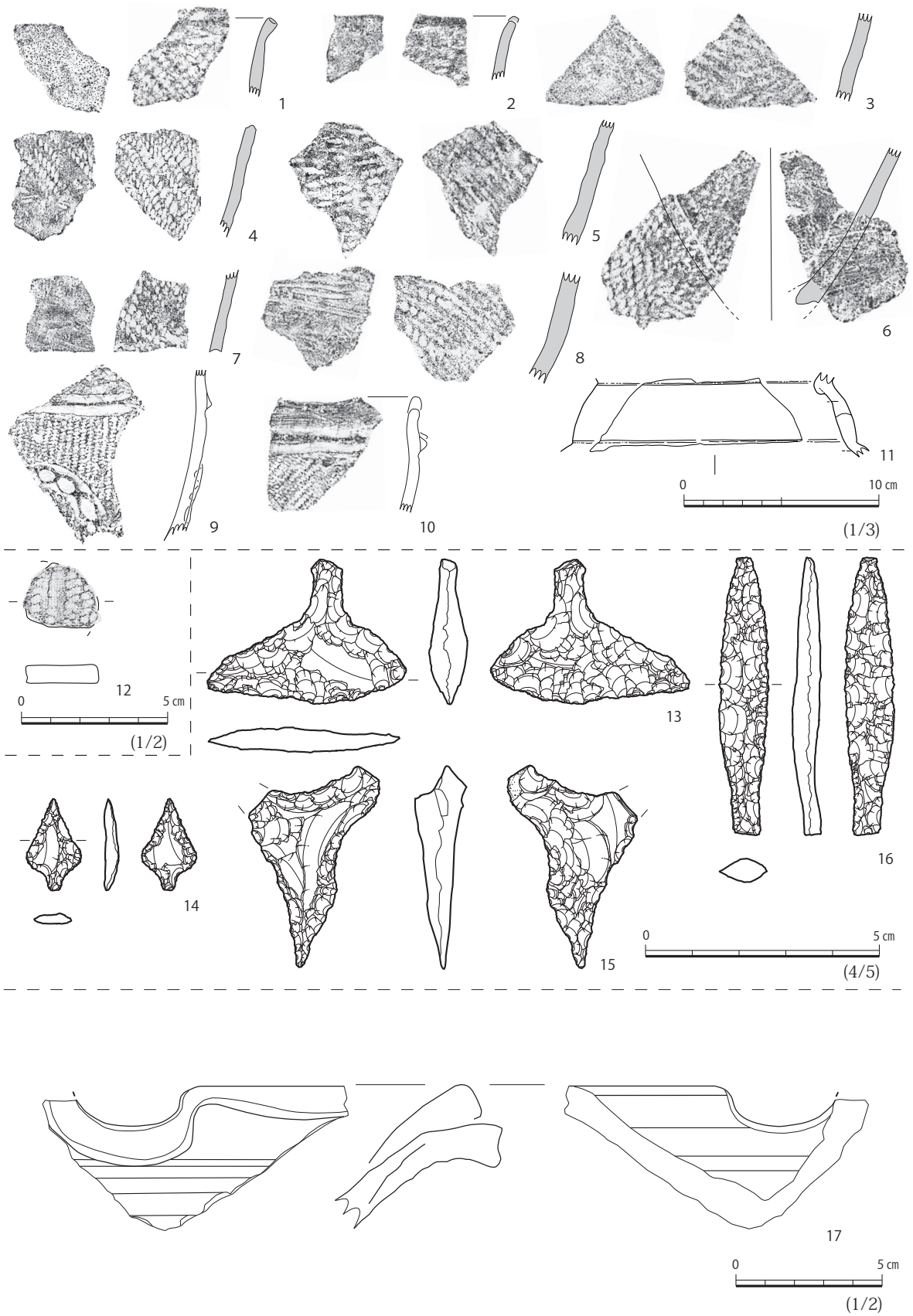


第 37 図　SU 1 出土石器・土製品

第 38 図　SU 1 出土石器



第 39 図　SP70・79 出土石器



第 40 図　表土出土縄文土器・石器・土製品・片口鉢

第８表　土製品観察表

単位 cm g

挿図 No	種別	出土地区・遺構	長径	短径	厚さ	重量	備考
22－ 1	円盤状土製品	1 号住居跡	3.29	2.13	0.57	3.8	
22－ 2	円盤状土製品	1 号住居跡	2..59	2.23	0.71	3.8	
22－ 3	円盤状土製品	1 号住居跡	3.86	3.43	0.74	12.7	
22－ 4	円盤状土製品	1 号住居跡	4.10	3.29	0.68	10.6	
22－ 5	円盤状土製品	1 号住居跡	3.98	3.29	0.80	11.4	
22－ 6	円盤状土製品	1 号住居跡	4.29	2.54	0.50	5.0	
22－ 7	円盤状土製品	1 号住居跡	4.69	3.68	1.08	20.5	床検出
22－ 8	円盤状土製品	1 号住居跡	4.05	3.81	1.01	16.5	
22－ 9	円盤状土製品	1 号住居跡	5.25	4.32	0.92	20.8	
22－ 10	円盤状土製品	1 号住居跡	5.35	4.62	1.77	26.8	
22－ 11	土　　偶	1 号住居跡	5.7 （長さ ）	3.4(幅)	4.44	50.2	住居東半部
23－ 5	円盤状土製品	1 号 土 坑	3.13	2.42	0.89	6.6	
29－ 5	円盤状土製品	14 号土坑	3.46	3.26	0.74	7.8	
29－ 6	円盤状土製品	14 号土坑	4.47	3.57	0.97	14.2	
29－ 7	円盤状土製品	14 号土 坑	3.89	3.63	0.74	12.0	
29－ 16	土　　偶	20 号土 坑	3.6 （長さ ）	12.1(幅)	1.93	72.4	
30－ 10	円盤状土製品	21 号土 坑	4.02	3.84	0.84	14.3	
30－ 11	円盤状土製品	21 号土 坑	4.14	3.84	0.91	14.9	
31－ 4	円盤状土製品	24 号土 坑	4.03	2.87	0.83	10.5	
31－ 5	円盤状土製品	24 号土 坑	4.01	2.91	0.88	10.0	
32－ 14	有孔円盤状土製品	1　号　溝	3.50	3.39	0.81	10.1	西端部
32－ 15	円盤状土製品	1　号　溝	2.11	2.02	0.74	3.1	
32－ 16	円盤状土製品	1　号　溝	3.11	3.05	0.80	2.9	
32－ 17	円盤状土製品	1　号　溝	3.54	2.98	0.91	2.85	
32－ 18	円盤状土製品	1　号　溝	3.22	2.60	0.88	7.4	
32－ 19	円盤状土製品	1　号　溝	3.65	2.96	0.74	6.9	
32－ 20	円盤状土製品	1　号　溝	3.86	3.39	0.78	10.9	
32－ 21	円盤状土製品	1　号　溝	3.34	2.94	0.69	7.4	
32－ 22	円盤状土製品	1　号　溝	3.68	2.93	0.84	8.6	
32－ 23	円盤状土製品	1　号　溝	3.60	3.43	0.74	9.9	
32－ 24	円盤状土製品	1　号　溝	5.17	2.71	0.76	10.3	
33－ 1	円盤状土製品	1　号　溝	3.62	3.22	0.87	11.1	
33－ 2	円盤状土製品	1　号　溝	4.83	4.31	0.59	15.1	
33－ 3	円盤状土製品	1　号　溝	4.59	4.30	0.84	18.7	
33－ 4	円盤状土製品	1　号　溝	5.18	3.67	1.05	19.2	
33－ 5	円盤状土製品	1　号　溝	5.65	4.30	0.80	22.0	
33－ 6	腕輪形土製品	1　号　溝	7.10(長軸)	5.20(短軸)	1.94	14.4	
37－ 1	円盤状土製品	遺物包含 層	2.34	2.11	0.76	3.4	
37－ 2	円盤状土製品	遺物包含 層	3.72	3.33	1.04	11.3	6 層
37－ 3	円盤状土製品	遺物包含 層	3.69	3.56	0.72	8.9	6 層
37－ 4	円盤状土製品	遺 物 包 含 層	4.23	3.03	0.87	12.1	4・5 層
37－ 5	円盤状土製品	遺 物 包 含 層	4.60	4.31	0.94	17.1	4・5 層
40－ 12	円盤状土製品	表　　土	2.54	2.13	0.70	3.8	

第９表　石器観察表

単位　cm g

挿図 No	種別	出土地区・遺構	長さ	幅	厚さ	重量	石質	備考
22−14	石　　鏃	１号住居跡	2.86	1.93	0.63	3.6	頁岩	
22−15	スクレイパー	１号住居跡	1.83	1.89	0.62	1.7	珪質頁岩	
22−16	石　　錐	１号住居跡	4.07	1.36	0.47	1.2	頁岩	床検出
22−17	礫　　器	１号住居跡	13.9	3.58	2.38	155.0	凝灰岩	床検出
22−18	石　　皿	１号住居跡	20.6	15.6	6.82	3900	花崗岩	
22−19	礫　　器	１号住居跡	8.91	13.6	2.63	3960	黒色頁岩	
24− 4	有孔軽石製品	９ 号 土 坑	11.79	5.21	3.92	34.0	浮岩	埋土中位
24− 5	礫　　器	９ 号 土 坑	12.57	10.8	3.63	468	粗粒砂岩	埋土中位
24− 6	磨　　石	９ 号 土 坑	10.93	10.59	7.25	1162.0	花崗岩	埋土中位
24− 7	石　　皿	９ 号 土 坑	10.53	10.06	3.97	209.0	凝灰岩	埋土中位
25−11	石　　皿	１２号土坑	27.9	34.8	6.3	8000	花崗岩	
26− 1	石　　皿	１２号土坑	29.3	16.9	7.57	5300	花崗岩	埋土中位
26− 2	石　　皿	１２号土坑	27.9	20.6	6.65	4600	花崗岩	埋土中位
27− 1	石　　皿	１２号土坑	49.0	28.8	11.3	19100	花崗岩	西壁際埋土下位
27− 2	砥　　石	１２号土坑	16.2	17.4	9.03	3400	粗粒砂岩	土坑底
28	大 形 磨 石	１２号土坑	32.1	14.1	10.5	9600	花崗岩	埋土上位
29− 8	磨　　石	１４号土坑	9.08	8.2	5.8	647	花崗岩	
30−12	磨　　石	２１号土坑	12.5	6.63	4.18	567	花崗岩	
30−13	磨　　石	２１号土坑	9.06	7.62	4.96	5.07	花崗岩	
33− 7	石　　鏃	１　号　溝	1.58	1.71	0.36	3.0	珪質頁岩	中央上層
33− 8	石鏃未成品	１　号　溝	2.17	1.50	0.71	1.8	珪質頁岩	
33− 9	石　　鏃	１　号　溝	2.39	1.40	0.45	0.8	珪質頁岩	中央中層
33−10	石　　匙	１　号　溝	9.42	1.91	0.76	12.8	頁岩	東側
33−11	石　　錐	１　号　溝	4.49	2.04	0.7	2.3	瑪瑙	中央中層
33−12	局部磨製石斧	１　号　溝	11.09	6.34	2.73	2650	砂質凝灰岩	中央黒色土
33−13	磨 製 石 斧	１　号　溝	10.41	4.08	2.40	135.0	凝灰岩	サブトレンチ
33−14	局部磨製石斧	１　号　溝	8.51	5.71	2.49	182.0	凝灰岩	西側拡張中層
33−15	磨 製 石 斧	１　号　溝	7.78	4.08	2.10	105	閃緑岩	中央中層
34− 3	打 製 石 斧	１　号　溝	9.15	5.37	1.96	129	凝灰質砂岩	西側上層
34− 4	打 製 石 斧	１　号　溝	7.74	5.64	3.31	195.0	安山岩	西側上層
34− 5	礫　　器	１　号　溝	8.37	7.91	2.49	172.0	凝灰質砂岩	西側上層
34− 6	凹　　石	１　号　溝	9.98	8.10	4.79	365.0	粗粒砂岩	中央中層
34− 7	敲　　石	１　号　溝	10.26	5.66	3.54	323	閃緑岩	中央上層
37− 6	石　　鏃	遺物包含層	1.90	1.0	0.35	0.3	頁岩	黒色土上層
37− 7	石　　鏃	遺物包含層	2.94	1.25	0.45	1.1	頁岩	４・５層
37− 8	石　　鏃	遺物包含層	1.40	1.89	0.32	0.8	頁岩	５層上部
37− 9	石　　匙	遺物包含層	5.63	1.96	0.62	6.3	頁岩	５層
37−10	スクレイパー	遺物包含層	2.86	4.89	1.25	19.0	頁岩	ベルト清掃
37−11	石　　匙	遺物包含層	3.85	4.34	7.6	10.7	頁岩	５層上部
37−12	スクレイパー	遺物包含層	6.19	5.35	1.22	25.3	頁岩	４・５層
37−13	小形打製石斧	遺物包含層	6.76	3.63	1.49	39.4	凝灰質砂岩	検出面１段下げ
37−14	打 製 石 斧	遺物包含層	9.73	6.63	1.48	104.0	凝灰質砂岩	検出面１段下げ
38− 1	局部磨製石斧	遺物包含層	10.7	4.86	2.20	130.0	中粒砂岩	西半黒色土
38− 2	スクレイパー	遺物包含層	4.93	12.41	1.04	84.8	粗粒砂岩	検出面１段下げ
38− 3	磨製石斧未成品	遺物包含層	10.53	6.66	3.55	449.0	閃緑岩	３層
38− 4	礫　　器	遺物包含層	7.95	7.47	2.28	128.0	凝灰質砂岩	
38− 5	礫　　器	遺物包含層	9.37	6.78	2.83	201.0	中粒砂岩	
38− 6	敲　　石	遺物包含層	13.36	8.78	5.36	1017.0	花崗岩	磨石兼用
38− 7	敲　　石	遺物包含層	8.21	8.41	6.33	632.0	花崗岩	４・５層
38− 8	磨　　石	遺物包含層	9.30	5.51	2.96	261.0	玄武岩	５層
39− 1	凹　　石	SP70	16.20	10.36	4.10	756.0	粗粒砂岩	
39− 2	凹　　石	SP70	14.20	8.47	6.12	695.0	粗粒砂岩	

39－3	磨　　石	SP70	9.48	8.45	5.26	625.0	花崗岩	
39－4	石　　槍	SP79	3.93	2.27	0.95	7.6	頁岩	
39－5	礫　　器	SP79	8.90	12.64	2.88	416.0	粗粒砂岩	
40－13	石　　匙	表　　土	3.05	4.02	0.76	5.7	頁岩	
40－14	石　　鏃	表　　採	1.95	1.17	0.27	0.3	チャート	
40－15	石　　錐	不　　明	4.34	2.80	1.07	6.6	頁岩	
40－16	石　　槍	表　　土	5.92	1.05	0.58	3.1	頁岩	

第10表　縄文土器観察表

単位　ｃｍ　(　　)内推定値

挿図 No	分類	出土地区・遺構	口　径	胴部径	底　径	器　高	文様・特徴
18－1	6類 a	1号住居跡	37.0			18.4	綾杉状 沈線 ・コ字文・LR 横回転
18－2	6類 b	1号住居跡	(36.0)			15.6	円文 ・ LR 横回転
18－3	6類 b	1号住居跡	(26.2)			11.8	楕円形区画文・LR 横回転
18－4	6類 d	1号住居跡	24.3			9.7	表・裏面に磨き痕
19－3	6類 g	1号住居跡		14.5	4.8	12.7	入組文 ・ RL 横、縦、斜回転
19－4	6類 e	1号住居跡	26.9		10.5	41.7	口縁刻目帯・入組文・RL 横、斜回転
19－5	6類 f	1号住居跡	8.9	11.8	5.4	14.9	口唇部沈線・楕円形貼付３単位
20－1	6類 a	1号住居跡	39.4			26.8	LR 横回転
20－2	6類 a	1号住居跡	31.6			22.9	LR 横、斜回転
23－14	3類 a	9 号土　坑			11.2	22.8	RL 横回転
24－1	3類 g	9 号土　坑		14.2	11.3	14.2	２個一対　把手・RL 縦回転
24－2	3類 g	9 号土　坑	4.4	7.2	6.3	5.2	肩部に　３個の横位貫通孔・L 縦回転
25－10	4類	11 号土 坑			2.3	4.1	ミニチュア土器・底部付近赤彩残存部あり
30－17	5類 a	24 号土 坑	(31.6)	(31.9)		27.8	口縁 ８単位の対向弧線文・縦位沈線・LR 横、縦回転
32－13	6類 f	1　号　溝		11.2		5.3	凸面体・内外面磨き
40－11	6類 f	西区旧耕作土	(14.4)			4.6	凸面体・内外面磨き

V　動物遺存体

1　分析資料

中沢遺跡では、フラスコ状土坑のSK９底部壁際より貝層が検出されている。貝層にかく乱はみられず、縄文時代中期後葉の土器である大木９式が共伴していた。これらは全て回収されたのち、5mm、2mm、1mmメッシュのフルイを使用した水洗選別が行われている。そのうち5mm、2mmメッシュで回収された資料については、奈良文化財研究所へ移送される以前の段階で、小礫、炭化物、貝類、骨などに分類する作業が完了している。

本稿で分析するのは、5mm、2mmメッシュより回収された動物遺存体と、1mmメッシュより回収された未分類の資料になる。なお分析期間の都合上、1mm メッシュから回収されたものは資料を選定している。移送された 1mm メッシュ回収の資料には、破砕した貝類が主体となるもの（2袋、2,283.74g）と、小礫が主体となるもの（5 袋、6,211.09g）の 2 種類がみられた。そのため、それぞれ 1 袋を選定し分析対象とした。なお、1mm メッシュで分析した資料（1,978.68g）は、重量（質量）比で全体量（8,494.83g）の 23.29%（貝類主体が 48.17%、小礫主体が 14.14%）となる。

2　分析方法

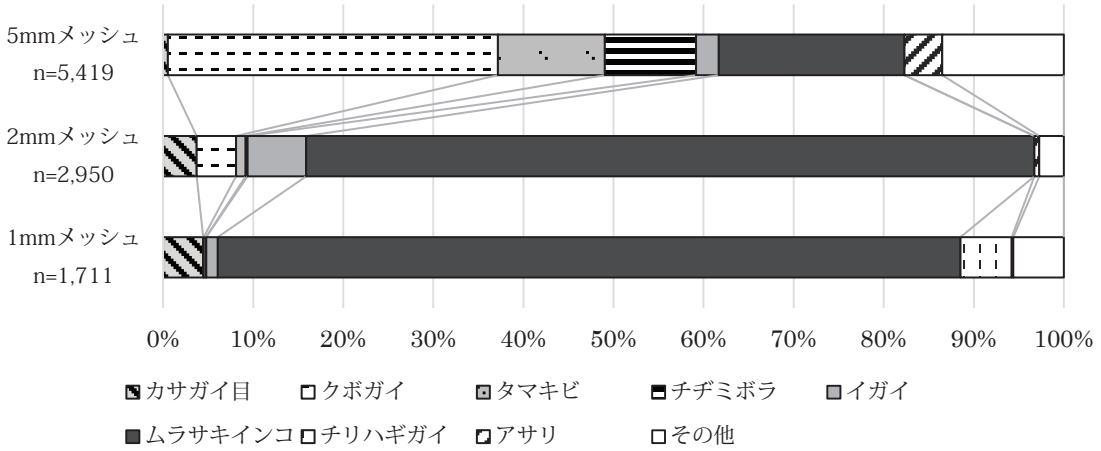
貝類、魚類、哺乳類など分類群ごとに選別を行ったあと、それぞれの同定基準を満たす資料について同定と集計を行った。多板綱は殻板が 1/2 以上残存するもの、腹足綱は原則として殻頂部（種によっては殻口部）を含み 1/2 以上が残存するもの、二枚貝綱は原則として殻頂部が残存するものを同定した。顎脚綱、軟甲綱、ウニ綱は破片全てを同定、計上した。軟骨魚綱、硬骨魚綱、両生綱、鳥綱、哺乳綱は原則として関節部が残存するものを同定した。動物の同定基準については、熊谷（2001）および小井川・岡村編（1986・1987）を参考としている。同定に際しては、奈良文化財研究所環境考古学研究室所蔵の標本を用いた。また一部の貝類は、岩手県陸前高田市立博物館熊谷賢氏からご指導いただいた。なお、動物遺存体の写真撮影は、奈良文化財研究所の中村一郎、飯田ゆりあが行った。

3　同定結果

分析の結果、多板綱 1 分類群 74 点、腹足綱 26 分類群 4,151 点、二枚貝綱 17 分類群 11,622 点、顎脚綱 3 分類群 16,362 点、軟甲綱 1 分類群 33 点、ウニ綱 1 分類群 1,051 点、軟骨魚綱 1 分類群 6 点、硬骨魚綱 15 分類群 471 点、両生綱 1 分類群 1 点、鳥綱 1 分類群 1 点、哺乳綱 1 分類群 7 点の、68 分類群 33,770 点が同定された。1mm メッシュよりえられたフジツボ亜目の微小な殻板破片を除けば、同定可能破片数（NISP）の約 80%が貝類であり、貝層は貝類の採集活動が強く反映されていると考えられる。

同定された貝類のうち、最も多いのはムラサキインコである。クボガイがそれに次ぎ、タマキビ、

第41図　メッシュ別貝類組成（MNI）



チヂミボラ、イガイ、アサリも 450 点以上同定できた。陸産貝はほとんどみられなかったが、これは遺構の性格や堆積環境、土壌などが影響しているものと考えられる。

貝類の同定結果をメッシュ別に集計し、最小個体数（MNI）を用いて組成表を作成した（第 41 図）。組成によれば、5mm メッシュではクボガイが最も多く、ムラサキインコ、タマキビ、チヂミボラが続いた。2mm、1mm ではムラサキインコが卓越しており、カサガイ目やチリハギガイも 5%程度みられた。

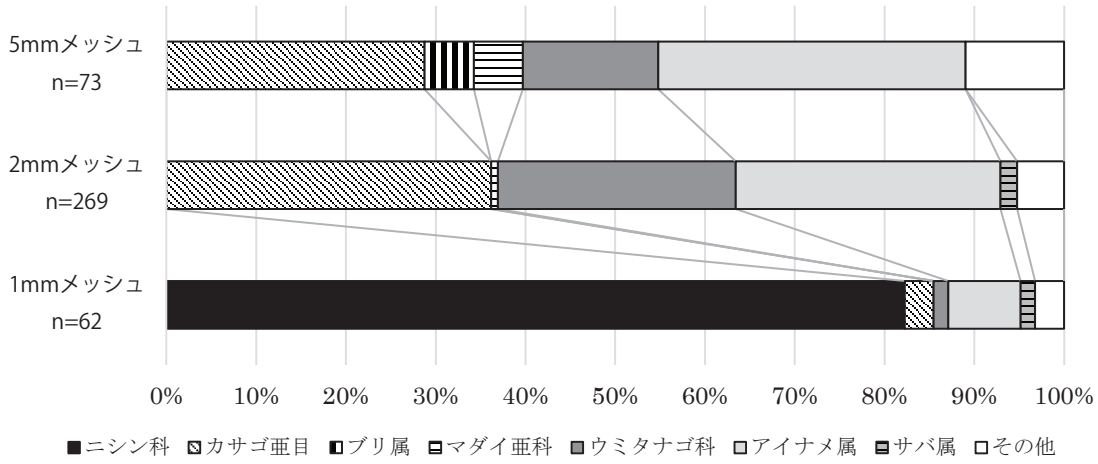
主要貝類であるムラサキインコ、クボガイ、タマキビ、チヂミボラはいずれも岩礁域に生息していることから（戸羽 2009）、現在でも遺跡近辺で発達する広田湾岩礁域での採貝活動が中心であった考えられる。一方アサリ、ヒメシラトリガイ、シオサザナミ科（イソシジミ *Nuttallia japonica*、エゾイソシジミ *Nuttallia ezonis* などを含む）を対象とする砂浜部での採貝活動も行われてはいたものの、全体からすると低調であるといえる。

なおチリハギガイや小型のカサガイ目については、熊谷賢氏が指摘するように（熊谷 2001）、ムラサキインコの足糸に付着した個体が持ち込まれたものと推測される。ただしムラサキインコの個体数に比して少量であることから、足糸の処理などによる影響が考えられる。

魚類は、5mm、2mm メッシュ共にアイナメ属、カサゴ亜目、ウミタナゴ科が多数同定されており、NISP を用いて作成した組成表でも大半を占めている（第 42 図）。アイナメ属、カサゴ亜目は岩礁域を、ウミタナゴ科は藻場を好み、いずれも周年生息する魚類であることが知られる（陸前高田市史編集委員会編 1994）。遺跡近辺の岩礁域において、安定的に獲得可能な海産資源として、盛んに利用されたと考えられる。なお現在でもこれらを狙った釣り漁が盛んであることから（酒井 1986）、貝層に共伴した釣針との関連性が推察される。

5mm メッシュからは、標本との比較で体長約 60cm 程度と推定されるブリ属の歯骨が 3 点同定されており、中沢遺跡における大型魚を対象とした漁撈を示す資料であるといえる。また 2mm メッシュからは、1 点ではあるもののタラ科の前上顎骨も同定されている。タラ科は現在、岩手県近

第42図　メッシュ別魚類組成（NISP）



注：組成には、タイ科の歯および魚類の鱗を含めていない。

海では 3 種（マダラ、スケトウダラ、コマイ）が知られ、いずれも成魚は冷水を好み水深 100m 以深に生息する。そのうちマダラとコマイは産卵のため冬季に沿岸浅瀬へ移ることから（上田ほか 2003）、冬季特有の漁撈活動を示しえる資料であると考えられる。

1mm メッシュではニシン科の椎骨が多数えられた。ニシン科椎骨の中には第一椎骨もみられたため標本との比較を行ったところ、サッパであると同定された。ニシン科の多くは回遊を行うが、サッパのように大規模回遊は行わず、内湾を中心として生息するものもいる（マリンピア松島水族館編 1993）。貝層からえられたニシン科が全てサッパであるとは判断しがたいが、いずれにせよ沿岸近くを回遊するニシン科もまた、積極的に利用されていたと推察される。

哺乳類はニホンジカの角破片のみが同定されたが、同定できなかったものの骨幹部破片も検出していることから、角のみが廃棄されているわけではない。狩猟に伴うものである可能性は高いが、量的にみて極めて低調な利用であるといえる。鳥類も同様にその利用は低調であると考えられる。十脚目、フジツボ亜目、ウニ綱は岩礁域を中心とした獲得が考えられる。その他両生類として無尾目の椎骨が 1 点えられているが、人為的な廃棄物か否か判断が難しい。

以上の同定結果と組成の検討から、中期後葉（大木 9 式期）における中沢遺跡の動物利用は、近隣の岩礁域で周年の獲得が可能な動物が中心であったと考えられる。中でもムラサキインコなどの岩礁性貝類は盛んに採集されていた。魚類もアイナメ属、カサゴ亜目、ウミタナゴ科といった岩礁を好むものを主に獲っていたが、ニシン科のような沿岸性回遊魚や、体長 60cm 程度のブリ属、冬季に浅瀬に移動するタラ科など、貝類と比較して利用対象には多様性があった。哺乳類、鳥類などを対象とした狩猟の痕跡は乏しく、活動は低調であったと考えられる。

4　中沢浜貝塚との比較

最後に、中沢遺跡の分析結果を踏まえて、隣接する中沢浜貝塚との比較を行い、どのような差異が現れるかを検討した。具体的な比較対象としたのは、2001 年に報告された縄文時代中期末葉で

ある、大木 10 式期主体の動物遺存体である（佐藤ほか 1999、熊谷 2001）。

まず全体の傾向を比較すると、中沢遺跡ではほとんどみられなかった哺乳類が、中沢浜貝塚では四肢骨を中心に多数みられる点が指摘できる。また中沢浜貝塚では、魚類も数多くの分類群と部位骨が同定されている。そのため両遺跡では、貝層に含まれる骨片数に大きな違いがあると考えられる。

次に個別の内容について比較を行う。貝類は、出土した貝種の大半が両遺跡で共通している。貝類組成も類似しており、中沢浜貝塚でもムラサキインコを中心とした岩礁性貝類が主体を占めている。しかし中沢浜貝塚から微小な陸産貝が多数出土しており、中沢遺跡と様相が異なる。

魚類では、両遺跡ともにアイナメ属、カサゴ亜目、ウミタナゴ科が多数みられるなど、岩礁域や藻場で獲得可能な魚類が主体を占める点は共通している。ただし中沢浜貝塚では、中沢遺跡ではわずかであったサバ属が多数みられるほか、ブリ属の出土点数も多い。一方で、1mm メッシュからえられたニシン科の NISP は、中沢浜貝塚が 30 点なのに対して中沢遺跡が 51 点であり、全量が分析されていないにもかかわらず中沢遺跡の方が多い。

そのほかにも、中沢浜貝塚では十脚目の出土が 2 点と少ない点などに差異が見出せる。

以上の結果から、中沢遺跡と中沢浜貝塚では、利用している動物の種類と傾向が類似している一方で、いくつかの異なる点が指摘できる。こうした差異は、三陸沿岸域における中期後葉から末葉へという変遷を考える上で、動物利用の観点から指摘すべき点であると思われる。ただし中沢遺跡と中沢浜貝塚では、遺構の性格、堆積環境、サンプルサイズなどに大きな違いがあるため、比較の結果については慎重な検討が要されるとともに、当該期における複数事例の比較から研究が進められることが望まれる。

第11表　中沢遺跡　動物遺存体一覧

軟体動物門　Mollusca	
多板綱　Polyplacophora	
新ヒザラガイ目　Neoloricata	
腹足綱　Gastropoda	
カサガイ目　Patellogastropoda spp.	
ユキノカサガイ　*Niveotectura pallida*	
ミミガイ科　Haliotidae sp.	
サルアワビ　*Tugalina* (*Scelidotoma*) *gigas*	
ニシキウズ科　Trochidae spp.	
クボガイ　*Chlorostoma lischkei*	
コシダカガンガラ　*Omphalius rusticus*	
イシダタミ　*Monodonta labio form confuse*	
クロヅケガイ　*Monodonta neritoides*	
エビスガイ　*Calliostoma unicum*	
サザエ科　Turbinidae sp.	
スガイ　*Turbo* (*Lunella*) *coronatus coreensis*	
タマキビ科　Littorinidae sp.	
タマキビ　*Littorina* (*Littorina*) *breicula*	
クロタマキビ　*Littorina* (*Neritrema*) *sitkana*	
オオヘビガイ　*Serpulorbis imbricatus*	
ヤツシロガイ　*Tonna luteostoma*	
アッキガイ科　Muricoidae sp.	
ヒレガイ　*Ceratostoma burnetti*	
オウウヨウラク　*Ceratostoma inornatus*	
エゾヨウラク　*Ceratostoma inornatus endermonis*	
チヂミボラ　*Nucella lima*	
レイシガイ　*Thais (Reishia) bronni*	
イボニシ　*Thais (Reishia) clavigera*	
フトコロガイ科　Columbellidae sp.	
ムシロガイ科　Nassariidae sp.	
二枚貝綱　Bivalvia	
コベルトフネガイ　*Arca boucardi*	
カリガネエガイ　*Berbatia* (*Savignyarca*) *virescens*	
イガイ科　Mytilidae spp.	
イガイ　*Mytilus coruscus*	
ムラサキインコ　*Septifer virgatus*	
アズマニシキ *Chlamys* (*Azumapecten*) *farreri japponensis*	
マガキ　*Crassostrea gigas*	
チリハギガイ　*Lasaea undulate*	
ミルクイ　*Tresus keenae*	
ニッコウガイ科　Tellinidae sp.	
ヒメシラトリ　*Macoma incongrua*	
シラトリモドキ *Heteromacoma irus*	
シオサザナミ科　Psammobiidae sp.	
マルスダレガイ科　Veneridae sp.	
オニアサリ　*Protothaca jedoensis*	
ヌノメアサリ　*protothaca euglypta*	
アサリ　*Ruditapes philippinarum*	
オオノガイ　*Mya arenaria onogai*	
節足動物門　Arthropoda	
顎脚綱　Maxillopoda	
フジツボ亜目　Balanomorpha spp.	
チシマフジツボ　*Semibalanus cariosus*	
アカフジツボ　*Megabalanus rosa*	
軟甲綱　Malacostraca	
十脚目　Decapoda sp.	
棘皮動物門　Echinodermata	
ウニ綱　Echinoidea sp.	
脊椎動物門　Vertebrata	
軟骨魚綱　Chondrichthyes	
エイ上目　Batidoidimorpha sp.	
硬骨魚綱　Osteichthyes	
ニシン科　Clupeidae sp.	
サッパ　*Sardinella zunasi*	
カタクチイワシ　*Engraulis japonicus*	
タラ科　Gadidae sp.	
サヨリ属　*Hyporhamphus* sp.	
カサゴ亜目　Scorpaenoidei spp.	
スズキ属　*Lateolabrax* sp.	
ブリ属　*Seriola* sp.	
タイ科　Sparidae spp.	
マダイ亜科　Pagrinae sp.	
ウミタナゴ科　Embiotocidae sp.	
アイナメ属　*Hexagrammos* sp.	
サバ属　*Scomber* sp.	
マグロ属　*Thunnus* sp.	
ヒラメ科　Paralichthyidae sp.	
両生綱　Amphibia	
無尾目　Anura sp.	
鳥綱 Aves	
哺乳綱　Mammalia	
ニホンジカ　*Cervus Nippon*	

（注1）リストの作成に際しては、西村三郎編1995『原色検索日本海岸動物図鑑[Ⅰ][Ⅱ]』保育社、奥谷喬司2000『日本近海産貝類図鑑 Marine Mollusks in Japan』東海大学出版会、戸羽親雄2009『岩手の海産貝類』、中坊徹次2013『日本産魚類検索　全種の同定　第三版Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ』東海大学出版会、中坊徹次・平嶋義宏2015『日本産魚類全種の学名　語源と解説』東海大学出版部、千石正一・疋田努・松井正文・仲谷一宏編1996『日本動物大百科　第5巻　両生類・爬虫類　軟骨魚類』平凡社、阿部永2008『日本の哺乳類[改訂2版]』東海大学出版会、日本鳥学会2012『日本鳥類目録　改訂第7版』を参照している。

第12表　メッシュ別サンプル重量（質量）

5mmメッシュ回収重量

種別	重量(g)
貝類	9861.46
魚類	30.61
鳥類	0.35
哺乳類	4.56
フジツボ亜目	88.64
ウニ綱	0.09
十脚目	2.54
小礫	19.15
炭化物	3.12
土器片	76.59
その他	3.32
合計	10090.43
動物遺存体合計	9988.25

2mmメッシュ回収重量

種別	重量(g)
貝類	3202.29
魚類	43.03
鳥類	0.12
哺乳類	0.27
フジツボ亜目	83.85
十脚目	1.70
ウニ綱	1.91
無尾目	0.01
小礫	195.17
チップ	0.36
炭化物	7.78
土器片	4.34
その他	1.43
合計	3542.26
動物遺存体合計	3333.18

1mmメッシュ回収重量
（貝類主体のもの、1袋）

種別	重量(g)
貝類	963.43
魚類	6.14
フジツボ亜目	7.52
十脚目	0.04
ウニ綱	1.13
小礫	119.12
炭化物	2.10
土器片	0.17
その他	0.59
合計	1100.24
動物遺存体合計	978.26

1mmメッシュ回収重量
（小礫主体のもの、1袋）

種別	重量(g)
貝類	233.06
魚類	6.55
フジツボ亜目	26.78
十脚目	0.01
ウニ綱	1.81
小礫	609.57
その他	0.66
合計	878.44
動物遺存体合計	268.21

未分析1mmメッシュ回収重量

種別	重量(g)
貝類主体の貝層袋(1袋)	1183.50
小礫主体の貝層袋(4袋)	5332.65

第13表　メッシュ別同定結果（魚類以外）

	分類群	5mm	2mm	1mm(貝類主体)※1	1mm(小礫主体)※1	合計
多板綱	新ヒザラガイ目	13	46	6	9	74
	合計					74
腹足綱	カサガイ目	29	109	35	41	214
	ユキノカサガイ	16	6	0	0	22
	サルアワビ	2	0	0	0	2
	ミミガイ科	9	4	0	0	13
	ニシキウズ科	85	5	18	17	120
	クボガイ	1984	129	1	0	2114
	コシダカガンガラ	101	5	0	0	106
	イシダタミ	61	0	0	0	61
	クロヅケガイ	2	0	0	0	2
	エビスガイ	2	0	0	0	2
	サザエ科	0	6	0	0	6
	スガイ	9	0	0	0	9
	スガイのフタ	5	5	3	0	13
	タマキビ科	7	0	6	0	13
	タマキビ	650	31	0	4	685
	クロタマキビ	15	10	0	0	25
	オオヘビガイ	1	0	0	0	1
	ヤツシロガイ	破片あり	0	0	0	破片あり
	アッキガイ科	2	0	0	0	2
	ヒレガイ	26	0	0	0	26
	オウウヨウラク	35	0	0	0	35
	エゾヨウラク	2	0	0	0	2
	チヂミボラ	549	6	1	0	556
	レイシガイ	21	0	0	0	21
	イボニシ	57	0	0	0	57
	フトコロガイ科	0	4	0	0	4
	ムシロガイ科	0	1	0	0	1
	不明腹足綱	0	5	17	29	36
	合計					4148
陸産貝	不明	0	1	0	2	3
	合計					3
二枚貝綱	コベルトフネガイ	1/0	1?/0	0	0	1(2)/0
	カリガネエガイ	19/16	0	0	0	19/16
	イガイ科	0/1	1/0	0	0	1/1
	イガイ	108/136	192/191	8/7	14/11	322/345
	ムラサキインコ	1108/1119	2376/2366	777/732	597/633	4868/4850
	アズマニシキ	9/7	0/1	0	0	9/8
	マガキ	3/1	4/3	0	0/1	7/5
	チリハギガイ	0	0	19/25	62/72	81/97
	ミルクイ	1/1	0	0	0	1/1
	ニッコウガイ科	1/9	2/9	0	0	3/18
	ヒメシラトリ	72/56	0	0	0	72/56
	シラトリモドキ	35/36	0	0	0	35/36
	シオサザナミ科	118/114	7/11	1/0	0	126/125
	マルスダレガイ科	0	2/2	0	0	2/2
	オニアサリ	0/2	0	0	0	0/2
	ヌノメアサリ	1/0	0	0	0	1/0
	アサリ	227/220	16/14	0/2	0/1	243/237
	オオノガイ	12/5	3/3	0	0	15/8
	不明二枚貝綱	0	2/1	2/0	1/3	5/5
	合計					5811/5811
顎脚綱※2	フジツボ亜目破片	341	2076	2554	11390	16361
	アカフジツボ周殻完形	1	0	0	0	1
	合計					16362
軟甲綱	十脚目鋏脚	2	28	2	1	33
	合計					33
ウニ綱	ウニ綱殻板	0	98	124	344	566
	ウニ綱顎骨片	0	1	0	0	1
	ウニ綱中間骨	0	2	5	3	10
	ウニ綱棘	0	2	352	120	474
	合計					1051
両生綱	無尾目椎骨	0	1	0	0	1
	合計					1
鳥綱	不明足根中足骨	1/0	0	0	0	1/0
	合計					1/0
哺乳綱	ニホンジカ角破片	4	3	0	0	7
	合計					7

注：左右のあるものについては"/"で表している。
※1：1mmメッシュで回収された遺物は、貝類が主体となった袋と小礫が主体となった袋とに分けられた。ここではそれぞれ一袋を分析し、分けて結果を提示している。
※2：チシマフジツボはフジツボ亜目に多数含まれるため種名表には記載したが、点数は数えていないため、本リストには計上していない。

第14表　魚類同定結果

	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		角骨		口蓋骨		方骨		舌顎骨		前鰓蓋骨		主鰓蓋骨		間鰓蓋骨		角舌骨		上舌骨		篩骨	前頭骨		上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨		後側頭骨		上擬鎖骨		擬鎖骨		第一椎骨	腹椎	尾椎	部位不明椎骨	尾部棒状骨	下尾軸骨	※その他	合計(NISP)
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		L	R					L	R	L	R	L	R	L	R								
5mmメッシュ回収																																																
カサゴ亜目		1					1	1			1		1		3	1	1	2					1								1	1		1		1		1	1			1			1		21
スズキ属	1																																															1
ブリ属					2	1																																								1		4
タイ科		1																										1														1				1	4
マダイ亜科				1		1		1																																								3
ウミタナゴ科		2																														1						2	2							4	11
アイナメ属		1	1		1		1			1	1	4	3						1		1		1		1		1			2	2										2	1					25
マグロ属																																											1					1
不明																																									3					33	36
合計																																																106
2mmメッシュ回収																																																
エイ上目																																															1	1
タラ科		1																																														1
サヨリ属																																									1							1
カサゴ亜目	1	6	1			2	1	1			2	2	1										2	1					3	2			3	3	2	1				3	14	42		1	4		97
スズキ属												1																																			1	2
タイ科																																															44	44
マダイ亜科		1															1																															2
ウミタナゴ科		1	2	2	2	1	1					1	1	1			1			2	1		2	1							1		5		1	1		1			8	27		1	2	5	71
アイナメ属	2			3	1	4	1	1			2	1	1				3	3	2	2			4	2							1	1									15	28		1	1	2	79
サバ属				1																																					4						5
ヒラメ科																																									2	1					3
不明																																										5			2	307	314
合計																																																620
1mmメッシュ回収（貝類主体のもの,1袋）																																																
ニシン科																													2												1	6					9
カサゴ亜目		1																																														1
タイ科																																															6	6
ウミタナゴ科																																														1		1
アイナメ属																	1														1										2			1			5
不明																																														60	60
合計																																																82
1mmメッシュ回収（小礫主体のもの,1袋）																																														5	5
エイ上目											1																													23	18		1			42
ニシン科																																							1								1
サッパ																																										1					1
カタクチイワシ																																															1
カサゴ亜目					1																																									20	20
タイ科																																										1					1
サバ属																																														37	37
不明																																																108
合計																																																

※その他の詳細	
5mmメッシュ回収	[タイ科]耳石L1,[ウミタナゴ科]下咽頭骨4,[不明魚類]鱗33
2mmメッシュ回収	[エイ上目]棘1,[スズキ属]耳石R1,[タイ科]歯44,[ウミタナゴ科]上咽頭骨L2R1,下咽頭骨2,[アイナメ属]下舌骨L1R1,[不明魚類]鱗307
1mmメッシュ貝類主体	[タイ科]歯6,[不明魚類]下鰓蓋骨R1,鱗59
1mmメッシュ小礫主体	[エイ上目]循鱗5,[タイ科]歯20,[不明魚類]下尾軸骨2,鱗35

注：1mmメッシュで回収された遺物は、貝類が主体となった袋と小礫が主体となった袋とに分けられた。ここではそれぞれ一袋を分析し、分けて結果を提示している。

Ⅵ　総　　括

縄文時代早期の遺物

中沢遺跡の1号溝及び遺物包含層から早期沈線文土器と繊維を混入した表裏縄文土器が出土した。沈線文土器は 24 号土坑埋土（第 31 図１）と１号溝埋土中層（第 31 図８）から各１点のみの出土であったが、遺跡の上限年代の資料である。田戸下層式に近似した沈線文土器（領塚正浩 2008）と思われ、住田町蛇王洞洞穴第Ⅵ層出土土器(芹沢長介・林謙作 1967)とともに、気仙地方に人が居住を開始した時期を示している。

繊維を混入した表裏縄文施文の土器は主に遺物包含層４・５層から出土したが、中世に掘削されたと考えられる１号溝埋土中からも 200 点近い出土点数があり（第 15 表)、近現代の掘削によって失われた遺構の存在を思わせる。

外傾する口縁部に砲弾型の尖底部が付く器形は、大船渡市関谷洞窟出土土器と同一である（後藤勝彦他 1968、及川　洵 1978)。口辺から頸部に粘土帯の貼付がある例がみられる。多くの個体で緩やかな波状口縁が認められる。また、１例ではあるが片口状口縁の個体がある(第 35 図３)。

口唇部には外側竹管による斜位の刻み目（第 31 図９・15、第 35 図 10・15)、竹管刺突（第 31 図 10)、細かな刻み目（第 31 図 13、第 35 図５）を持つ例と RL の押圧縄文（第 35 図２・11・14、第 36 図１)、RL 縄文の回転施文（第 35 図３・13、第 36 図３)、LR の押圧縄文（第 35 図 12)、LR 縄文の回転施文(第 35 図１)がある。稀な例だが単軸絡条体第 1 類の押圧がある（第 35 図８)。他個体には口唇への施文はない。

土器表面には RL 縄文の横位・縦位回転があり、裏面には RL 縄文の横位・縦位回転と指頭圧痕（及川　洵 1972）がある個体が多い。少数だが、表面裏面 LR（第 31 図 15、第 35 図 12)、表面 LR・裏面指頭圧痕（第 35 図１・16・17）の個体もある。また、各 1 例のみだが、表面単軸絡条体第１類 R、裏面指頭圧痕（第 35 図８）と表面Ｌの横位・縦位施文、裏面Ｌ・指頭圧痕（第 36 図４）そして表面前々段多条 RL、裏面前々段多条 RL と指頭圧痕の個体（第 32 図２）がある。なお、縄文条痕の個体は第 36 図６の１点のみであった。

口縁部の文様施文は少なく、わずかに２例のみであった。第 31 図 14 は表面に縦位の側面圧痕Ｌと結節回転Ｌがあり、裏面には結節回転Ｌが施文されている。第 35 図 16 は外側竹管の縦刺突が口縁上端に沿って並んでいる。また、他の個体は胎土中に石英・長石の白色粒子が多くふくまれる共通点があるが、本例は透明な石英粒子が多く、胎土の特徴は異なっている。一方、口辺から頸部の内外面には低い粘土帯の貼付がみられるが、この低隆帯上に原体の押圧がある個体がある。第 32 図１は RL の押圧、第 35 図 17 は LR の押圧、同図 19 はコの字状の LR の押圧、第 36 図１には RL の断続的な回転痕がある。いずれも器面への回転施文原体と同一の原体を使用している。

上記の土器個体は口縁部の文様施文が少なく、また、表面・裏面へ縄文施文が顕著な点で共通点が多い。蛇王洞洞穴第Ⅰ層（芹沢　林前掲）、関谷洞窟７・８層（後藤　及川前掲）出土土器群と同時期と考えられ、素山上層式（伊東信雄 1940・1952）に並行すると思われる（相原淳一 1990・林　謙作 1990）。市内の過去の調査では早期貝殻沈線文から表裏縄文施文土器の出土例は、小友町上の坊・竹駒町相川Ⅰ・広田町中沢浜貝塚貝層下の破片資料が知られている。

縄文時代中期の遺構と遺物

縄文前期から中期中葉の遺構・遺物の出土は皆無であったが、再び居住の痕跡が認められるのは中期後葉である。９号土坑からは大木９式前半（丹羽　茂 1989）の土器のみが出土している。廃棄された貝層が検出され、動物遺存体が３万点以上同定された（Ⅴ章参照）。釣針軸頂部の出土もあった。土器には小形壷が２点含まれていたが、特に第 24 図２は有孔短頸壷の小形土器である。

大木９式と考えられる土坑は他に 10 号土坑、12 号土坑がある。12 号土坑から土器の出土は無かったが、無縁石皿のみであったので中期後葉の時期と判断した。９号土坑とともに廃棄行為の特殊性が窺える。

縄文時代後期の遺構と遺物

大木 10 式及び後期初頭に位置づけられる上野平段階（鈴木克彦 2004）の遺構・遺物は出土していない。上野平段階に続く門前式段階の土器は表土出土の第 40 図９・10 がある。遺構に伴う本段階の土器はなかった。観音堂式段階（鈴木前掲）の個体は 14 号土坑（第 29 図）の土器があり、１は旗掛文の系列と考えられる。11 号土坑の第 25 図９（大木９式）を除いた破片も同段階である。他に第 30 図 16 の小片も該当すると思われる。24 号土坑出土の大形破片（第 30 図 17）は貝鳥式段階（鈴木前掲）と考えられる。胴部の縦位楕円形沈線が多条化していないので宮戸1b式段階には至らないと思われる。口縁部の対向する弧線と縦位沈線は、立石遺跡（中村良幸 1979）のⅢ層に類似の個体がある。以後、萪内Ａ・Ｂ式（鈴木克彦 2001）段階の土器はないが、宝ヶ峯式段階（伊東信雄 1952、齋藤報恩会 1991、鈴木克彦 2003）には１号住居跡の一括資料がある。第 19 図４華燭土器（鈴木克彦 2004）の円環状突起は本段階の特徴を示している。同図５の注口土器は大湯型(鈴木克彦 2007)であり、第 21 図３・4 とともに十腰内系土器の搬入を示している。他に本段階の土器は１・５・20・21・22 号土坑から出土の破片資料がある。

土器以外の遺物には１号溝出土の腕輪形土製品が注意されよう。吉田分類のⅠａ類に相当する（吉田泰幸 2008）。市内では川内遺跡（国生尚 1984）からⅡ類と判断できる例が出土している。中核的な集落からの出土が多く、隣接する中沢浜貝塚との関連性があるように思われる。

中世の遺構と遺物

１号掘立柱建物跡に伴う遺物はなかったが、表土出土の片口鉢を 14 世紀の製品と判断した（飯村均 1995）。建物の構造も中世の遺構として問題はないと思われる（中尾七重 2012）。

第15表　出土遺物集計表

（　）未成品

	縄文早期土器	縄文中期土器	縄文後期土器	縄文中～後	中世陶器	石鏃	石槍	石錐	石匙	スクレイパー	磨製石斧	局部磨製石斧	打製石斧	砥石	磨石	敲石	礫器	石皿	凹石	石核	剝片	軽石
SI 1			1150			1		1		1							2	1			27	
SK 1			4																			
SK 2																						
SK 3				23																		
SK 4				10																		
SK 5			45												2							
SK 6																						
SK 7																						
SK 8																						
SK 9		90													4		1	1				1
SK10		20																			22	
SK11		2	10	45																		
SK12														1	1			4				
SK13																						
SK14			60	18											1							
SK15			11	4																		
SK16																						
SK17																						
SK18				4																		
SK19																						
SK20			61																			
SK21			98												2							
SK22				86																		
SK23																						
SK24	1		47												1							
SK25																						
SK26	1	5		10																		
SD 1	176		34	2937		2 (1)		1	1		2	2	2		6	1	20		1	1	20	2
SU 1	986			317		3			2	3	(1)	1	2		3	2	2				50	
SP56																					28	
SP70															1				2			
SP71																					4	
SP77				12																		
SP79							1															
SP80				7																		
SP81				2																		
表土	24	9	18	904	1	1	1	1	1						1							
小計	1188	126	1538	4379	1	8	2	3	4	4	3	3	4	1	22	3	25	6	3	1	151	3

	土　偶	円盤状土製品	有孔円盤状土製品	腕輪形土製品	ミニチュア土器	骨角器（針状）	鉄片	近・現代 陶片	小計
SI 1	1	10			2				1196
SK1		1							5
SK2									
SK3									23
SK4									10
SK5									47
SK6									
SK7									
SK8									
SK9						1			98
SK10									42
SK11					1				58
SK12									6
SK13									
SK14		3							82
SK15									15
SK16									
SK17									
SK18									4
SK19									
SK20	1				1				63
SK21		2			1				103
SK22									86
SK23									
SK24		2							51
SK25									
SK26									16
SD1		15	1	1	2				3228
SU1		5							1377
SP56									28
SP70									3
SP71									4
SP77									12
SP79									1
SP80									7
SP81									2
表土		1					3	1	966
小計	2	39	1	1	7	1	3	1	

合計：7533 点

引用・参考文献

相原淳一　1990　「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年」　考古学雑誌76巻1号

飯村　均　1995　「東北諸窯」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会

伊東信雄　1940　宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告　奥羽資料調査部

伊東信雄　1952　「古代史」『宮城県史1』　宮城県

岩手県教育委員会　1998　岩手の貝塚　岩手県文化財調査報告第102集

上田吉幸　他編　2003　『新北のさかなたち』　北海道新聞社

及川　洵　1972　「成形方法を示す早期縄文土器の一例」　考古学雑誌57巻3号

及川　洵　金子浩昌　他　1974　門前貝塚　陸前高田市教育委員会

及川　洵　1978　「関谷洞窟」　『大船渡市史第1巻』　大船渡市

小田野哲憲　1987　「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告第5号』

熊谷　賢　2001　『中沢浜貝塚1997－骨角器・自然遺物編』　陸前高田市教育委員会

熊谷常正　1983　「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『岩手県立博物館研究報告第1号』

熊谷常正　1986　「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究報告第4号』

熊谷常正　1989　「岩手県の早期後半から前期初頭の土器群について」『第4回縄文文化検討会シンポジュウム』

熊谷常正　2008　「縄文条痕文系土器（東北地方）」『総覧　縄文土器』　同刊行会

小井川和夫　岡村道雄編　1986・1987　『里浜貝塚Ⅴ・Ⅵ　宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究』　東北歴史資料館

国生　尚　1984　川内遺跡発掘調査報告書　岩手県埋文センター文化財報告書82集

後藤勝彦　他　1968　関谷洞窟　大船渡市教育委員会

齋藤報恩会　1991　宝ケ峯

酒井敬一　1986　『南三陸の沿岸魚』　志津川町

佐藤正彦　2003　川内遺跡発掘調査報告書　陸前高田市教育委員会

佐藤正彦　熊谷　賢　高橋和也　1999　『中沢浜貝塚1997－遺構・土器・土製品・石器編』　陸前高田市教育委員会

鈴木克彦　2001　「岩手県の後期前葉土器の編年」　岩手考古学第13号

鈴木克彦　2001　北日本の縄文後期土器編年の研究　雄山閣

鈴木克彦　2003　「宝ケ峯式土器の研究」　縄文時代14号

鈴木克彦　2004　「華燭土器」　縄文時代15号

鈴木克彦　2004　「門前式土器様式の編年学的研究」　考古学雑誌88巻4号

鈴木克彦　2007　注口土器の集成研究　雄山閣

芹沢長介　林　謙作　1967　「岩手県蛇王洞洞穴」『日本の洞穴遺跡』　日本考古学協会

戸羽親雄　2009　『岩手の海産貝類』

中尾七重　2012　「古渡路遺跡の中世掘立柱建物について」　文化学園大学紀要　服装学・造形学研究43集

中村良幸　1979　立石遺跡　大迫町教育委員会

丹羽　茂　1989　「中期大木式土器様式」　縄文土器大観1　小学館

林　謙作　1990　「素山上層式の再検討」『伊東信雄先生追悼　考古学古代史論攷』

マリンピア松島水族館編　1993　『宮城の魚』　河北新報社

吉田泰幸　2008　「縄文時代における土製腕輪の研究」　古代文化59巻4号

吉田義昭　1960　門前貝塚　盛岡市公民館

陸前高田市史編集委員会編　1994　『陸前高田市史第一巻自然編』

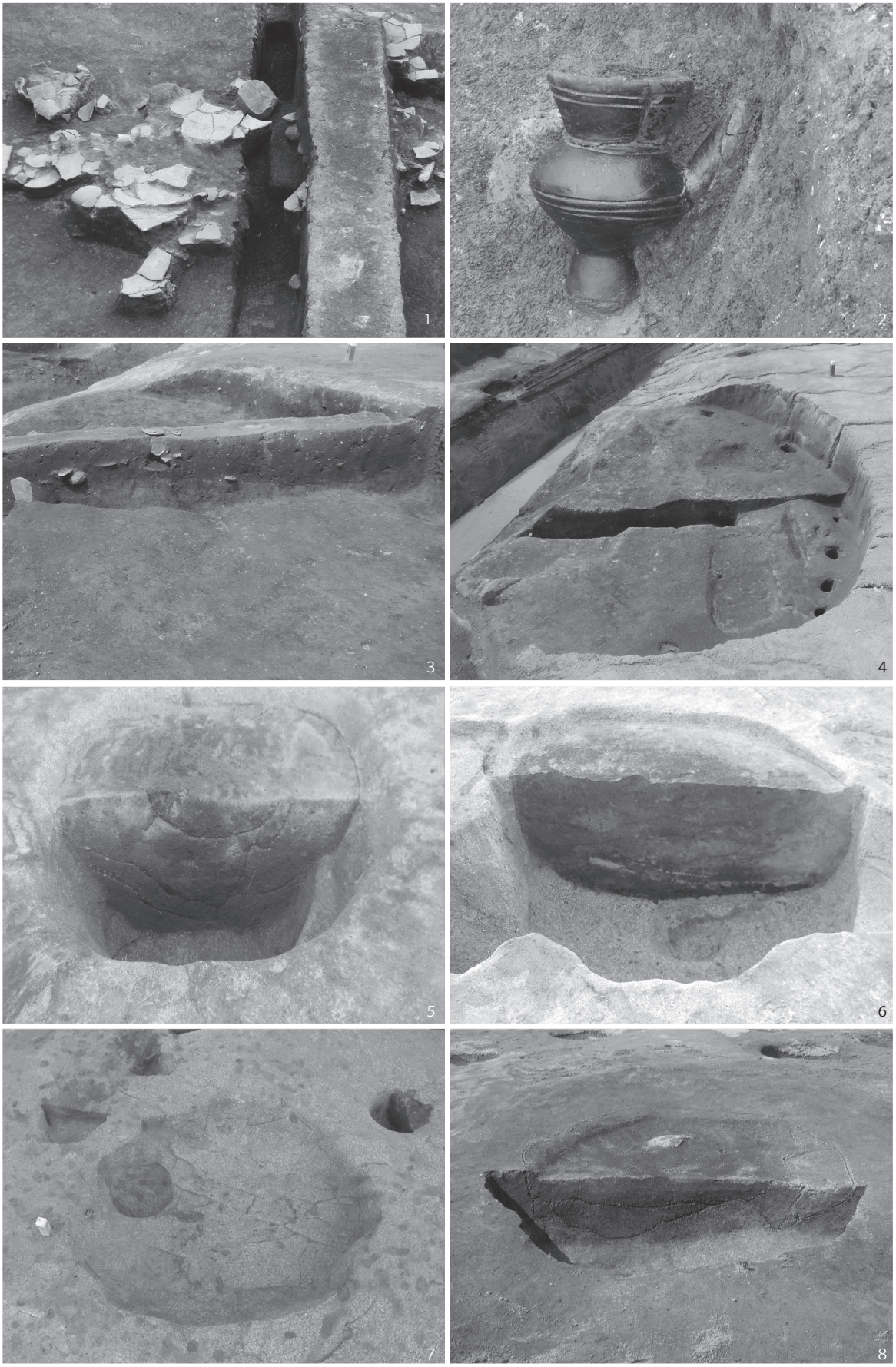
領家正浩　2008　「貝殻・沈線文系土器」『総覧　縄文土器』　同刊行会

図　　版

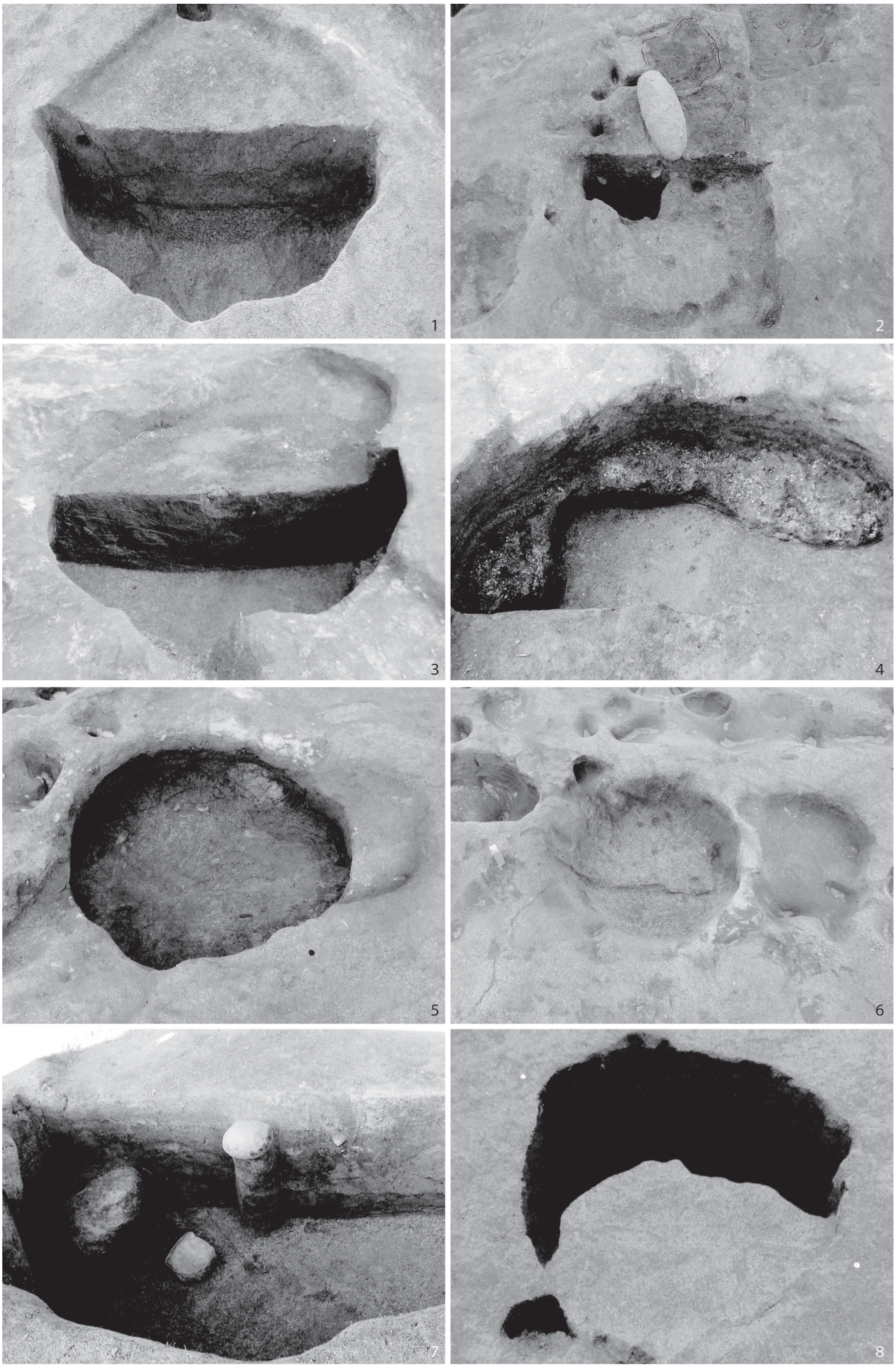
（1）　中沢遺跡と中沢浜貝塚（北より）　　平成 26 年 3 月 25 日

（2）　中沢遺跡全景（西より）　　平成 26 年 3 月 25 日

図　版　2

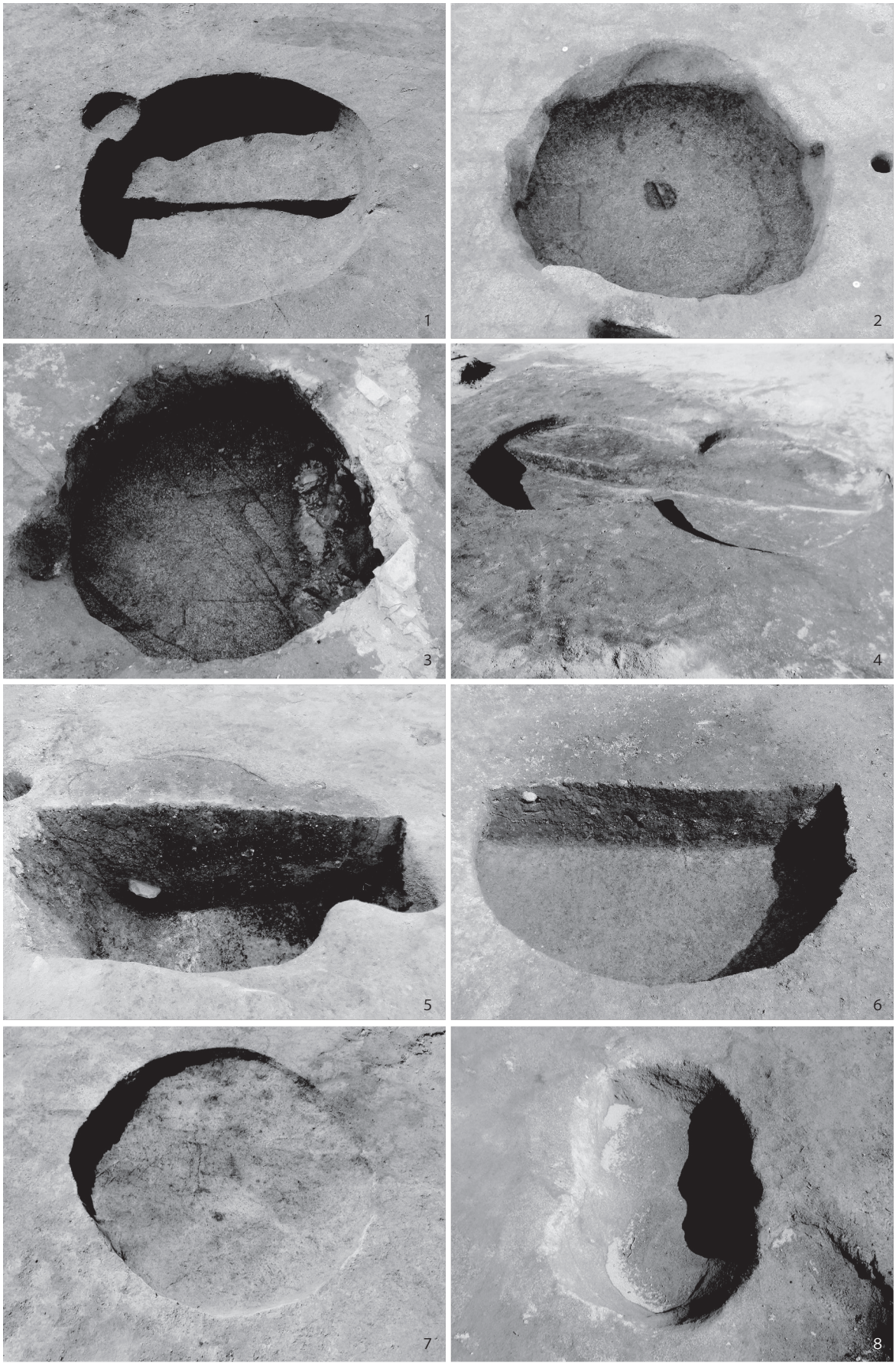


1 SI 1 遺物出土状況・2 SI 1 遺物出土状況・3 SI 1 土層・4 SI 1 全景・5 SK 1 土層・6 SK 4 土層・7 SK 5 全景・8 SK 6 土層

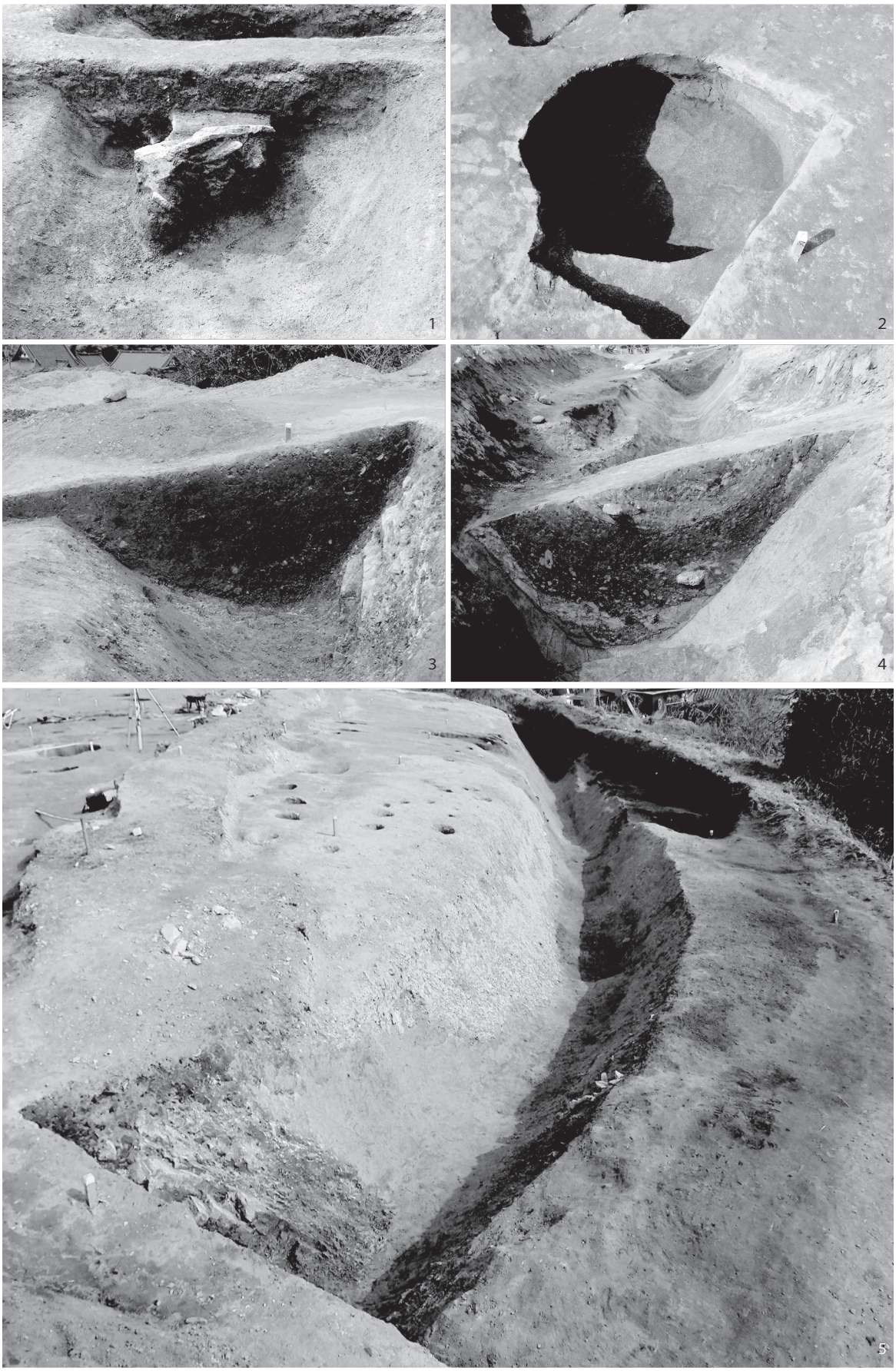


1 SK7土層・2 SK8土層・3 SK9土層・4 SK9貝層・5 SK9全景・6 SK10全景・7 SK12土層・8 SK12全景

図　版　4



1 SK13 全景・2 SK14 全景・3 SK15 全景・4 SK16.17 全景・5 SK20 全景・6 SK21 全景・7 SK22 全景・8 SK23 全景

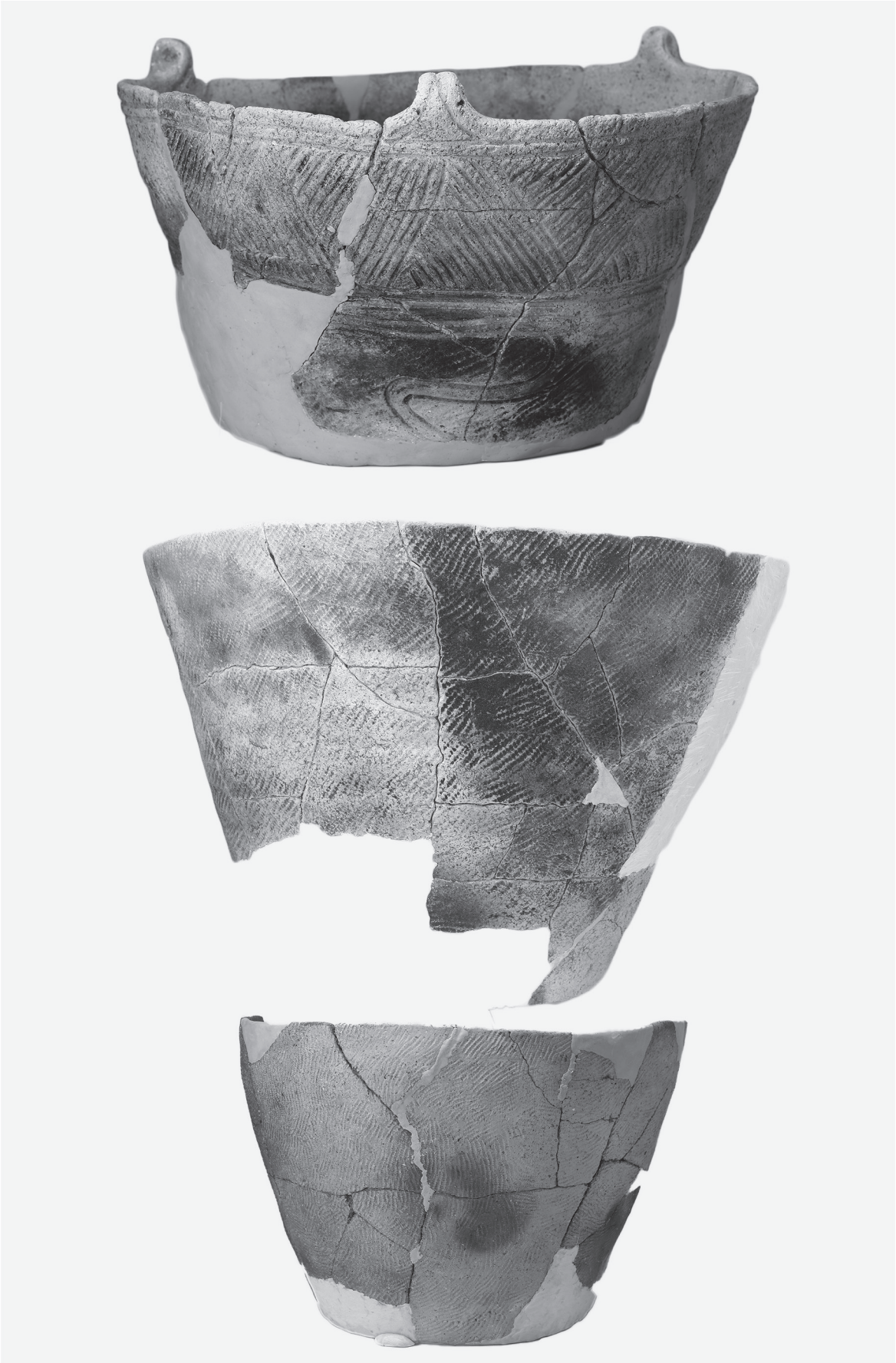


1 SK24 遺物・2 SK26 全景・3 SD 1 西端土層・4 SD 1 東端土層・5 SD 1 全景（西より）

図　版　6

（1）　SB 1 北西部（西より）

（2）　SU 1 土層断面（南より）



SI 1 出土縄文土器

図　版　8

SI 1 出土縄文土器

（1） SI 1 出土石器・土製品

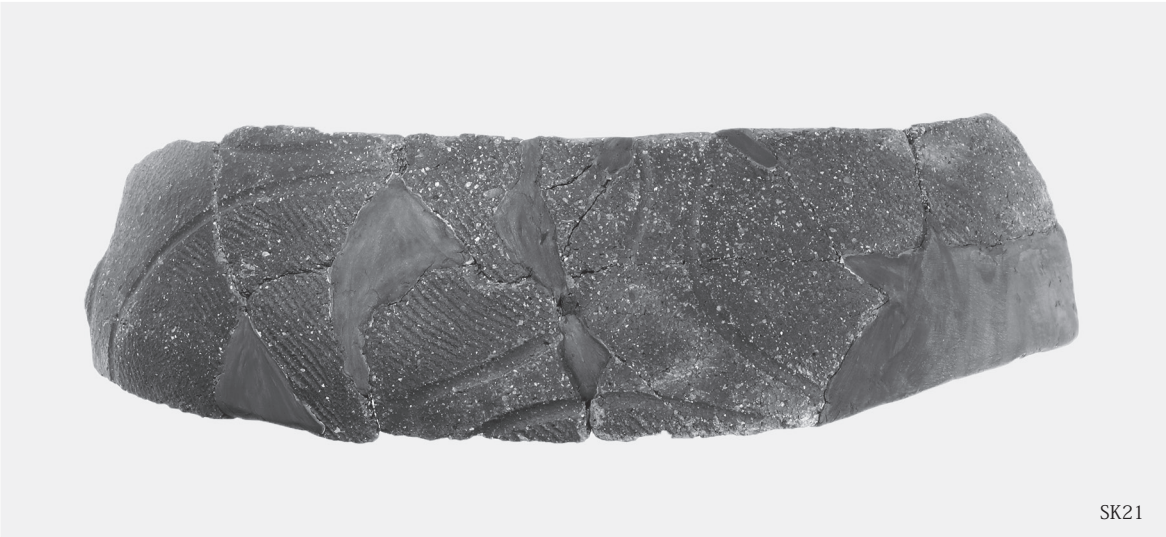
（2） SK 9 出土縄文土器

図　版　10

SK９出土縄文土器・石器・釣針

SK12 出土石皿・磨石・砥石

図　版　12

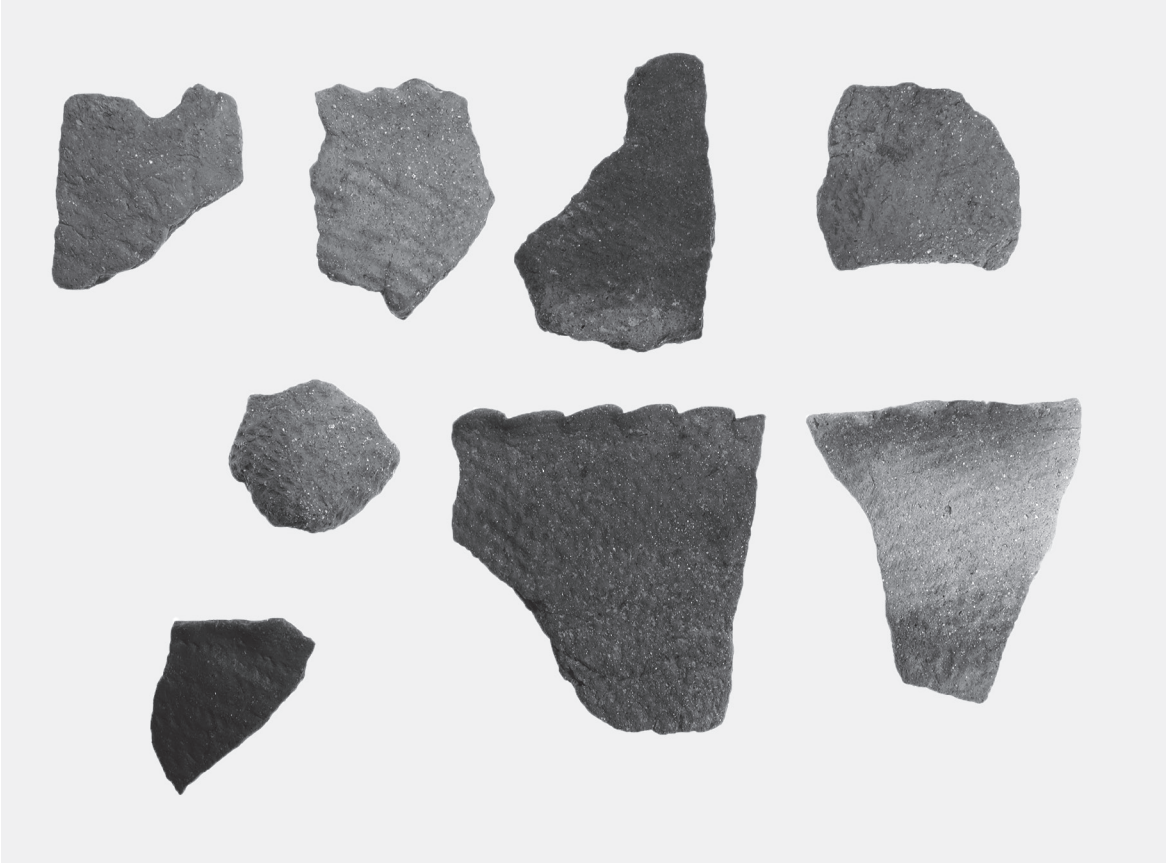


SK14・SK20・SK21 出土縄文土器・土製品・土偶

SK24 出土縄文土器

図　版　14

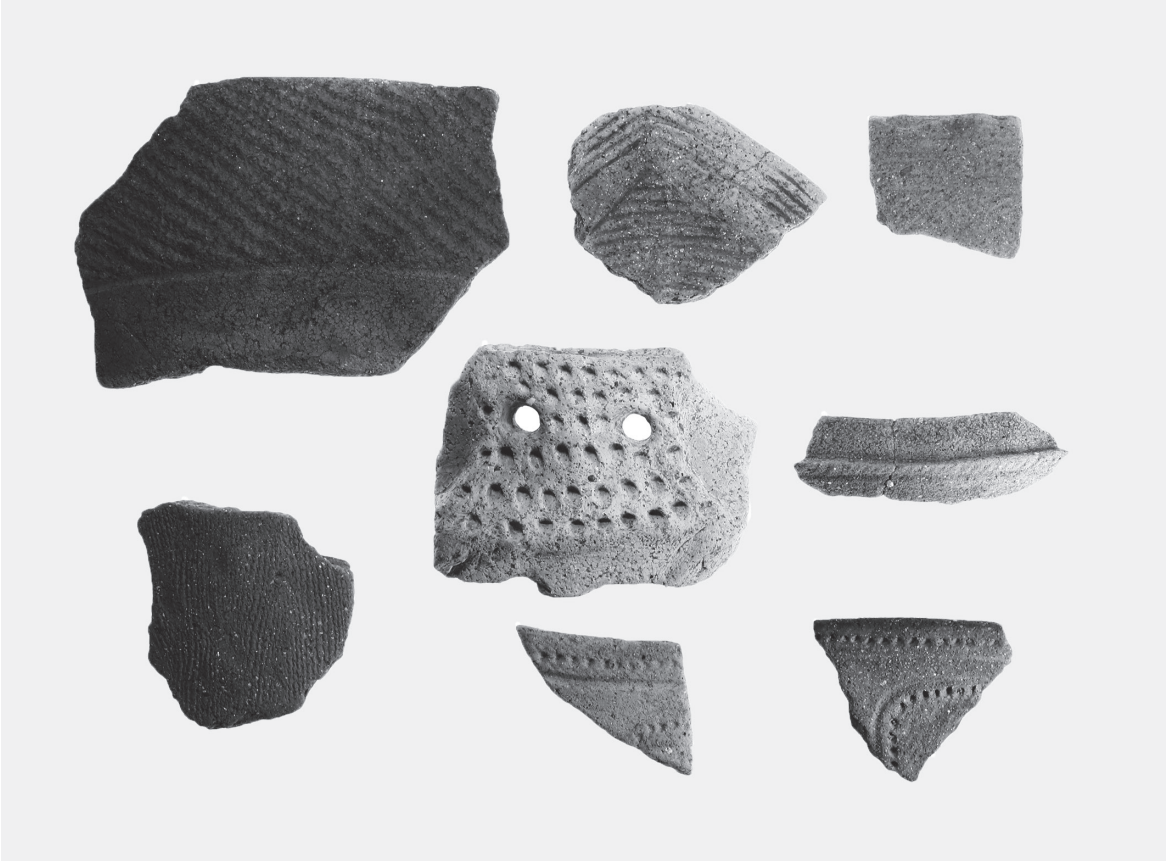
SD 1 出土縄文土器



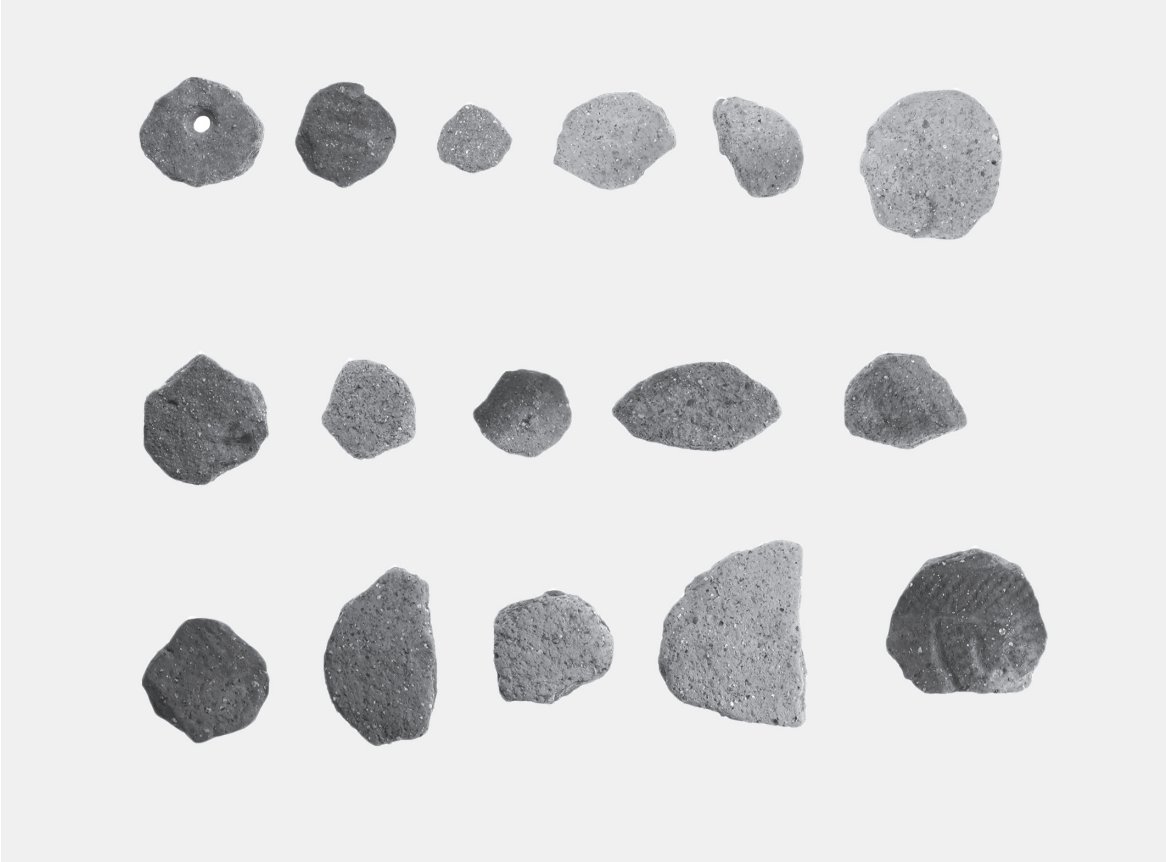
（1） SD 1 出土縄文土器（表）

（2） SD 1 出土縄文土器（裏）

図　版　16



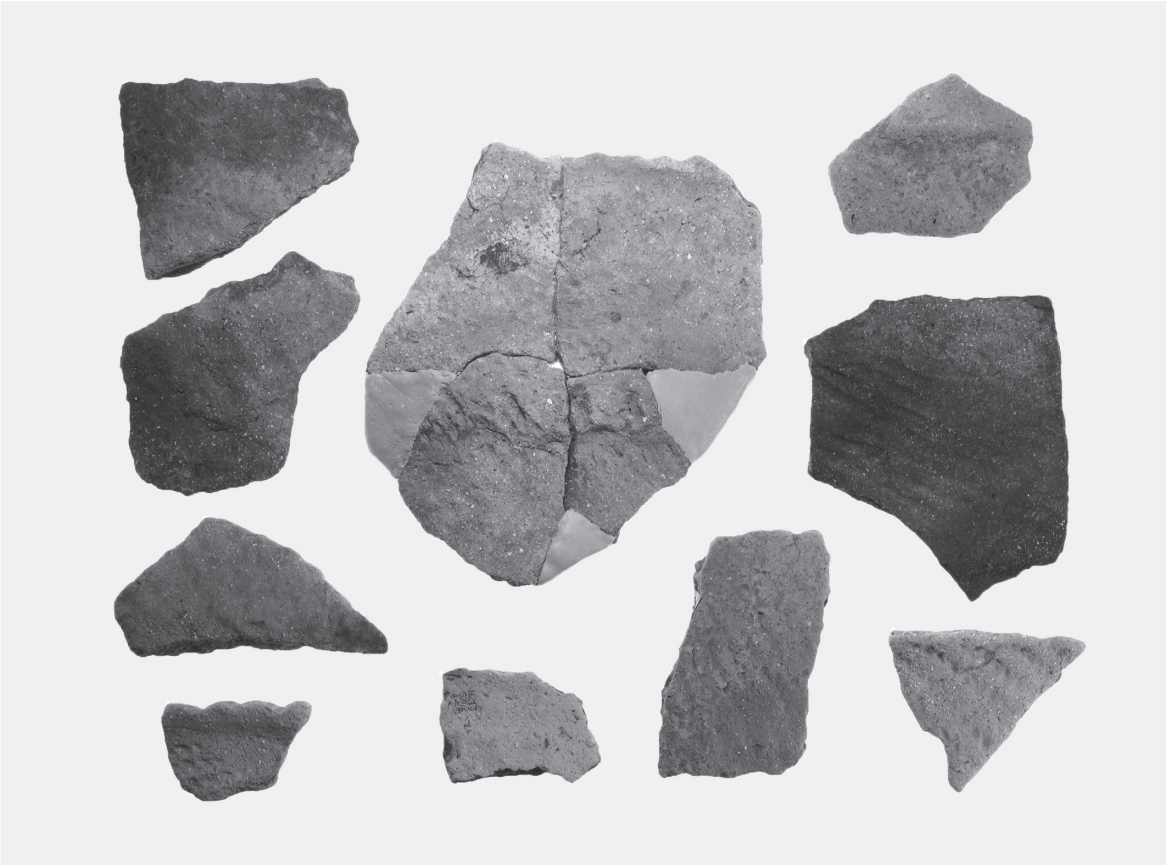
（1）　SD 1 出土縄文土器



（2）　SD 1 出土土製品

SD 1 出土石器・腕輪形土製品

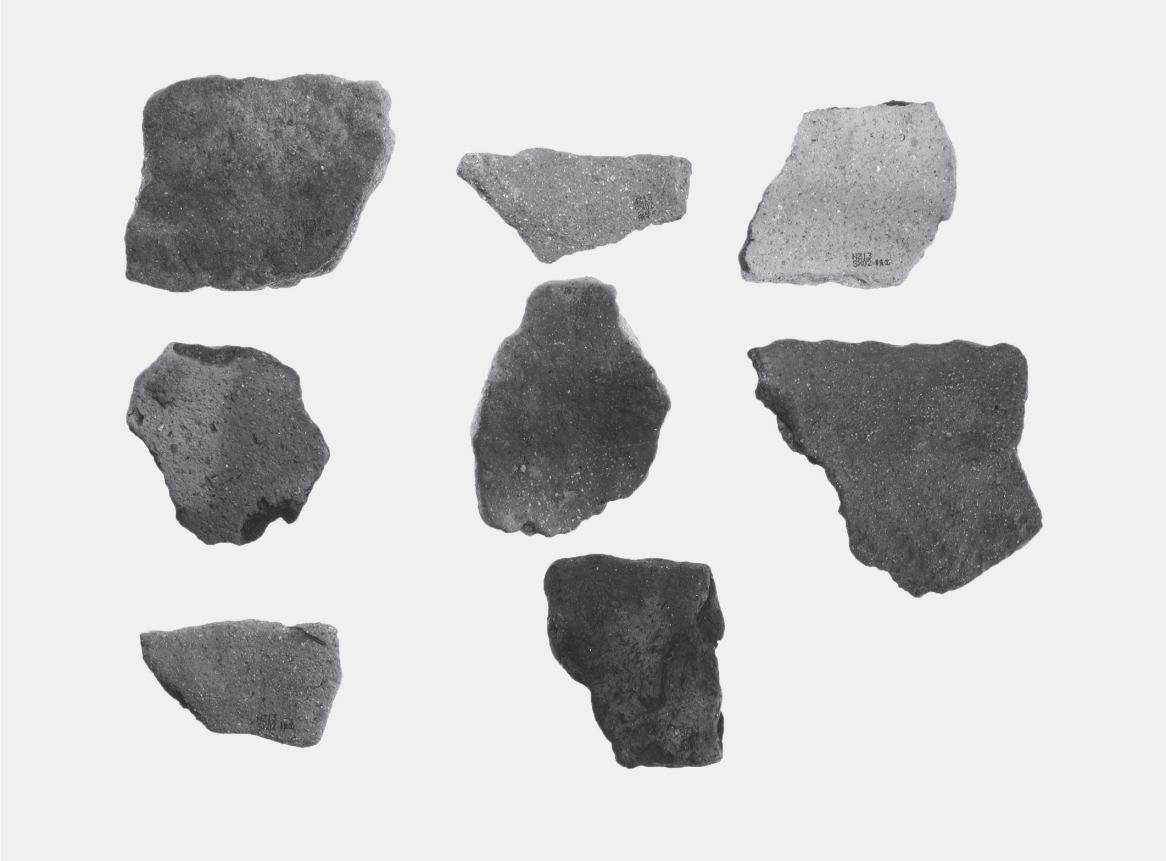
図　版　18



（1）　SU 1 出土縄文土器（表）

（2）　SU 1 出土縄文土器（裏）

（1）　SU 1 出土縄文土器（表）

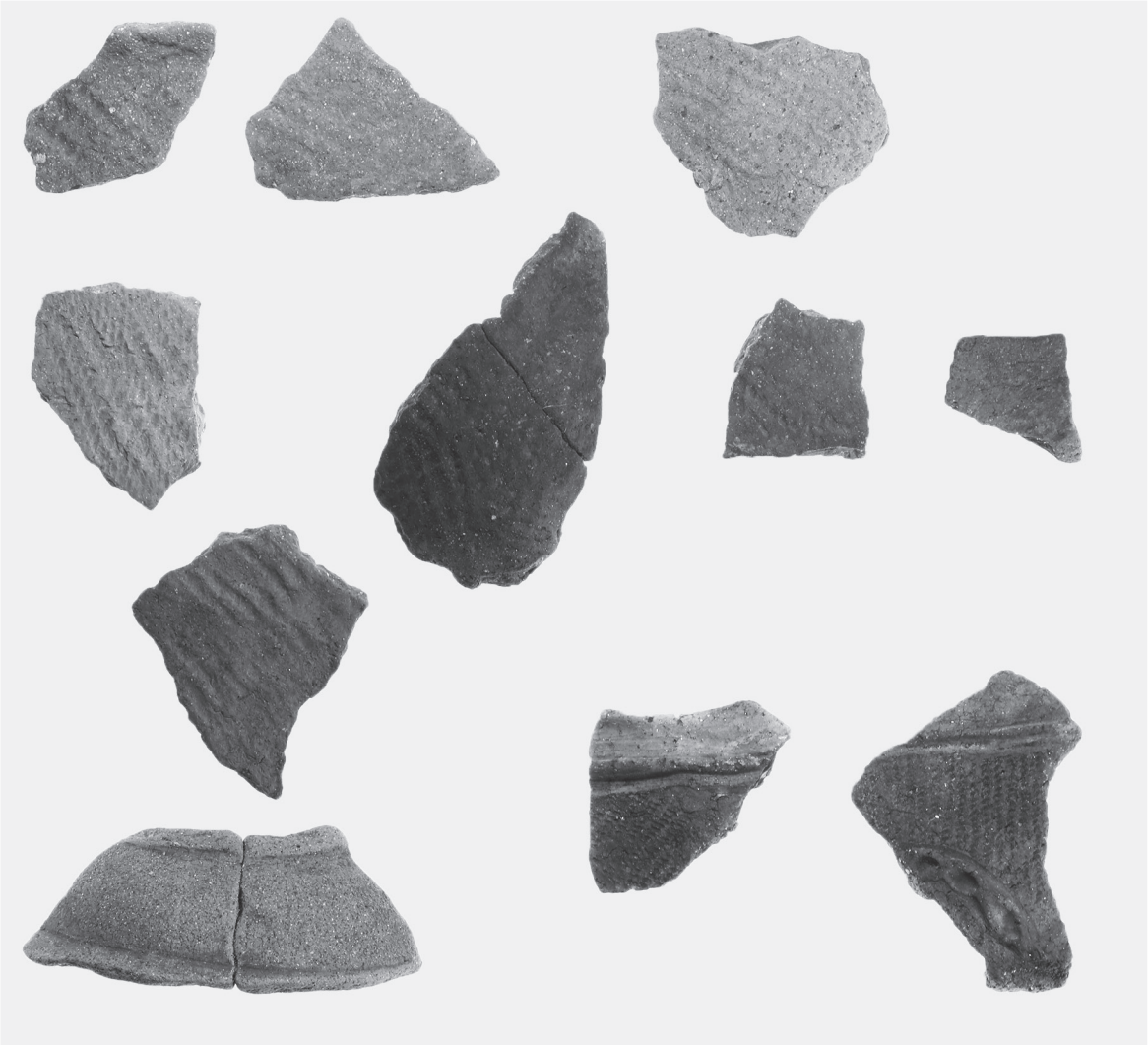


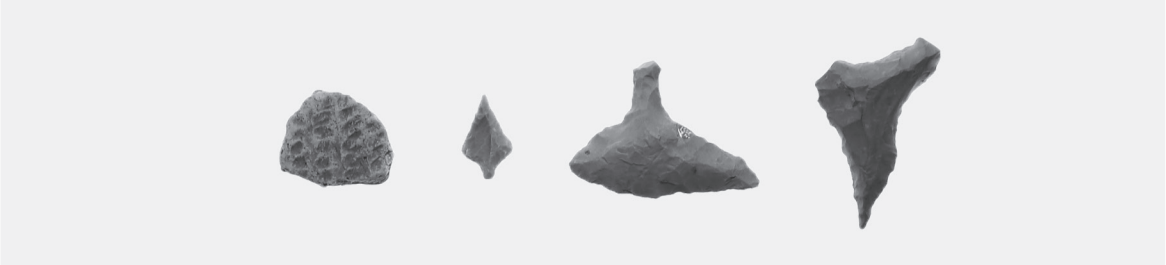
（2）　SU 1 出土縄文土器（裏）

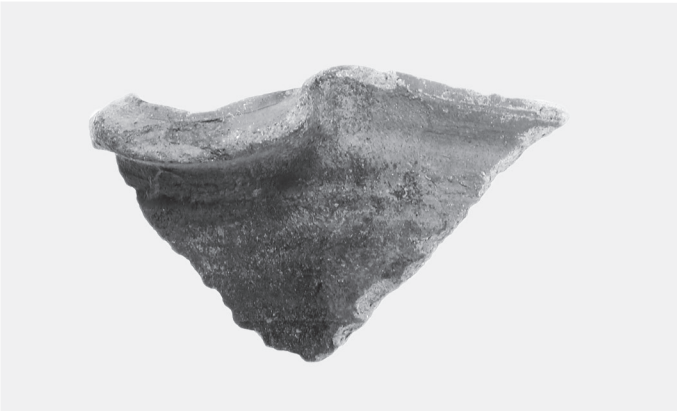
図　版　20

（1）　SU 1 出土石器

（2）　SU 1 出土石器

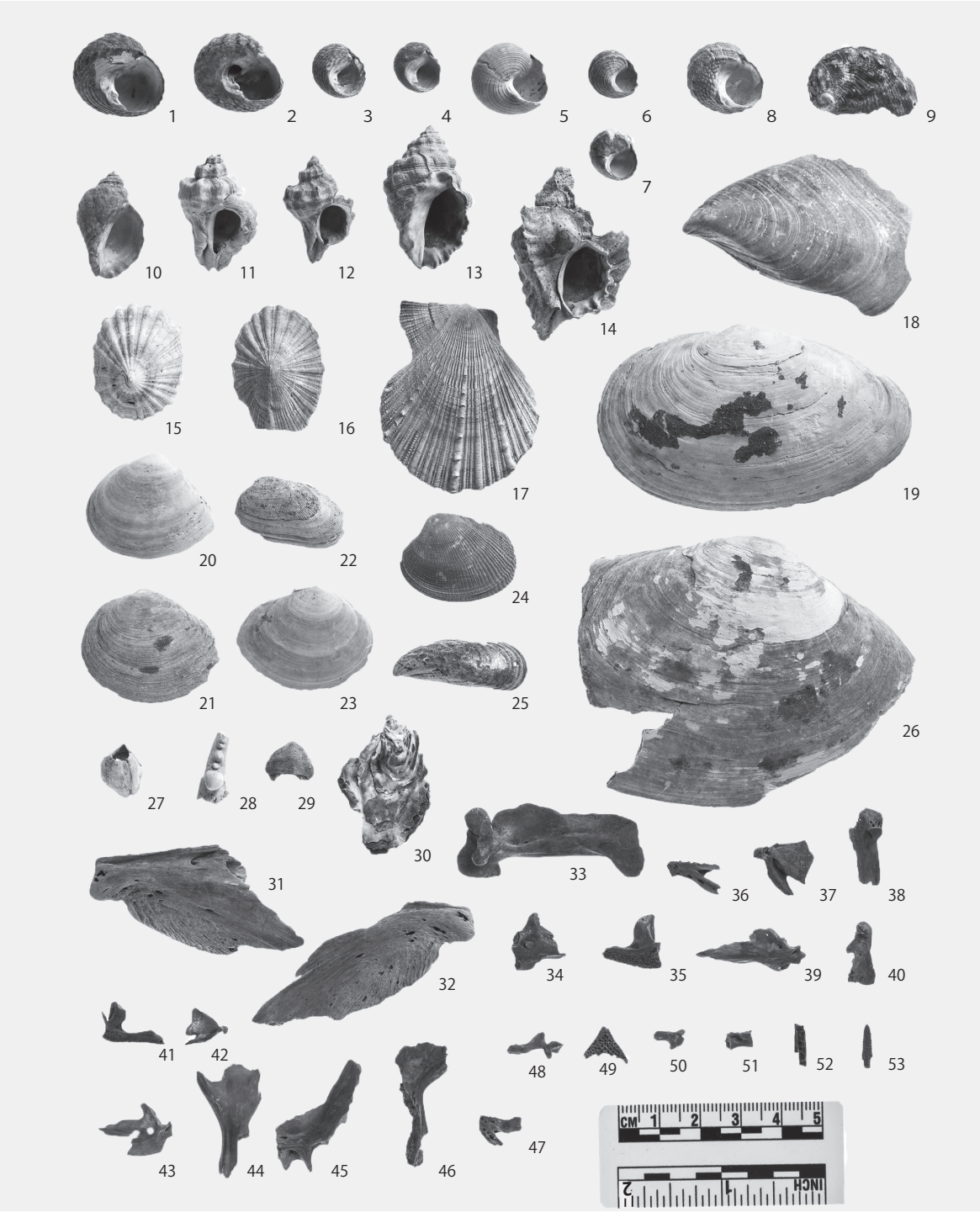






表土出土の縄文土器・土製品・石器・中世片口鉢

図　版　22



SK 9 動物遺存体

1.クボガイ　2.コシダカガンガラ　3.イシダタミ　4.クロヅケガイ　5.エビスガイ　6.タマキビ　7.クロタマキビ　8.スガイ　9.ミミガイ科　10.チヂミボラ　11.オウウヨウラク　12.エゾヨウラク　13.イボニシ　14.ヒレガイ　15.ユキノカサガイ　16.サルアワビ　17.アズマニシキ　18.イガイ　19.オオノガイ　20.ヒメシラトリ　21.シラトリモドキ　22.カリガネエガイ　23.シオサザナミ科　24.アサリ　25.ムラサキインコ　26.ミルクイ 27.アカフジツボ　28.十脚目　29.新ヒザラガイ目　30.マガキ

31～32.ブリ属歯骨　33～34.マダイ亜科（33.主上顎骨　34.角骨）35.スズキ属前上顎骨 36～40.アイナメ属（36.歯骨　37.方骨 38.間鰓蓋骨　39.角骨　40.上舌骨）41～45.カサゴ亜目（41.前上顎骨　42.方骨　43.角骨　44.擬鎖骨　45.前鰓蓋骨）46～49.ウミタナゴ科（46.擬鎖骨　47.歯骨　48.主上顎骨　49.下咽頭骨）50～51.サバ属（50.主上顎骨　51.腹椎）　52.タラ科前上顎骨　53.エイ上目尾棘

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なかざわいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	中沢遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	陸前高田市文化財調査報告
シリーズ番号	第 31 集
編 著 者 名	佐藤典邦　松崎哲也　山﨑　健　山田凜太郎
編 集 機 関	陸前高田市教育委員会
所　在　地	〒029－2292　岩手県陸前高田市高田町字鳴石 42－5　TEL:0192-54-2111
発行年月日	2017 年 3 月 31 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調 査 期 間	調査面積　㎡
なかざわいせき 中 沢 遺 跡	いわてけん りくぜんたかたし 岩手県陸前高田市 ひろたちょうあざなかざわ 広田町字中沢 7-7 ・7-8 他	03210	NF88－1278	38° 57′ 23″	141° 41′ 34″	2013 年 12 月 5 日～12 月 26 日 2014 年 1 月 7 日～3 月 31 日	1637.47 ㎡

調 査 原 因	防災集団移転促進事業（泊地区）に伴う事前発掘調査

所収遺跡名	種 別	主 な 時 代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
中 沢 遺 跡	散布地	縄文時代 中　　世	竪穴住居跡　1 棟 土　　坑　26 基 掘立柱建物跡　1 棟 柵　　列　4 基 溝　　1 条 ピット　86 個 遺物包含層　1 ヵ所	縄文時代早期表裏縄文・中期大木 9 式・後期宝ヶ峯式土器	縄文早期後葉の土器資料が纏まって出土している。 縄文中期後葉の土坑に貝層が残存していた。 中世の掘立柱建物跡と空堀と考えられる溝が検出されている。

陸前高田市文化財調査報告　第31集

中沢遺跡発掘調査報告書

印刷　平成29年3月24日

発行　平成29年3月31日

編集・発行　陸前高田市教育委員会

〒029－2292　岩手県陸前高田市高田町字鳴石42－5

TEL:0192－54－2111

印刷　有限会社　第一印刷

〒029－2203　岩手県陸前高田市竹駒町字相川1－1

TEL:0192－55－5155